

よし　たけ

吉武遺跡群

X VII

飯盛・吉武園場整備関係調査報告書 11

— 古墳時代生活遺構編 2 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第864集

2005

福岡市教育委員会

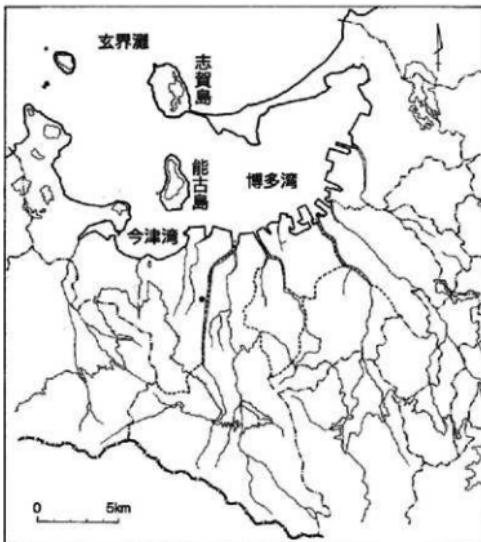
吉武遺跡群

XVII

飯盛・吉武圃場整備関係調査報告書 11

—古墳時代生活遺構編 2 —

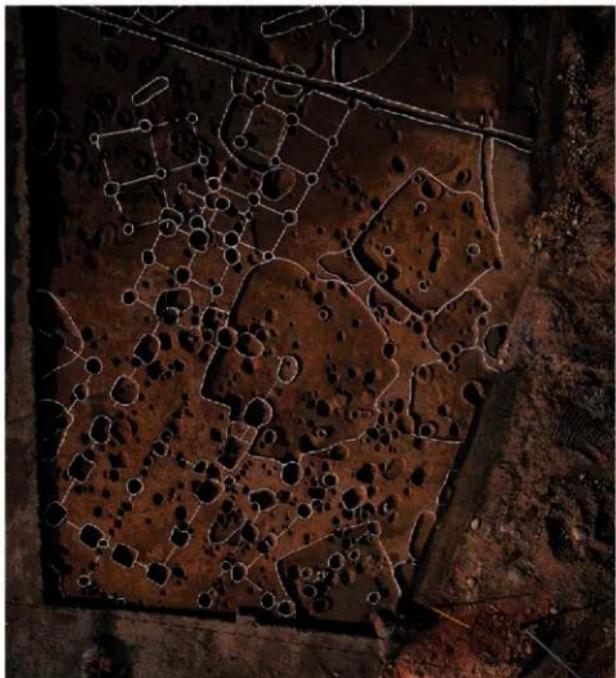
福岡市埋蔵文化調査報告書第864集



遺跡番号 YST9
調査番号 8535

2005

福岡市教育委員会



1・4区 柱立建物群（南から）



2.SK132 出土状況（北から）

序

古来より大陸文化流入の門戸であった福岡市域には、中国大陆、朝鮮半島をはじめとする東アジア地域との長い交流を示す多くの遺跡が残されています。

ここ福岡市西郊の早良平野では、平野を北流して博多湾に注ぐ室見川の中・下流域を中心として旧石器時代から古代までの多くの遺跡が形成されており、なかでも吉武遺跡群は弥生時代の中心をなす遺跡と考えられています。

さて、今年度報告いたしますのは、同地域の圃場整備事業に伴い、昭和60年度に発掘調査を行った吉武遺跡群第9次調査の、古墳時代竪穴住居群についての集落生活遺構についての成果であります。

これらは本地域の山麓に広く分布する古墳群を支えた集落として歴史的に非常に重要な位置を占めるものと考えられます。

最後になりますが、本報告書が市民の皆様の文化財に対する認識とご理解につながり、また、学術の分野に貢献することができましたならば幸甚に存じます。

また、本報告書の作成にあたりご協力をいただきました関係者の方々に対し、心よりの感謝の意を表する次第であります。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 植木 み子

例　言

1. 本書は、飯盛・吉武地区土地改良事業に伴い発掘調査を実施した、福岡市西区大字吉武・飯盛地区内に所在する『吉武遺跡群』の第9次調査の古墳時代集落の竪穴住居群を除いた生活遺構についての報告書である。
2. 発掘調査は、昭和60年度(1985)、福岡市教育委員会が実施した。
3. 調査で検出した各遺構は、土壙(SK)、溝状遺構(SD)、竪穴住居跡(SC)、掘立柱建物(SB)、柱穴(SP)、斐棺墓(K)、の様に頭に記号を付して呼んだ。
4. 本書に掲載した遺構実測図は、調査担当者及び調査補助員の他、西日本航業株式会社に作成委託した航空測量図を併用した。図中の数字は絶対高である。
また、遺物実測図は、井上加代子・平川敬治で作成した。
遺物復元は、国武真理子・木村厚子・芦馬恵美子で行った。
5. 本書に使用した図面類の整図および製図は、調査担当者の他に撫養久美子・安野　良・副田則子・名取さつき・遠藤謙で行った。
6. 本書に使用した遺構写真は、下村　智(現別府大学助教授)の他、力武卓治・常松幹雄が担当し、全景は稻富興産(当時)・西日本航業株式会社による。
遺物写真については加藤良彦が担当した。
7. 本書に使用した方位は旧国土座標第2系による座標北である。磁北はこれに $6^{\circ} 10'$ 西偏する。
8. 本書に使用した時期区分は小田富士雄編年による。
9. 本書の執筆・編集は、加藤が行った。
10. 本書に収録された出土遺物、写真、図面などの記録類は、平成16年度に埋蔵文化財センターに本収蔵の予定である。
11. 表紙題字は、元埋蔵文化財センター杉山悦子氏にお願いした。記して感謝します。

本文目次

第一章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査の組織.....	1
第二章 遺跡の立地と環境.....	4
第三章 第9次調査の記録.....	8
1. 調査概要.....	8
2. 1～3区の土壤.....	9
1). 前期の土壤.....	10
2). I・II期の土壤.....	12
3). III期の土壤.....	51
4). IV期の土壤.....	55
3. 1～3区の掘立柱建物.....	57
1). I・II期の建物	57
2). III期の建物	62
3). IV期の建物	65
4. 1～3区の溝.....	66
1). I・II期の溝	66
2). III期の溝.....	67
3). IV期の溝.....	67
5. 2号支線道路区.....	71
6. 2号排水路1・2区.....	71
7. 4区.....	72
8. その他の遺物.....	72
第四章 おわりに	74

挿図目次

Fig. 1	早良平野古墳時代集落分布図 (1/30,000)	5
Fig. 2	吉武遺跡群調査区配置図 (1/5,000)	6
Fig. 3	調査区地形図 (1/2,500)	7
Fig. 4	1~3区土壤分布図 (1/1,000)	9
Fig. 5	SK24・K204実測図 (1/50・1/20)	10
Fig. 6	SK24・K204出土遺物実測図 (1/6・3~14-1/1・15~16-1/4)	10
Fig. 7	SK75実測図 (1/100)	11
Fig. 8	SK75出土遺物実測図.1 (1/4)	13
Fig. 9	SK75出土遺物実測図.2 (1/4・67-1/3)	14
Fig. 10	SK25・26・37実測図 (1/60)	16
Fig. 11	SK25出土遺物実測図 (1/4・106, 107-1/3)	17
Fig. 12	SK26出土遺物実測図 (1/4・113-1/6)	18
Fig. 13	SK37出土遺物実測図 (1/4)	19
Fig. 14	SK02・27・29実測図 (1/60)	21
Fig. 15	SK02出土遺物実測図 (1/4)	22
Fig. 16	SK27・29出土遺物実測図 (1/4)	23
Fig. 17	SK95・96・105実測図 (1/50)	24
Fig. 18	SK95・96出土遺物実測図 (1/4・206~208-1/3)	25
Fig. 19	SK105出土遺物実測図 (1/4・227-1/3)	26
Fig. 20	SK130・131・135実測図 (1/60)	27
Fig. 21	SK130出土遺物実測図 (1/4・239-1/6・250・251-1/3)	28
Fig. 22	SK131出土遺物実測図 (1/4・269-1/6)	29
Fig. 23	SK135出土遺物実測図 (1/4・295-1/6・296-1/3)	30
Fig. 24	SK13・33実測図 (1/50)	31
Fig. 25	SK13・33出土遺物実測図 (1/4・312-1/3)	32
Fig. 26	SK118・190・183実測図 (1/60)	33
Fig. 27	SK118・190出土遺物実測図 (1/4)	34
Fig. 28	SK183出土遺物実測図 (1/4・351-1/3)	35
Fig. 29	SK161・167・168・197実測図 (1/60)	37
Fig. 30	SK161・197出土遺物実測図 (1/4・362~364・379-1/3)	38
Fig. 31	SK167・168出土遺物実測図 (1/4・390-1/3)	39
Fig. 32	SK168出土遺物実測図 (1/4・414・415・417-1/6・421-1/1・422・423-1/3)	40
Fig. 33	SK201・198実測図 (1/60)	42
Fig. 34	SK201出土遺物実測図.1 (1/4)	43
Fig. 35	SK201出土遺物実測図.2 (1/4・449-1/6)	44
Fig. 36	SK201・198出土遺物実測図 (1/4・463~465, 480, 481-1/3)	45
Fig. 37	SK出土石製品・鉄滓実測図 (1/6・391・468~470-1/3)	46

Fig.38	SK214実測図(1/50)	46
Fig.39	SK214出土遺物実測図.1 (1/4・494～496-1/6)	47
Fig.40	SK214出土遺物実測図.2 (1/4・508・509-1/6・510-1/1)	48
Fig.41	SK17・18・100・132・159実測図 (1/60)	49
Fig.42	SK17出土遺物実測図 (1/4・537～540-1/3)	50
Fig.43	SK18・100・159出土遺物実測図 (1/4)	51
Fig.44	SK93・252・253実測図 (1/100)	53
Fig.45	SK93・252・253出土遺物実測図 (1/4・578・579-1/3)	54
Fig.46	1～3区SB・SD分布図 (1/1,000)	55
Fig.47	SB36・45・50・51・52・57・63実測図 (1/100)	56
Fig.48	I・II期SB出土遺物実測図 (1/4)	57
Fig.49	SB21・23・22・12・09・10・40実測図 (1/100)	58
Fig.50	SB44・43・53・54・55・58実測図 (1/100)	59
Fig.51	III期SB出土遺物実測図 (1/4)	60
Fig.52	SB19・16・39・34・33・56実測図 (1/100)	61
Fig.53	VI期SB出土遺物実測図 (1/4)	62
Fig.54	SD04・20・41出土遺物実測図(1/4・630-1/3-641-1/6)	63
Fig.55	SD41・44・45出土遺物実測図(1/4・651・652・674-1/3)	64
Fig.56	2号支線道路区遺構分布図(1/300)	66
Fig.57	SB206・207・出土遺物実測図(1/100・1/4)	66
Fig.58	2号排水路区遺構分布図	67
Fig.59	2号排水路1・2区遺構実測図	68
Fig.60	4区遺構分布図 (1/200)	69
Fig.61	SB401・402・出土遺物実測図(1/100・1/4)	70
Fig.61	その他の遺物実測図(1/4・689～691-1/1-692～705-1/3)	73

図版目次

PL.1	1. 3区・飯盛山遠景（東から）	PL.11	K204・SK75出土遺物
	2. 1・2区全景（南から）	PL.12	SK25・26・37出土遺物
PL.2	1. K204（北西から）	PL.13	SK02・27・95・96・105・130出土遺物
	2. SK25・26（南から）	PL.14	SK131・135出土遺物
PL.3	1. SK26遺物出土状況（南西から）	PL.15	SK13・33・118・190・183・161・197出土遺物
	2. SK37遺物出土状況（北西から）	PL.16	SK167・168出土遺物
PL.4	1. SK105遺物出土状況（西から）	PL.17	SK201・198出土遺物
	2. SK33滑石製紡錘車出土状況（南から）	PL.18	SK214出土遺物
PL.5	1. SK168遺物出土状況（南西から）	PL.19	SK17・18・100・159・253・SB19・401・21出土遺物
	2. SK201遺物出土状況（南から）	PL.20	SD41・44・45・その他の出土遺物
PL.6	1. SK214遺物出土状況（東から）		
	2. SB52・55・57・59・SK198・201他（南から）		
PL.7	1. SD05・06・SB10・12他（東から）		
	2. SB33・54・56・57・SK252・SD44他（南から）		
PL.8	1. SB44・43（手前より・西から）		
	2. SB39・40他（南から）		
PL.9	1. SB33・34他（東から）		
	2. SD44・45・SK252・SB56（南から）		
PL.10	1. 2号支線道路区（南から）		
	2. 2号支線排水路2区（西から）		

表 目 次

Tab.1	吉武遺跡群調査一覧表	4
Tab.2	土壤度数分布表	75
Tab.3	建物度数分布表	75
Tab.4	建物方位分布表	75
Tab.5	関連建物出土構造一覧表	75
Tab.6	第9次調査土壤一覧表(1)	79
Tab.7	第9次調査土壤一覧表(2)	80
Tab.8	第9次調査土壤一覧表(3)	81
Tab.9	第9次調査掘立柱建物一覧表	82
Tab.10	第9次調査溝一覧表	82

付図目次

- 付図. 1 吉武遺跡群第9次調査土壤分布図 (1/500)
付図. 2 吉武遺跡群第9次調査掘立柱建物・溝分布図 (1/500)
付図. 3 吉武遺跡群第9次調査古墳時代遺構分布図 (1/500)

第一章 はじめに

1. 調査に至る経過

吉武遺跡群は、昭和44年に行われた九州大学考古学研究室が行った分布調査とその後行われた市教育委員会による分布調査によって弥生時代～古墳時代の遺物が散布していることが知られていた。

本遺跡の本格的調査の開始は、昭和55年(1980)6月11日付で計画が明らかとなった「飯盛・吉武團体営圃場整備事業」の施工を契機とする。当時の教育委員会文化課と農林水産局農業構造改善部農業土木課は、この事業計画について遺跡遺存の状況を把握するための試掘調査などの必要な事項について事前の協議を進めた。

当初の事業計画は、総対象面積46.4haで、昭和55年度3.6ha、昭和56年度9.0haで、昭和57年度以降33.8haを順次整備していく計画であった。

この事業に伴う発掘調査は、各年度の規模が膨大であることと、当然ながら工事施工と調査が面的・時間的に重複するため、各年度の事業規模を設計変更などによって最低に絞り込むための定期的な協議が土地改良組合理事・農業土木担当者・文化課担当者の三者によって続けられた。

実際の発掘調査は、昭和56年度8.3haの内1.2ha、昭和57年度7.9haの内2.1haの調査を行ったが、調査の着手時期が割り入れ後の秋から始まる状況であり、また遺構密度も非常に濃いこともあって作業は年度末まで継続することになった。

続く昭和58年度は対象10.1haの内2.5ha、同59年度2.6ha、同60年度2.8haの発掘調査を行った。

調査では、旧石器包含層から「最古の王墓」とされた高木遺跡やこれに次ぐ有力者層の共同墓地であった大石遺跡・墳丘墓の埴輪遺跡などの弥生時代前期末～中期末期の豪族墓地の発見、帆立貝式前方後円墳である埴輪古墳と卓抜した量の陶質土器・初期須恵器を検出した古墳時代遺構群、氏寺と考えられる9～10世紀代の大規模遺構群など、他に例を見ない集約度で遺構が検出された。

2. 調査の組織

(昭和60年度)

【調査委託】農林水産局農業土木課、飯盛吉武地区土地改良組合

【調査主体】福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎

【調査総括】文化財部長 河野清一、文化課長 柳田純孝、埋蔵文化財第2係長 飛高憲雄

【調査庶務】埋蔵文化財第1係 岡島洋一・松延好文

【発掘調査】方武卓治・下村智・常松幹雄・加藤良彦

【発掘・整理補助員】田中克子、岩本陽児・溝口孝司(九州大学)、矢野健一(京都大学)、緒方俊輔(現高千穂町教育委員会)、樋口秀信・進藤敏雄(早稲田大学)

【発掘作業】村本健二、松田定実、溝口武司、池上宏、山下清作、平川謙一、沖浩人、吉岡勝美、辻繁一郎、川田初、橋哲也、亀川照義、北園論、小路永智明、末松一馬、藤島博、青柳貴子、青柳弘子、青柳洋子、池田由美、石橋洋子、井上カズ子、井上喜美子、井上清子、井上キヨ子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒデ子、井上麻智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、甲斐美佐江、川口シゲノ、岸田浩、木村厚子、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、倉光信子、倉光初江、小林恵美子、小林ツチエ、小柳和子、齊藤邦子、坂田セイ子、柴田常人、柴田タツ子、柴田春代、白坂フサヨ、末永鶴子、高田マサエ、滝良子、高松美智子、田中カヨ子、筒井ひとみ、土斐崎つや子、富崎栄子、富田マチ子、

富永ミツ子、舎川春江、永井鈴子、中島栄子、中牟田チエ子、中山サダ子、西山ヒデ子、能美須賀子、原ハナエ、西原春子、野下久美子、花畠照子、原幸子、原口マサ子、平田節子、平田美絵子、三角清子、宮原富代、宮崎泰子、矢富富士子、柳井順子、柳浦八重子、山口タツエ、結城千代子、吉岡朱美、吉岡津幾子、吉積ハル子、吉積フサノ、横溝恵美子、横溝チエ子、脇坂マキノ

【整理作業】芦馬恵美子、木村厚子、国武真理子、池田光太・井上愛子・片岡加奈子・横山恵（福岡大学）



第9次 調査風景

Tab. 1 吉武遺跡群 調査一覧

次数	調査番号	次數名	所 在 地	調査期間	積定面積(m ²)	担当者	報告書
1	8102	墳塚整備第1次	西区大字吉武字木名地内	19811101~ 19820315	12,000	一高圭司・小林義政 田中泰夫	②・⑤ ~⑦
2	8234	墳塚整備第2次	西区大字吉武盛地内	19820901~ 19830215	21,000	二宮忠司	②・⑥・⑦ ~⑨
3	8235	田・飯塚縁第1次	西区大字吉武字トイ地内	19830222~ 19830812	5,200	山崎薫雄	①
4	8335	墳塚整備第3次	西区大字吉武字桜町110地内	19840324~ 19840413	25,000	横山邦雄 下村 智	②・⑩~⑪
5	8415	田・飯塚縁第2次	西区大字吉武盛地内	19840531~ 19840701~	1,600	横石晋也	④
6	8416	墳塚整備第4次	西区大字吉武字高木194地内	19850326~ 19850631	26,000	横山邦雄 下村 智	②・⑥~⑧ ~⑩~⑪~⑫
7	8426	野方・金武縁第2次	西区大字吉武字三十六146地内	19850702~ 19850724	2,300	横山邦雄	③
8	8518	墳塚整備第5次	西区大字吉武字高木地内	19850801~ 19860331	470	横山邦雄	②・⑩~ ⑪~⑫~⑬
9	8535	墳塚整備第6次	西区大字吉武字大石地内	19860801~ 19860908	28,000	方丈卓治・下村 智 佐野新一・加藤良彦	②・⑩~⑪ ⑬~⑭~⑮
10	8650	墳塚整備第7次	西区大字吉武字大石30地内	19870227~ 19880301~	5,000	方丈卓治 佐野新一 横山邦雄	未刊
11	8662	野方・金武縁第6次	西区大字吉武盛地内	19880510~ 19880601~	23,000	佐野新一 横山邦雄	⑤
12	8714	野方・金武縁第7次	西区大字吉武字トイ地内	19880709~ 19880930~	2,810	佐野新一 横山邦雄	⑤
13	8752	墳塚整備第8次	西区大字吉武地内	19880301~ 19880331	1,000	方丈卓治 佐野新一 横山邦雄	未刊
14	8838	墳塚整備第9次	西区大字吉武高地内	19880725~ 19880916	724	山崎薫雄	未刊
15	9940	下水道第1次	西区大字吉武地内	19990906~ 19990908	37	大庭紀宜	未刊
16	0311	下水道第2次	西区大字吉武盛地内	20030509~ 20030518	62	松浦一之介	未刊
17	0363	史跡整備第1次	西区大字吉武地内	20040119~ 20040326	753	本田造二郎	未刊
18	0483	史跡整備第2次	西区大字吉武地内	20050126~ 開会中	宮井善朗	未刊	

- 〔該当報告書〕 ①『吉武遺跡群 I』市道田・飯塚縁關係文化財調査報告・福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集 1986
 ②『吉武高木I-1株生時代埋葬地の調査概要』福岡市埋蔵文化財調査報告書第143集 1988
 ③『吉武遺跡群I-2市道野方金武縁地内に伴う埋蔵文化財の調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集 1988
 ④『吉武遺跡群I-3市道野方金武縁地内に伴う埋蔵文化財の調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集 1989
 ⑤『吉武遺跡群I-4市道野方金武縁地内に伴う埋蔵文化財の調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第303集 1991
 ⑥『吉武遺跡群II-1株生・吉武高木地内に伴う埋蔵文化財の調査報告書』1-株生時代柱立柱建物の報告書
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集 1995
 ⑦『吉武遺跡群 II-2飯塚・吉武高木地内に伴う埋蔵文化財の調査報告書』2-株生時代墓基の報告書
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集 1996
 ⑧『吉武遺跡群 II-3飯塚・吉武高木地内に伴う埋蔵文化財の調査報告書』3-株生時代生活遺構の調査報告書
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第514集 1997
 ⑨『吉武遺跡群 II-4飯塚・吉武高木地内に伴う埋蔵文化財の調査報告書』4-株生時代の墓地の調査報告書 1-
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第580集 1998
 ⑩『吉武遺跡群 II-5飯塚・吉武高木地内に伴う埋蔵文化財の調査報告書』5-株生時代墓地の調査報告書 2-
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第800集 1999
 ⑪『吉武遺跡群 II-6飯塚・吉武高木地内に伴う埋蔵文化財の調査報告書』6-株生時代墓地の調査報告書 3-
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第850集 2000
 ⑫『吉武遺跡群 II-7飯塚・吉武高木地内に伴う埋蔵文化財の調査報告書』7-1-2次陶文・古墳-平安時代の調査報告書
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第875集 2001
 ⑬『吉武遺跡群 II-8飯塚・吉武高木地内に伴う埋蔵文化財の調査報告書』8-3-4-5-9次旧石器・古墳調査報告書
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第731集 2002
 ⑭『吉武遺跡群 II-9飯塚・吉武高木地内に伴う埋蔵文化財の調査報告書』9-3-4-5-9次古墳調査報告書
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第775集 2003
 ⑯『吉武遺跡群 II-10飯塚・吉武高木地内に伴う埋蔵文化財の調査報告書』10-古墳時代生活遺構編 1-
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第831集 2004

第二章 遺跡の立地と環境

福岡市域は西から、背振山系から北流する諸河川流域である糸島・早良・福岡平野、犬鳴山地から北西に流れる諸河川流域である柏屋平野が主要な部分を占め、これらが博多湾を囲むように広がっている。

吉武遺跡群が位置する早良平野は、西側を背振主稜から北に派生した西山・飯盛・高祖地墨山地に、東を同じく北に派生する油山山地と更に北に延びる飯倉台地によって画され、中央部を背振山地を源流とする室見川が北流し博多湾へと注いでいる。平野の北辺には姪浜をはじめとする第三紀層の小丘陵群が散在し、これらを繋ぐように砂丘が形成され、後背には沖積低地が広がっている。また両山地の山麓部や平野中央部には中位段丘下位砂礫面が残され、小田部台地にはこの上位の火山灰層が残存している。低位段丘の多くは室見川の扇状地平野・三角州平野部に埋没している。

吉武遺跡群は室見川中流域左岸の、金武から北東に伸びる中位段丘下位砂礫面上に形成された標高20~30mの扇状地上の、これが更に開析された舌状の低台地上に立地し、北を日向川に、南を大北遺跡群が立地する中位段丘との開析谷に区切られ、第1次調査区と第2次調査区、樋渡地区の第4次調査区と大石地区の第9次調査区、高木地区の第6次調査区のそれぞれが立地する3つの低台地上に広がっている。

昭和56~60年にかけての圃場整備に伴う6次の調査で約10haが調査され、旧石器時代細石器文化期の良好なユニット、縄文時代中期~後期初頭の貯蔵穴群、殊に弥生時代前期後半~中期にかけての大規模な集落に伴う墓地からは、「特定集団墓」とされ多量の朝鮮製青銅利器や多錐細文鏡・銅剣などの装身具が検出され、中期中頃には前漢鏡・鉄製利器を副葬する埴丘墓が検出されている。古墳時代には中期から後期にかけて、樋渡前方後円墳から營々と営まれる28基の円墳群と同時期の集落が広範囲に展開している。各遺構からは多くの初期須恵器や土師器に伴って多量の半島系の陶質土器・軟質土器が出土しており、本遺跡出土分のみで全市域出土量を凌駕している。弥生時代以上に半島からの渡来人との関わりを深くしている。また自然流路からは鍬・鎌等の農具の他、準構造船のミニチュア、木製鞍・鏡など特殊な木器が出土している。奈良時代末から平安時代前期にかけては多くの鍛冶遺構と多量の鉄滓とともに越州窯系青磁・墨書き土器・円面鏡・瓦を伴う建物群と方形区画溝等が検出され寺院と考えられている。

平野内での古墳時代集落遺跡の分布は、平野低地・低位段丘部に2湯納・3拾六町ツイジ・4四箇・5原遺跡・6田村遺跡・7免遺跡・8次郎丸高石遺跡・9重留村下遺跡が、海岸砂丘上に10西新町遺跡、室見川中流域左岸の山麓部から広がる標高22~54m程の中位段丘上・浸食された中位段丘下位面残丘の台地上に1.本遺跡や、11野方中原遺跡・12野方久保遺跡・13羽根戸遺跡・14太田遺跡・15広石C遺跡16都地遺跡・17金武城田遺跡・18浦江遺跡群・19浦江谷遺跡群が、右岸の段丘と同じく下位面残丘の台地・独立丘上に20有田遺跡・21飯倉遺跡群・22野芥遺跡群・23梅林遺跡・24東入部遺跡群が分布し、上流域には集落は展開しない。このうち、湯納・拾六町ツイジ・四箇・免遺跡で井堰や大量の木器が検出され、西新町遺跡では前期初頭の住居群から多量の半島系土器が出土し、野方中原遺跡では100軒を超す竪穴住居群が、同じく大集落の野方久保遺跡・広石C遺跡では7世紀代の大型建物群を検出、金武城田遺跡では大型建物と大型建物群を、有田遺跡では「那津官家」と考えられる6世紀代の櫛列と大型建物群、次郎丸高石遺跡では5世紀代の河川から祭祀土器とともに多量の鍛冶滓を、梅林遺跡ではオンドル構造の竈を持つ竪穴住居群と大型建物を検出しており、本遺跡を含め早良平野では半島との関わりを示す遺跡が特徴的である。また、重留遺跡東側丘陵上の重留古墳C群の調査ではII

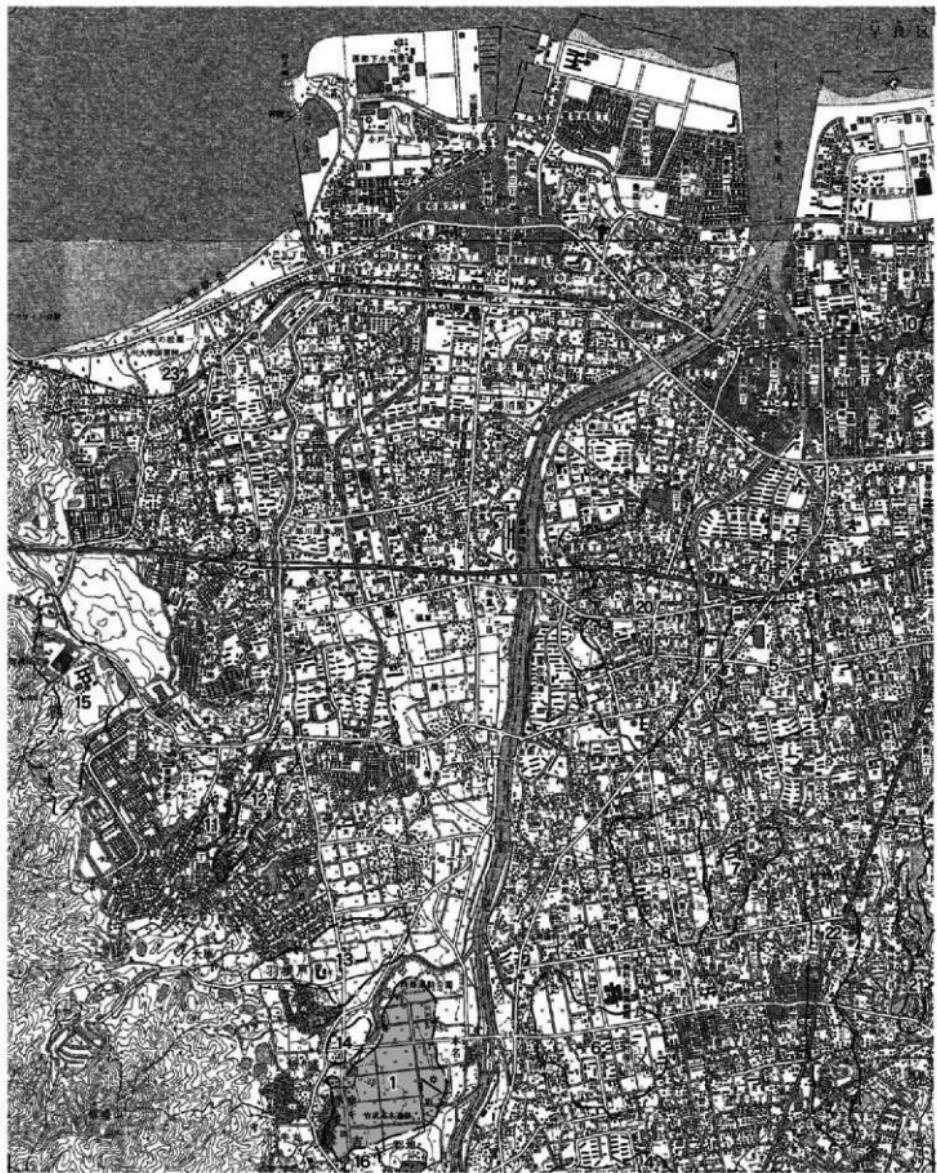


Fig. 1 早良平野 古墳時代集落分布図(1/30,000)

期須恵器登窯が1基検出され、本遺跡出土品を焼成している可能性がある。

吉武遺跡群内の、本報告を除く調査での古墳時代集落は、第1次調査II区で前期の竪穴住居8・祭祀構造・掘立柱建物13棟、III区で自然流路、第2次調査VII区で掘立柱建物30棟・井戸1基・土塙30基・自然流路2条、IX区で竪穴住居1軒・掘立柱建物64棟・井戸1基・土塙43基、X区で自然流路1条を、第3次調査で掘立柱建物4棟・土塙24基を、第5次調査で掘立柱建物11棟・井戸6基・土

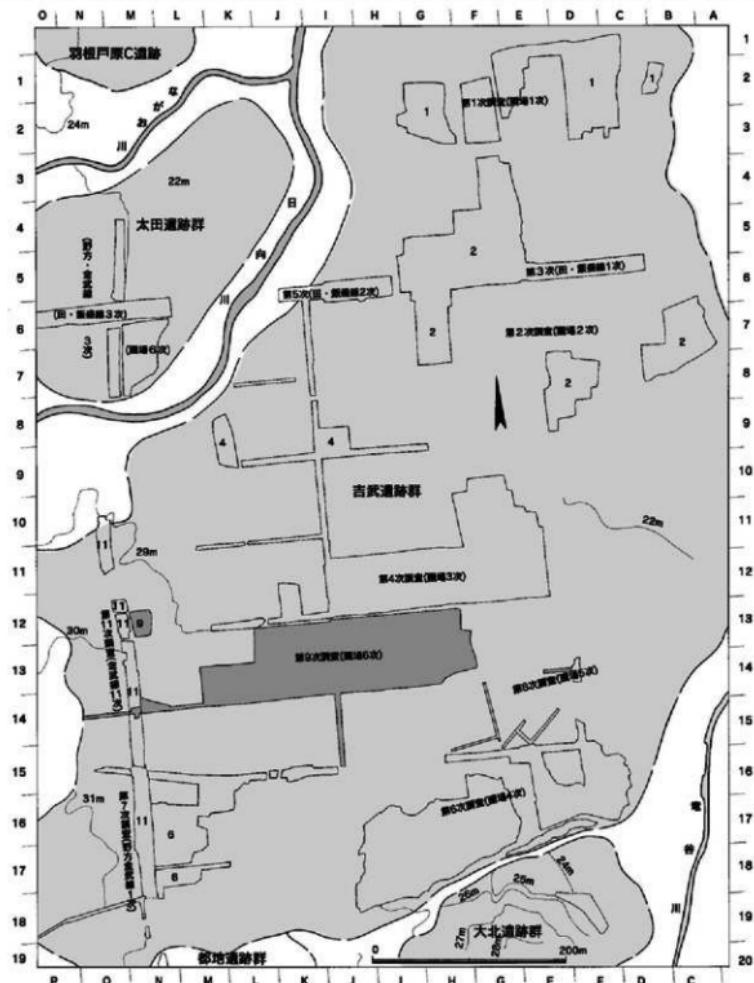


Fig. 2 吉武遺跡群調査区配置図 (1/5,000)

壇47基・自然流路2条を、第11・12次調査で掘立柱建物3棟・竪穴住居2軒・自然流路1条を検出している。

後世の削平の程度によって遺構の分布の粗密が大きく変わってきていくと思われるが、概して前期遺構は希薄であり、後期でも各地点の竪穴住居の検出は少なく掘立柱建物がこれを凌駕している。このなかで、80軒を超える竪穴住居群を検出した第9次調査域が本遺跡後期集落の中心域と考えられる。

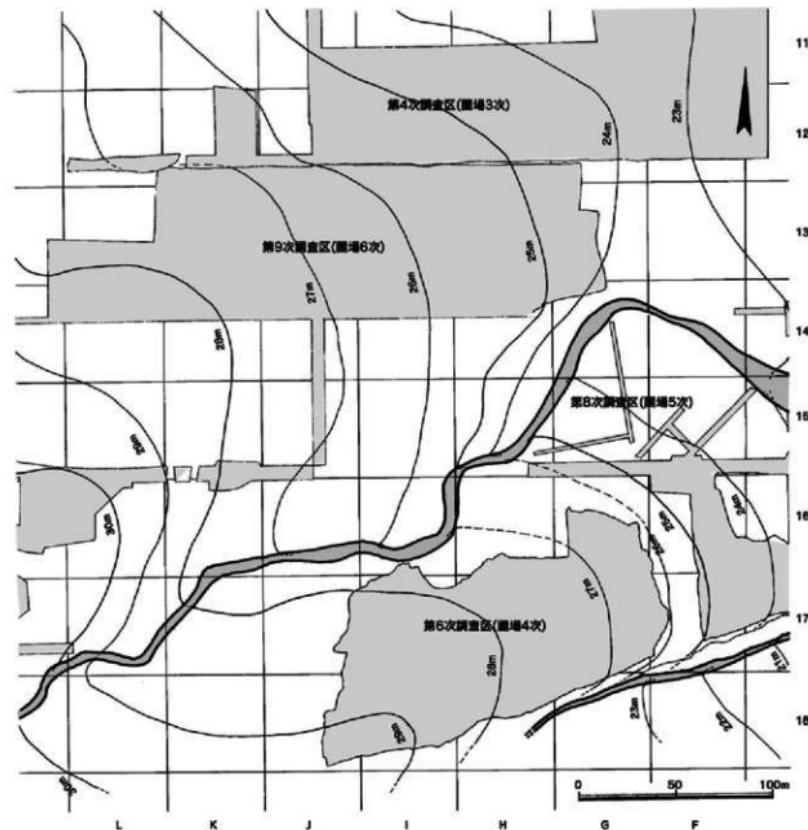


Fig. 3 調査区地形図(1/2,500) ※等高線は現地表高

第三章 第9次調査の記録

1. 調査概要

本調査区は吉武遺跡群の中央の低台地のほぼ中央に位置し (Fig.3)、圃場整備事業の第6次調査で最終年度にある。標高は24~30mで南西から北東に1.4%程度で緩傾斜している。調査対象地は削平を伴う東西300m南北80mの圃場整備本体工事部分と、同部分中央を南北に貫通する幅7mの2号支線道路部分、本体工事部南辺に沿って東西に貫流する2号支線排水路部分である。調査対象地が広大であり、調査と圃場整備工事を円滑に並行に進めるため、本体工事部分を東西に二分し、東の甕棺墓「大石地区」を1区、東半の他の部分を2区、西半部分を3区、3区の北西100m地区を4区、3区南の2号支線道路部分を2号支線道路区、3区西の2号支線排水路部分を2号支線排水路1区、1区東側の2号支線排水路部分を2号支線排水路2区として調査を実施した。小区は第1次調査で設定した、磁北を軸線とした50mグリッドを採用している。

調査は2号支線道路部・3区・2号支線排水路1区・2号支線排水路2区・1・2区の順番で実施した。2号支線道路部・2号支線排水路1区・2号支線排水路2区は1/20スケールの全体実測図を作成したが、他は調査区が広大かつ造構総数が膨大であるため、作業時間を短縮する目的で、個別実測以外の全体図は西日本航業株式会社に委託し航空測量図を作成した。補助図として平板測量図を作成し、これを1/50スケールに拡大し要所のレベルを記録、航空測量図はこのレベル図を援用して作成され、第9次調査分の造構実測図の大半は航空測量図より抜き出している。図中の細かな数字は絶対高であるが、原図に全てのポイントのレベルが記入されてはおらず、また、長い年月の間にレベル図の多くのを紛失しており、造構断面図の作成が困難になっている。

現況は水田で、耕作土とこの床土の直下約20cmほどが造構の検出面となっており、この検出面近くまでを重機を用いて掘り下げ、その後手作業で造構検出を行っている。地山は扇状地形のため疊層から粘土層まで様々に切れ替わっており、造構検出を困難にしている。

検出した造構は、3区西端部の水成堆積層より、624点にのぼる良好な細石器製作ユニットを、弥生時代は「大石地区」で甕棺墓202基・木棺墓8基・土壙墓12基・祭祀造構5基からなる共同墓地が検出され、12点の細型青銅武器と玉類が副葬され、「高木地区」の下位の「特定集団墓」と位置づけられた。2号支線道路区では35基の甕棺と鉄劍1点・豎櫛1点の副葬品・祭祀造構1基が出土、古代では大型掘立柱建物群と方形区画溝から多量の越州窯系青磁・瓦・八稟鏡・「寺」の墨書き土器が出土し、寺院と考えられている。

第9次調査では古墳時代の造構はほとんど5世紀以降で、前期は1基の土器棺と土壙1基以外検出されていない。豎穴住居は計81軒を検出し、土壙は149基、掘立柱建物は大型建物を含む31棟以上、溝は9条が検出され第9次調査域が本遺跡群の該期集落の中心であることを示している。

2号支線排水路1区では陶質土器・初期須恵器を伴う円墳2基 (S群27・28号墳) を検出している。各造構からは陶質土器・軟質土器・鉄器・紡錘車など多数の半島系の資料を検出している。吉武遺跡群出土資料のみで該期の市城出土半島系資料の九割がたを占めると言っても過言ではない。半島系資料の多い早良区・西区の遺跡の中でも突出しており、大型建物とともに半島文化との深い関わりを示している。

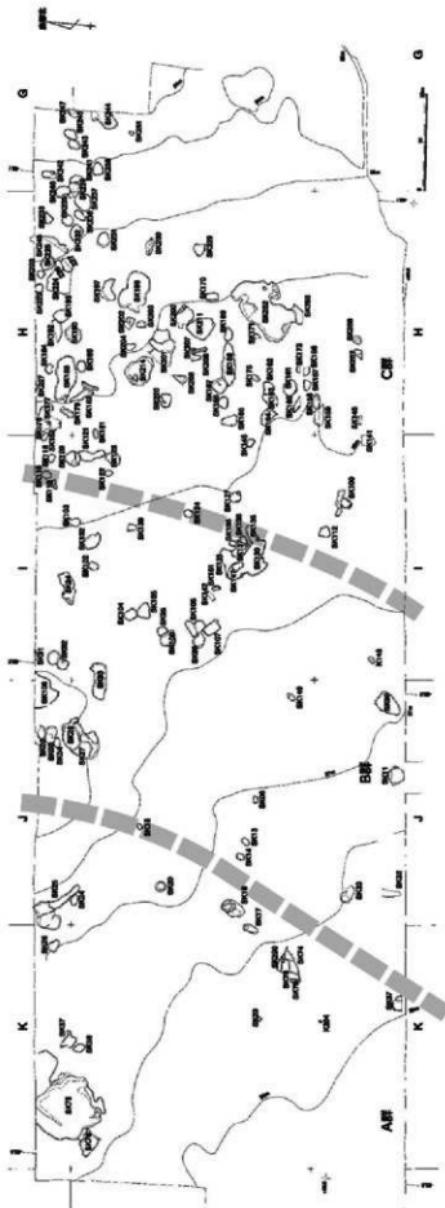


Fig. 4 1～3区 土壤分布図(1/1,000)

2. 1～3区の土壤

調査は、7ヶ月間に28,000m²と12点もの青銅器を副葬した203基もの甕棺群を掘りあげる状況のなかで実施され、資料の出土状況の把握は十分でなく、遺構の時期的な細分は不可能な状況である。よって住居同様小田富士堆編年Ⅰ～Ⅱ期・Ⅲ期・Ⅳ期と大まかに分け整理した。また半島系の土器の出土が多いが大半は影響を受けた在地の土器であり、總じて半島系として扱っている。

土壤は1～3区で146基が竪穴住居群を囲むように分布し、西から東にかけて分布の密度が増す。時期的には前期1基・Ⅰ～Ⅱ期111基・Ⅲ期13基・Ⅳ期9基・後期で時期細分不詳12基と、Ⅰ～Ⅱ期が全体の8割以上を占め、中心となっている。また、5mを超える大型土壤も多く、この時期に目立つ。竪穴住居群は標高25～28mの等高線稜線上を西からSC51～SC43・39軒のA群、SC25～SC100・27軒のB群、SC101～SC104・8軒のC群と3群に分けられ、土壤群とは逆に西から東にかけて減少する傾向を示していた。竪穴住居群のグルーピングに合わせると、A群16基・B群43基・C群87基と分布域・量ともに逆転している。

また、1区の弥生甕棺ベルト地帯には殆ど掘削されず、ベルト地帯横のC群東側ではⅠ～Ⅱ期の土壤33基が幅25mのベルト状にこれに沿うように分布する。

土壤群の分布は竪穴住居群を中心としており、竪穴住居群のグルーピングに合わせ各群・時期毎に詳報する。殊にⅠ～Ⅱ期は多量であり、A群北西・A群北東・A群南・B群北西・B群北東・B群南・C群北・C群南の小グループに分け詳報する。

1). 前期の土壤

1~3区で、前期に該当する遺構は1基のみで、極めて少なく、住居も該区では検出されず、遺跡群内でも2軒が検出されたのみである。外に土器棺墓が1基検出されており、あわせて報告する。

K204 (Fig.5・PL.2-1) K204はK14グリッドでA群住居の間隙で検出された土器棺墓。0.95×0.6mの墓壙に土師器甕2個を合口にしたもので、大半が削平され1/3程度が残っている。下甕が一回り大きく墓壙底も5cm程深く掘り下げている。下甕覆土中よりガラス小玉12点を検出している。

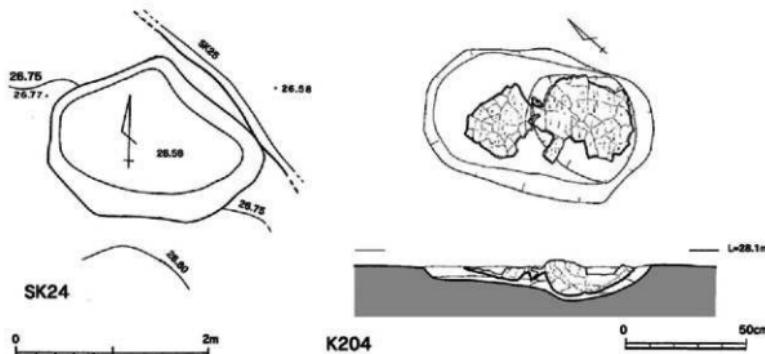


Fig. 5 SK24 K204実測図 (1/50・1/20)

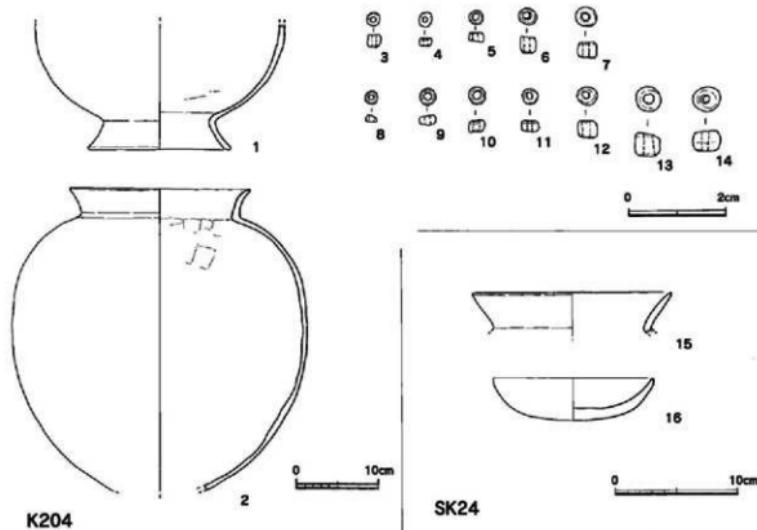


Fig. 6 ST24・K204出土遺物実測図 (1/6・3~14-1/1・15~16-1/4)

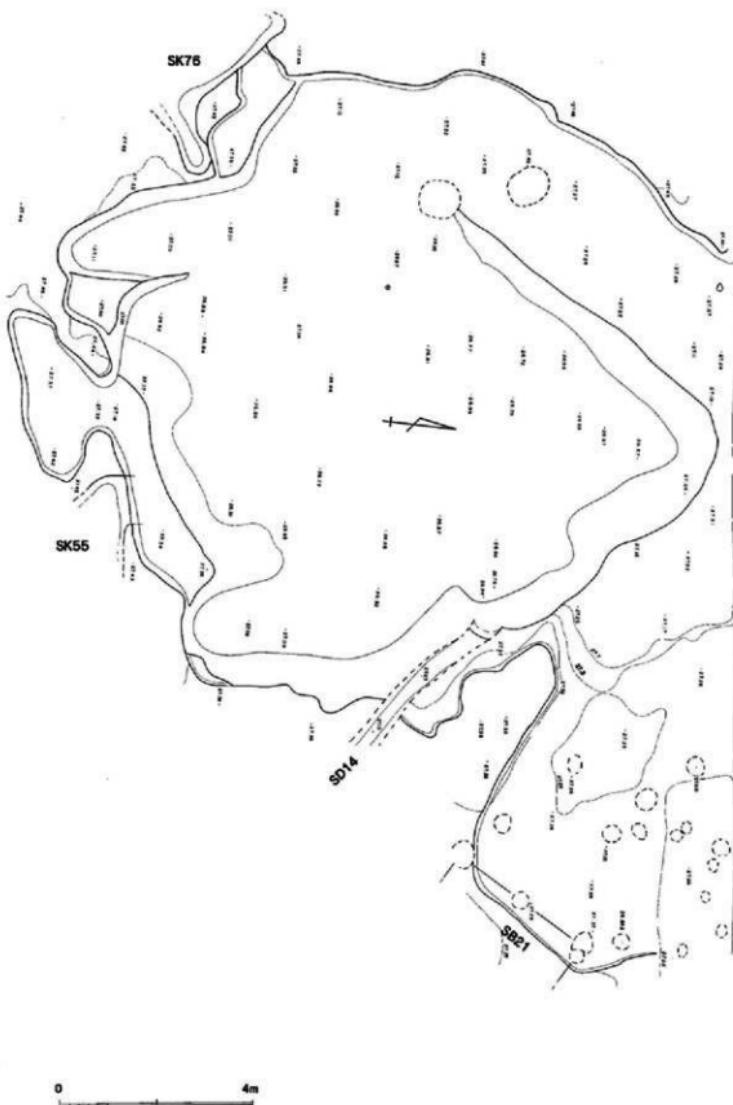


Fig. 7 SK75実測図 (1/100)

出土遺物 (Fig.6・PL.11) 1・2は主体の古式土師器甕で、1は上甕で口径17.8・胴径30.8cmを測る。口縁は外反して先端は尖り、胴上位に最大径がある。胴内面はヨコケズリ外は器壁が荒れ調整不明。胎土に石英粒を多量に含む。2は下甕で口径22.6・胴径36.8cmを測る。器形・調整は同様である。3~14はガラス小玉で、径2~5.5mm厚1.5~5mmを測る。色調は3~7はライトブルー・8~14はコバルトブルーを呈する。

SK024 (Fig.5) SK024はJ13グリッドでA群北東に位置しI~II期のSK25に切られる。2.2×1.5×0.19mを測る浅い円形土壙である。

出土遺物 (Fig.6) 15は土師器甕口縁片で、復元口径16.28cmを測り、口縁は外反して先端は尖り、器壁は薄い。外面はヨコナデ。16は土師器坏で、復元口径13・器高3.5cmを測る低い器形で器壁が厚い。内外面にナデを施す。

2. I・II期の土壙

111基の土壙が西から東にかけて竪穴住居群を囲む様に濃密に分布し、全体の8割以上を占め、中心となっている。また、5mを超える土取り場状の大型土壙も17基と多く、相当量の土を排出しているはずである。該期は多量であり、竪穴住居群のグルーピングに合わせA群北西・A群北東・B群北西・B群北東・B群南・C群北・C群南の小グループに分け詳報する。

(1)A群北西部 同期のSC43西側に位置し、大型のSK75の他SK76・56・57の4基を検出している。

SK075 (Fig.7) SK075はK12グリッドの調査区北西端に位置し、同期のSK25に切られる。14.3+ α ×12.7×0.55mを測る浅い大型の不整形土壙で、コンテナ9箱分の多量の土器を出土している。

出土遺物 (Fig.8・9 PL.11) 17~55は須恵器。17~20は摘付の环蓋で口径×器高は17は11.7×5.5・18は14.0×5.3・19は12.1×6.0・20は13.6×5.9cm。全て体部の1/3に回転削りを口唇内面に沈線を施す。21~33は环蓋で口径×器高は21は12.0×4.0・22は12.2×5.0・23は13.6×4.9・24は12.6×4.5・25は12.2×4.6・26は11.8×4.4・27は12.4×4.2・28は12.4×4.6・29は11.8×4.1・30は11.4×4.4・31は12.5×4.7・32は11.4×4.2・33は13.6×3.8cm。21~30は体部の1/3以上に回転削り口唇内面に沈線を施す。24はカキメを残し内面に当具痕が残る。31~33は口唇を丸く収める。31は口縁外間にヘラ記号を施す。33はIII期の混入品。34~41は环身で受部径×器高は34は12.5×4.0・35は13.1×5.4・36は13.0×5.1・37は12.0×4.5・38は13.2×4.8・39は12.0×5.0・40は12.4×4.6・41は12.4×4.9・42は13.0×5.4・43は12.8×5.4cm。体部の1/2以上に回転削り口唇内面に沈線を施す。36・37は口唇を丸く収める。34・35・41には外底にヘラ記号を施す。45~48は有蓋高環で受部径×器高は45は12.0×8.3・46は12.8×9.8・47は12.5×8.3・48は12.7×9.6cm。全て口唇内面に沈線を施し、46は脚部にカキメを施す。透かしは3ヶ所に46~48は方形・45は円形透かしを施す。49は無蓋高環で脚径11.4×残存高11.5cm。环部突帯下に波状文を、これから突帯上に3cm程の把手を付ける。脚部に方形透かしを施す。胎土は青灰色。50は甕で復元口径9.8・器高10.6cm。頸部と胴部沈線間に波状文を施す。体部下面に平行叩内面に青海波が残る。51~53は大型器台片で、51は高环形の环部。外面4条の細い突帯間に横描波状文を2段施す。下位に平行叩が残る。胎土は灰色。52・53は脚部片で52は筒形器台片で復元脚径19.8cm。突帯間にカキメ後波状文を施し半円形に近い三角透かしを施す。53は高环形の脚部片で脚径24.4cm。突帯上に波状文を施す。54・55は小型の甕で54は口径17.6cm高さ7.5cmの長い口縁を有する。突帯間に波状文を施す。55は口径15.6cm・胴径19.6cm。胴部外面上半には縱方向の下半には斜位の平行叩を、内面はナデ消し指圧痕が残る。56~60は土師器で、56~58は甕。56は口径15.6・胴径18.3cm、57

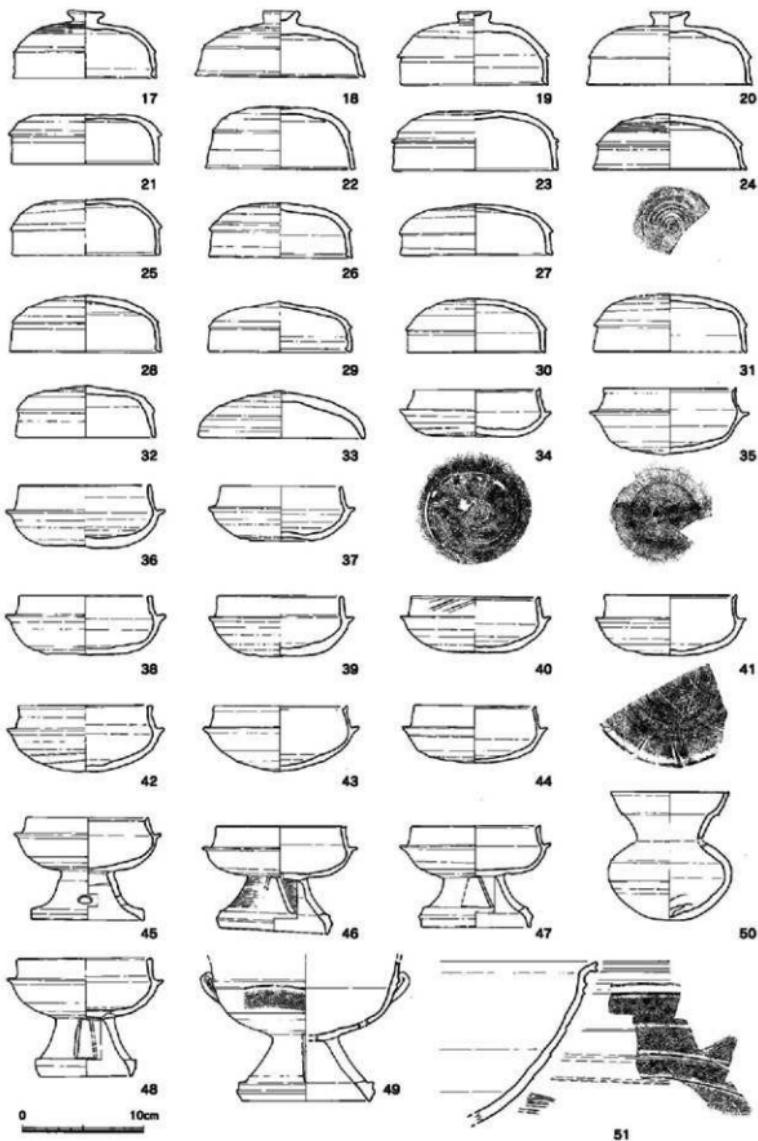


Fig. 8 SK75出土遺物実測図.1(1/4)

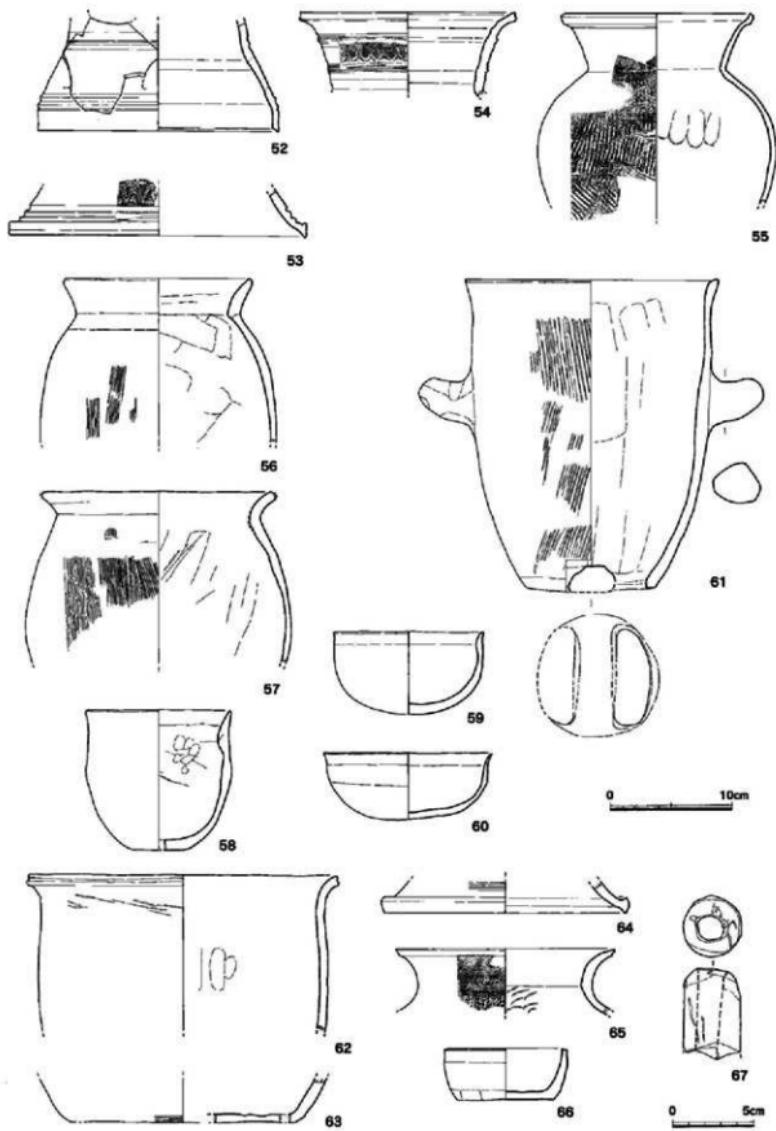


Fig. 9 SK75出土遺物実測図.2 (1/4・67-1/3)

は口径12.4胸径21.8cm、外面はタテハケ内面はケズリを施す。58は直口口縁の小型品で口径12.0器高11.4cmで緩い平底を呈する。59・60は坏で口径×器高は12.4×6.8・13.8×5.4cm。60は低い器形で器壁は薄い。61は瓶で口径20.8器高25.5cm。高い円筒に近い器形。底部は2孔で中央に柱状の受けを設ける。62～66は半島系の土器で、62は口唇に沈線を、内外面にナデを施す。口径25.6cmの瓶。軟質で胎土は石英粒を多量に含む。63は陶質土器の甕底部で径18.4cmの平底の外縁にカキメを施し粗くナデ、内面も粗くナデする。胎土は灰褐色。64は瓦質の脚部で径20.0cm外縁にカキメを施す。胎土は灰色で精良。65は陶質の甕で口唇外縁を面取りし、頸部下に綱席文印を施し内面の当具痕をナデ消す。胎土は灰色で細かな砂粒を少量含む。66は陶質の平底の杯で口径10.2器高8.0cm。口唇に凹線を外底際に手持ちヘラ削りを施す。胎土は灰褐色。67は大型の管状土錘半損品で残存長5.5径3.8cm。他に土器片円盤68～79、12点(PL.11)を検出。石器は砂岩の自然礫を用いた粗紙から中砥3点80～82(Fig.37)が出土。80は30×25cmの大型品で3面を使用している。

高坏・大型器台等の須恵器が多く、祭祀色が強い。

(2)A群北東部 SC45東に隣接し、溝状のSK25と小型のSK26の2基を検出している。

SK25(Fig.10・PL2-2) SK25はJ12グリッドに位置し、前期のSK24を切る。6.5×4.8×0.85の不整形土壇で南西端から幅1.5深0.2弱長さ7m程が溝状に延びる。遺物は比較的多くコンテナ2箱分の資料を出土し、半島系土器が目立つ。

出土遺物 (Fig.11 PL.11) 83～91・103～105は半島系の土器。83～90は陶質で83は摘付の高坏蓋。口径12.2器高3.4cmの低い器形で天井部中央にカキメを施し上下にカキメ工具で連続押し引き文を施す。口唇内面に凹線を施す。胎土は灰色で精良。84～86・88・89は把手付土器の一群で、85は完形で口径9.0器高6.4cmを測る。体部下半に手持ちヘラケズリを施す。胎土は暗灰色で2mm以下の砂粒を含む。87・90は甕で、87は口唇外縁を凹線気味に面取りし頸部に平行印を、90は胸部片で外縁に縱方向の細かな平行印を施し内面はナデ消す。胎土は灰色で精良。91は高坏脚部で、端部は肥厚せず直線的。方形透かしを穿つ。胎土は灰色で精良。103～105は軟質の土器。103は口唇外縁を面取り。口径22.8cm。全面ナデ調整で胎土は1mm以下の砂粒を少量含む。104は平底の甕で径7.2cm。外底に木葉压痕を残す。105は肩部に格子印を施す甕小片で、鈍い褐色で2mm以下の砂粒を少量含む。92～102は土師器。92～102は高坏で、92は口径17.6cm。93は口径17.0cmで屈曲は強く直線的。94・95は脚部で94は径12.2cm、95は径11.6cm屈曲部から端部が膨らみ丈も短い。96は大型の高坏で口径38cm。97は坏で口径11.4器高4.6cm。98・102は甕で98は小型の甕。口径11.2cm。108は口径25.0cm。口縁内外に粗いハケを施す。99は瓶把手。100・101は鉢で100は口径14.0器高9.2cm。内面口縁下4cm程が黒変する。101は口径14.0器高9.2cm。同じく内面が5cm程黒変する。106は土師質の土製鍾錐。径5.0厚2.5孔径0.8cmで、重量69g。ナデ調整を施す。107は浮子に用いたと思われる軽石で5.6×5.0×4.0cmを測る。粗いケズリで整形する。

SK26(Fig.10・PL2-2) SK26はSK25・SC43間に位置する小型の土壇で、2.8×1.9×0.31mを測る。

出土遺物 (Fig.12 PL.12) 108は須恵器甕口縁で、口径17.2cm。口縁下にカキメを施す。109～113は土師器。109は小型丸底咲口縁で径11.8cm。器壁が薄い。110は坏で口径13.1器高6cm。ケンマを施す。111は壺胴部で胴径12cm。外面ナデ内面ケズリ。112は完形の甕で口径19.2胴径29.2器高31.5cm。胴外縁タテハケ内面ケズリ。113は完形に近い瓶。口径31.6 器高30.7cm。胴外縁ハケ内面ケズリを施し、底部に花弁状に10孔蒸気孔を穿つ。口縁下に径7mmの焼成後の穿孔が1孔有る。

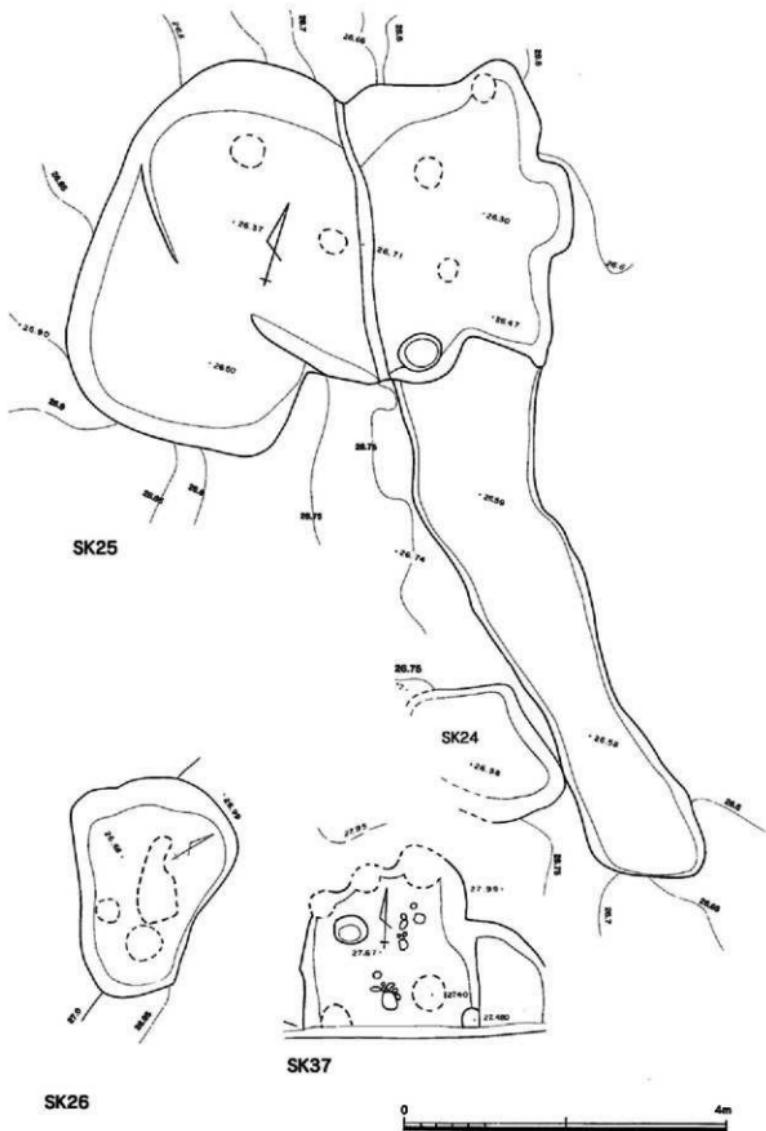


Fig.10 SK25・26・37実測図(1/60)

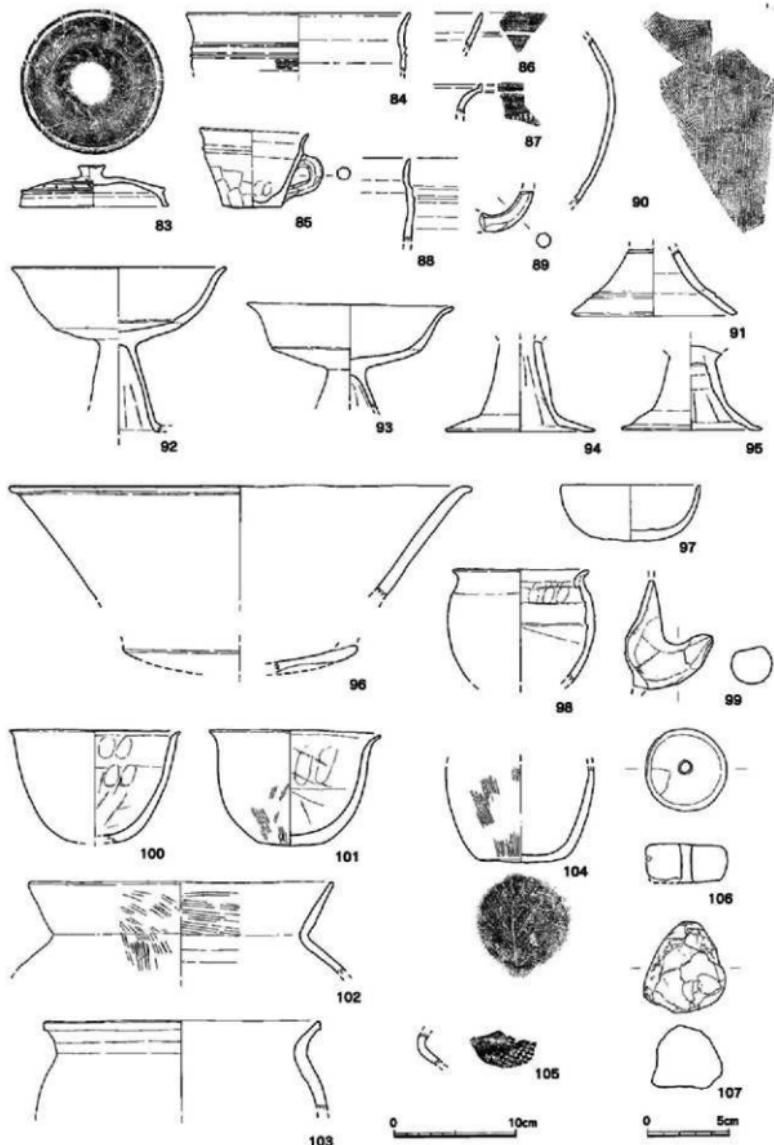


Fig.11 SK25出土遺物実測図(1/4・106・107-1/3)

(3)A群南東端 A群南東端でSK37を1基のみ検出している。

SK37(Fig.11・PL3-2) SK37はK14グリッドでA群住居群の南東に位置する。3.1×2.3+ α ×0.32mを測る不整形土壌である。遺物は比較的まとめており、中央の小円は土器の表示である。

出土遺物 (Fig.13 PL.12) 114～118は須恵器で、114・115は環蓋で口径×器高は114で11.8×4.5cm。115は口径12.8cm。全て体部の1/3に回転削りを口唇内面に沈線を施す。116～118は环身で受部径×器高は116は13.0×5.0cm。117は口径8.8cm。118は13.4×5.0cm。体部の1/2以上に回転削り、口唇内面に沈線を施す。118は口唇を丸く收める。116・118は内底に当具痕が残る。119は平底の陶質土器甕。外面底際はヘラケズリ後ヘラナデ内面は当具痕を粗くナデする。胎土は灰色で精良。120～130は土師器。120・121・128・129は瓶。120は口径25.6cm。外面はナデ調整。121は口径22.0cm。調整は不明。128は底部片。径1.5mmの円孔を数個穿つ。129は口縁部を欠く。胴径25cm。底面に径6cmの円孔と3.5×1.5cmの楕円形蒸気孔4孔を穿つ。123～126は甕。123は小型品で口径10.8胴径12cm。外面はナデ。124は口径11.2cm。胴外面にハケを施す。125は口径18胴径24cm。外面はナデ内面頸部下はケズリを施す。126は口径16胴径23.8cm。胴部外面は粗いタケハケ内面頸部下はケズリを施す。127は环で口径14.7器高7.4cm。内面と口縁外面はナデ外面部はケズリを施す。130はミニチュアで、口径4器高3cmを測る。内外ともに指頭圧・ナデを施す。

(4)B群北西部 SC64・65北西側に位置し、大型のSK27・29・108の他SK02・03・28・30・31・91・92の10基を検出している。

SK02 (Fig.14) SK02はJ12グリッドで、大型土壌SK29・108に挟まれ、SK03に隣接する。2.75×

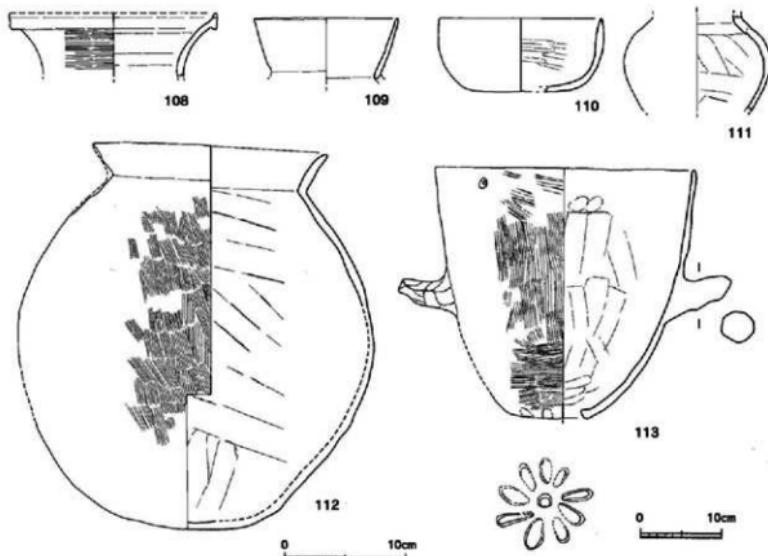


Fig.12 SK26出土遺物実測図(1/4・113-1/6)

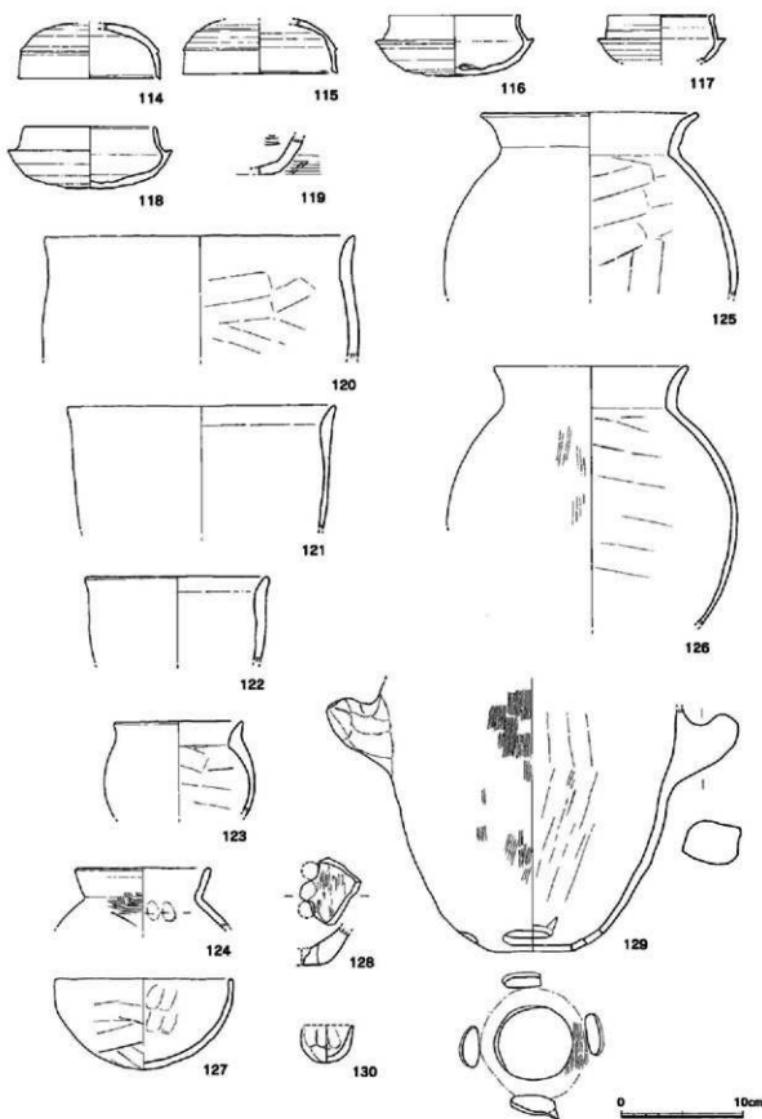


Fig.13 SK37出土遺物実測図(1/4)

1.7×0.36mを測る浅い隅丸方形の土壙で、資料は比較的まとまっている。

出土遺物 (Fig.15 PL.13) 137～147は須恵器で、137は壺蓋で口径×器高は12.4×4.3cm。体部の1/3に回転削りを口唇内面に沈線を施す。138～141は壺身で受部径×器高は138は受部径13.2cm。139は13.4×4.8・140は受部径13.0・141は受部径13.4cm。体部の1/3以上に回転削り口唇内面に沈線を施す。139は口唇を丸く收める。142は縁口縁で、口径12.8cm。外面頸部に波状文を施す。143～145は高環脚。143は脚径9.0・144は7.6・145は9.0cm。145は外面にカキメを施す。透かしは全て方形。146・147は甕で146は口縁で径33.8cm。147は頸部で径12.8cm。外面頸部下に平行印施す。148～154は土師器。148～152は甕で148は口径20.6cmで口唇外表面が若干肥厚する。頸部下にタテハケを施す。149は口径20.4cm。外面にハケメを施し横にナデる。150は口径25.8cm。器壁が荒れ調整不明。151は口径17.0cm。頸部下にハケメを施す。152は小型の甕で口径6.6cm。内面は炭化物が付着し外面は被熱で赤化する。153は壺で口径13.4cm。154は黒色土器の壺で口径10.4cm。内外ともに黒色を呈する。

SK27・29 (Fig.14) SK27・29はSK02の南に位置する土取り場状の大型土壙で、SK28・30・31と一連のものである。9.8×6.3×0.1mと浅い不整形の土壙で、南東側が建物SB36を避けるように埋む。大きさの割に遺物の出土は少ない。

出土遺物 (Fig.16 PL.13) 155～168はSK27出土。155～159は須恵器で155は壺蓋で口径は14.6cm。口唇内面に沈線を施す。156・157は壺身で受部径×器高は156は13.2×5.2cm。体部の2/3以上に回転削り口唇内面は凹線気味に仕上げる。157は受部径14.4cm。口唇内面に沈線を施す。158は甕の口縁で径9.4cm。外面に波状文を施す。159は甕の口縁で口径21.6cm。細い3本の突帯間に波状文を施す。160～168は土師器。160は高環脚部で17.8cm。161は甕で口径11.6・胴径14.7cm。口縁内面外面胴部にハケメを施す。162は甕口縁部で口径14.6cm。内面頸部下はケズリ外面胴部にタテハケを施す。163～168は壺。口径×器高は163で14.6×5.5・164で11.8・165で12.4・166で13.4×4.8・167で13.0×4.5・168で13.4cm。164は口唇内面を面取りする。165は外面ハケメ調整中あいた穴を補充した跡がある。169～177はSK29出土。169は須恵器甕口縁で、径28.6cm。170～175は土師器。170・171は甕。170は口縁が長く口径25.4・171は胴が強く張り口径18.8cm。172・173は土短頭甕で172は口径14.0・胴径19.3cm。調整は不明。173は口径8.0・胴径11.7cm。外面に粗いタテハケを施す。174・175は壺。174は口径12.8・器高5.0cm。175は口径12.0で器壁が厚い。176・177は軟質の平底甕底部。176は底径6.2cm・177は5.6cm。壺の出土が目立つ。

(5)B群北東部 SC64～69のB群北側住居群を囲む様に位置し、大型のSK130・131の他SK95・96・102・104・105・106・142等の15基を検出している。

SK95 (Fig.17) SK95はSC68の西に位置する円形土壙で、2.05×2.0×0.19mを測る。比較的小型の土壙で、Ⅲ期のSK100に切られる。遺物は多くコンテナ1箱分出土している。

出土遺物 (Fig.18 PL.13) 178～182は須恵器。178は壺身で受部径12.5・器高5.3cm。体部の2/3以上に回転削り口唇内面は面取りする。外底にヘラ記号の一部が残る。179～181は高環。179は無蓋高環脚部で口径16.6cm。突帯下に波状文を施す。180・181は脚部で180は脚径9.8・脚高5cm。外面にカキメを施し方形透かしを穿つ。181は脚径10.0cm方形透かしを穿つ。182は甕口縁小片。口唇外表面を突帯状に仕上げる。183～188は土師器。183～186は甕で183は口径13.2cmで器壁が厚く、胴外面に斜位の平行印が残る。184は口径19.8cmでナデ氣味の頸部で胴が張る。185は口径18.0cmで胴が強

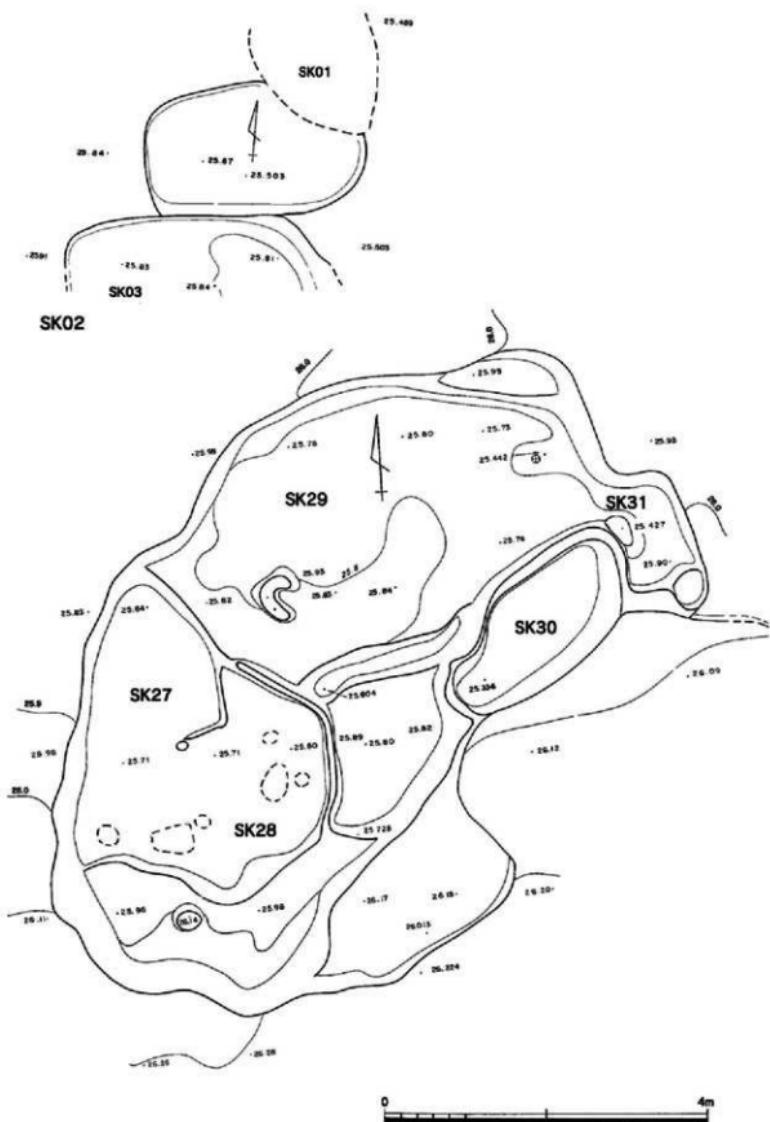


Fig.14 SK02・27・29実測図(1/60)

く張る。186は小型の甕で口径11.7器高13.2cm。胴部外面上半にはヨコハケを施し下半は煤が付着する。187は鉢で口径11.0器高7.4cm。内面上半には炭化物が付着し外面は被熱で赤化し器壁が剥落する。188は瓶把手。

SK96 (Fig.17) SK96はⅢ期のSC63の東に位置しこれに切られる。円形土壙で、 $2.9 \times 2.3 \times 0.78$ mを測る。大きさの割には遺物は多くコンテナ1箱分出土している。

出土遺物 (Fig.18 PL.13) 191～197は須恵器。191～193は壺蓋で口径・器高は191で 12.9×4.7 ・192で 12.6×4.4 ・193で 12.0×4.2 cm。体部の1/3に回転削り191・192は口唇内面を面取りし193は凹線状に仕上げ、摘みの痕跡がある。194・195は壺身で受部径・器高は194で 12.2×4.2 ・195で12.0cm。口唇内面を面取りする。196・197は高環で196は壺部で受部径12.2環高4.8cm。脚部に円形透かしを施す。197は脚部で脚径9.8cm。外面端部を面取りする。198～205は土師器。198～201・203は甕。198は口径19.6cm。口縁内外にハケメが残る。199は口径14.0復元器高16.2cm。200は口径20.5脚径22.6cm。口縁外面が肥厚し以下に粗いナナメハケを施す。201は口径24.8cm。短い口縁以下にハケメを施す。203は小型の甕で口径11.0器高10.5cm。外面は被熱で著しく剥落する。202は壺で口径12.4器高5.8cm。204・

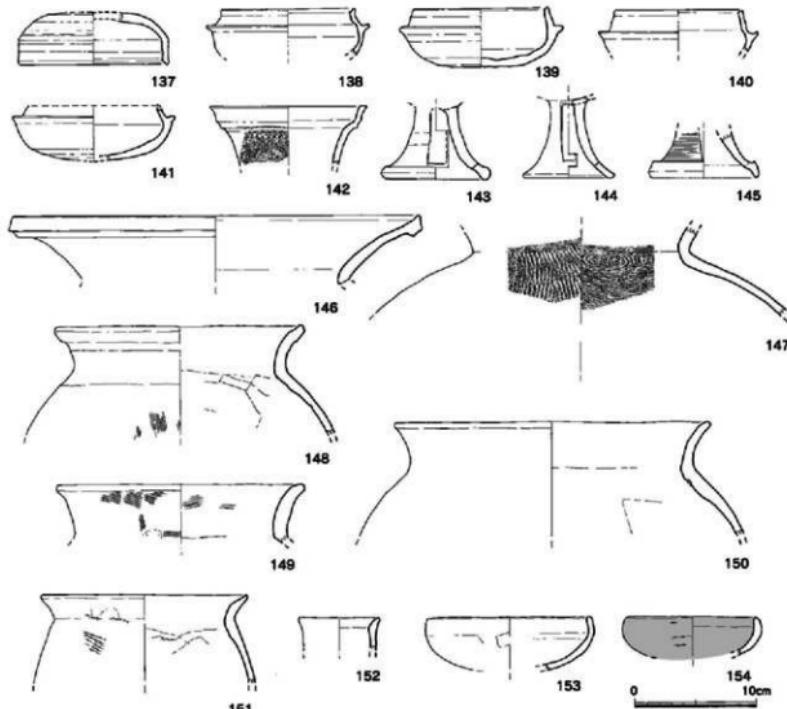


Fig.15 SK02出土遺物実測図 (1/4)

205は軟質系の平底甕底部。204で底径7.4cm。外面に煤が付着する。205は底径16cm。胎土は明橙色でやや硬質。206・207は滑石製円盤。径×厚は206で38×3mm・207で37×3.5mm。中央にそれぞれ1.5mmの穿孔をする。208は小型の管状土錘。23×10孔径3mm重量19gを測る。

SK105 (Fig.17PL4-1) SK105は同期のSC68の北に位置しこれを切る。円形に近い土壤で、3.35×2.8×0.3mを測る。遺物はコンテナ1箱分が出土している。

出土遺物 (Fig.19 PL.13) 209～216は須恵器。209～212は壺蓋で口径・器高は209で11.3×3.5・210で12.3×4.8・211で11.6×4.9cm。口唇内面に沈線を施し211は外面境が沈線化する。212は径2.8cmの摘みが付く。213・214は环身。213は受部径10.2cm。口唇内面に沈線を施す。214は口縁小片で端部は丸く収める。215は高環脚で径9.6cm。外面にカキメを施し円形透かしを3ヶ所穿つ。

216は脚付土器の体部で口径7器高5.7cm。外底は手持ちヘラケズリ。脚部に方形透かし3ヶ所の痕跡がある。217～224は土師器。217～222は甕。217はほぼ完形。口径14刷径18.4器高21.9cm。胴外面に細かなハケメが残る。218は口縁の長い甕で口径18cm。219は口縁が短く胴が強く張る甕で口径16.2cm。

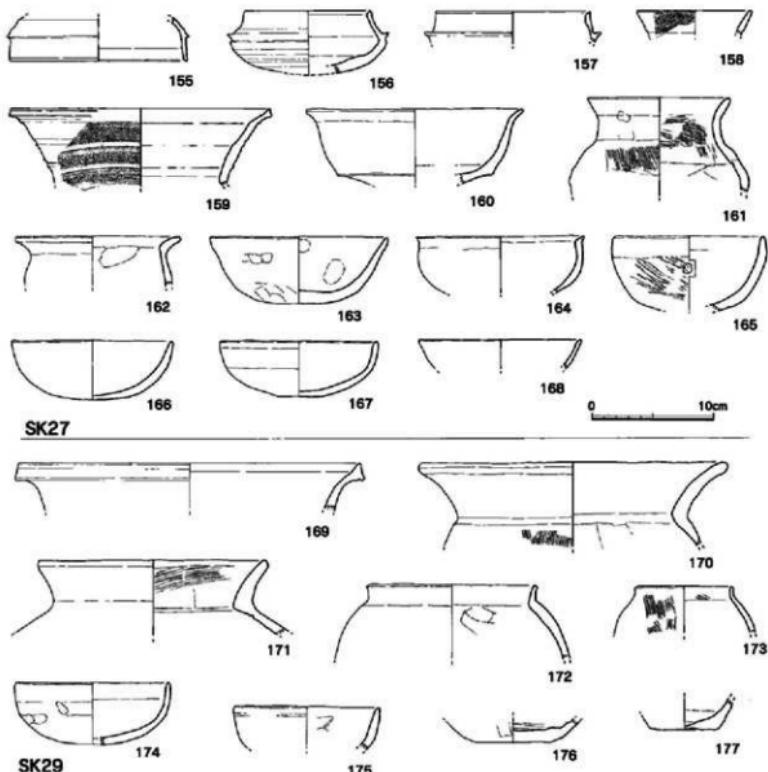


Fig.16 SK27・29出土遺物実測図(1/4)

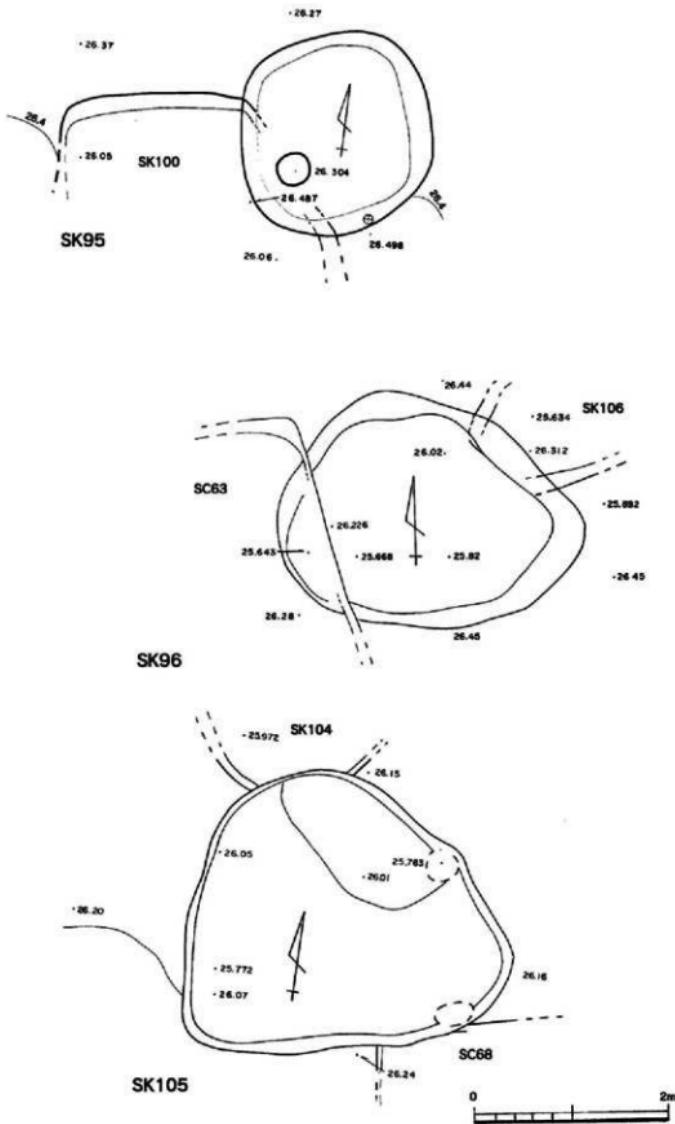


Fig.17 SK95・96・105実測図(1/50)

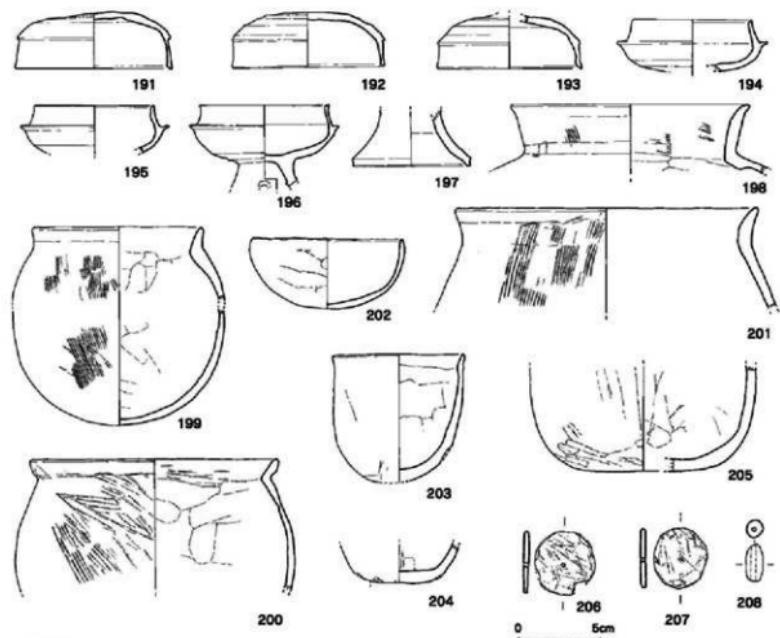
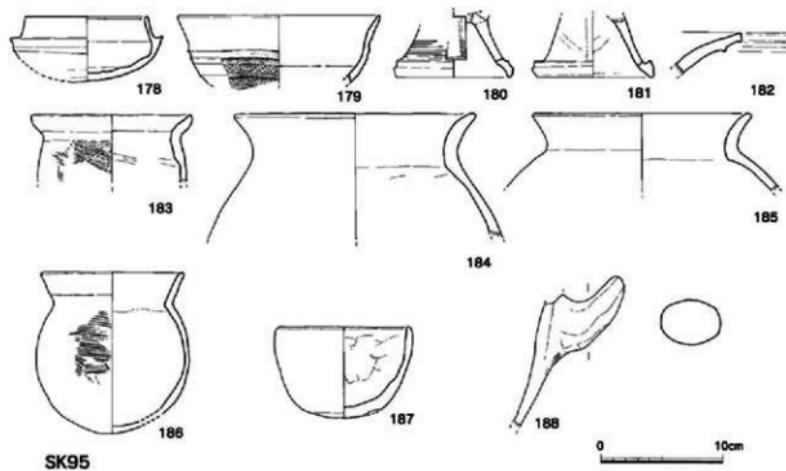


Fig.18 SK95・96出土遺物実測図 (1/4・206~208-1/3)

外面頸部下口縁内面に粗いハケメが残る。220は口径21.5cm。外面頸部に浅い沈線を施す。222はほぼ完形。口径15.5胸径19.6底径11.2器高25.3cmで、軟質土器の影響で平底を呈する。窓開き土器で、胸上位に径8.5cmの円孔を、底部に6×2.5cmの方形に焼成後の穿孔を施す。221は鉢で口径11.1cm。外面胸下半にケズリを施す。223・224は壺で223は口径13器高4.8cm・224は口径12cm。225・226は黒色土器の壺。225で口径12.6器高5cm・226で口径12.8cmを測る。ともに内外面に粗いケンマを施す。227は大型の管状土錐で8.2×3.9孔径1.7cm重量116gを測る。

SK130・131・135 (Fig.20) B群北側住居群SC69の南に位置する土取り場状の大型土壙、6基の寄り合いで一連のものである。11×10.5×0.1mと浅い不整形の土壙で、遺物は多く、コンテナ12箱分を出土している。

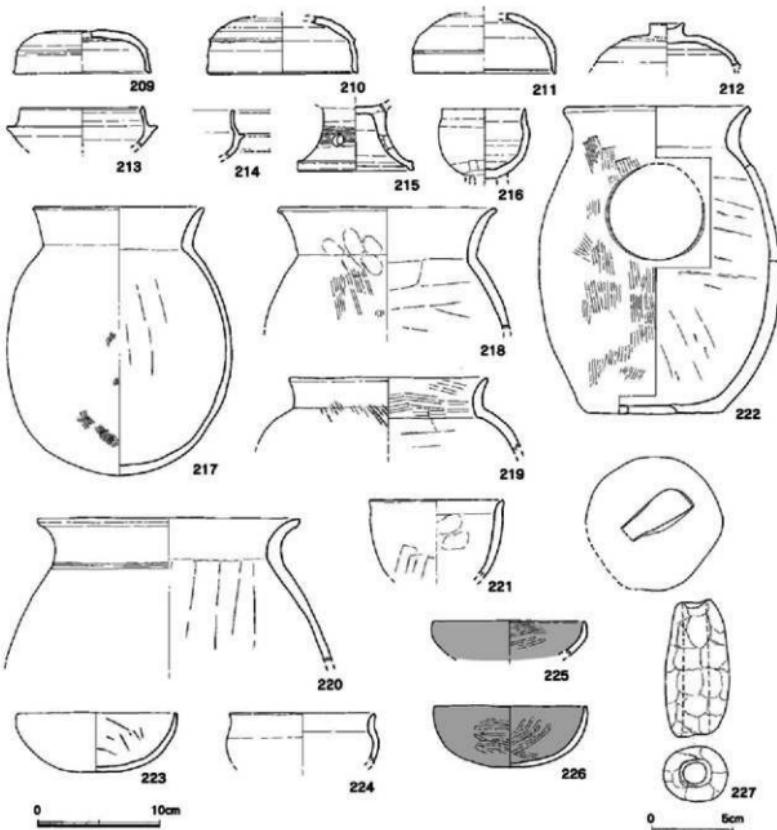


Fig.19 SK105出土遺物実測図 (1/4・227-1/3)

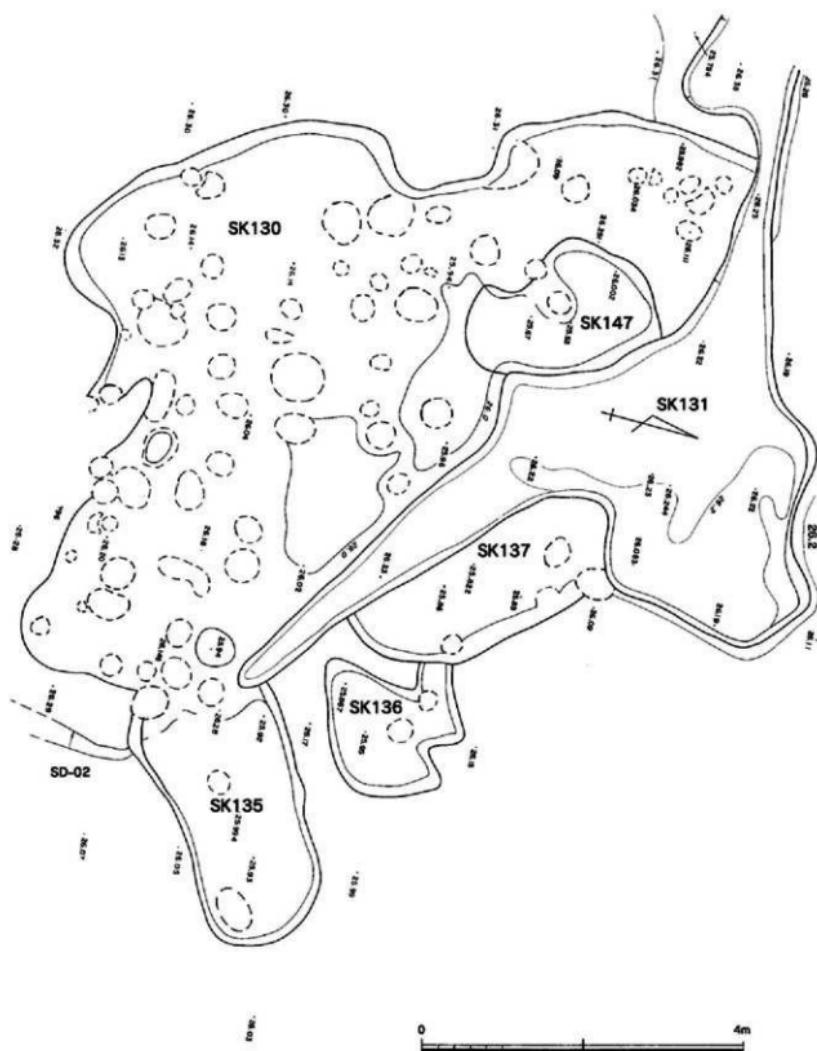


Fig.20 SK130・131・135実測図 (1/60)

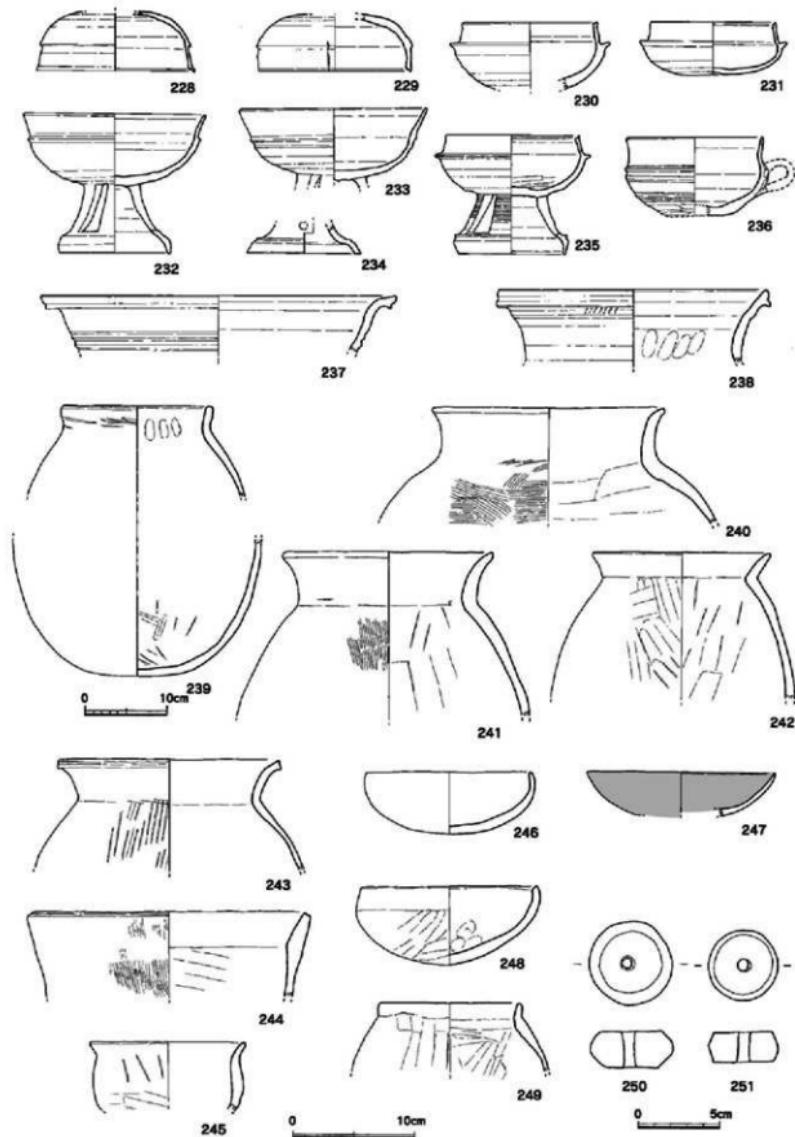


Fig.21 SK130出土遺物実測図 (1/4 · 239-1/6 · 250 · 251-1/3)

出土遺物 (Fig.21 PL.13) 228~254はSK130出土。228~238は須恵器。228・229は壺蓋で口径・器高は228で 13×4.9 ・229で 12.5×4.7 cm。228は口唇内面に沈線を施し、229は口唇内面に凹線気味に面取りし口縁外面にヘラ記号を刻む。230・231は壺身で230は受部径13.2cm。体部の1/2以上に回転削り口唇内面は凹線気味に仕上げる。231は受部径12.1器高4.4cm。口唇内面に沈線を施す。232~235は高壺で232・233は無蓋高壺。232はほぼ完形。口径15器高11.5cm。233は壺部で径15.4cm。壺部外面突起下に波状文を脚部に方形透かしを3ヶ所穿つ。234は脚部で径9.4cm。円形透かしを穿つ。235是有蓋高壺。受部径12.8器高9.7cm。口唇内面に沈線を脚外面にカキメ・方形透かしを3ヶ所穿つ。236は把手付土器で口径11.2器高6.4cm。外面突起間に波状文を体部下位に手持ちヘラケズリを施す。237は高杯形器台の口縁で口径29.2cm。外面突起上下に波状文を施す。238は甌口縁部。径22cm。239~249は土師器。239・249は短頸の壺。239は口径18.6胴径26.8cm。口縁外面が肥厚する。249は口径11.8cm。胴内外にケズリを施す。240~243・245は甌。240は口径19cm。胴が強く張り外面に細かなナナメハケを施す。241は口径17.2cm。胴が緩く張る。242は口径14.6cm。胴内外にケズリを施す。243は口径18.2cm。口唇に凹線を胴外面に粗いタテハケを施す。245は口径12.8cm。胴下位にケズリを施す。244は甌口縁部。口径23.2cm。口唇に凹線を施す。246・248は壺。口径・器高は246で 13.4×5.1 ・248で 14.4×6.4 cm。247は黒色土器の壺。口径15.4器高3.6cm。250・251は半島系の算盤玉形紡錘車で250は土師質で径5.1厚2.2孔径0.9cm70g・251は陶質で径4.2厚1.8孔径0.8cm45gを測る。252・253(PL.13)土師器土器片円盤で径31mm13g・70mm30gを測る。

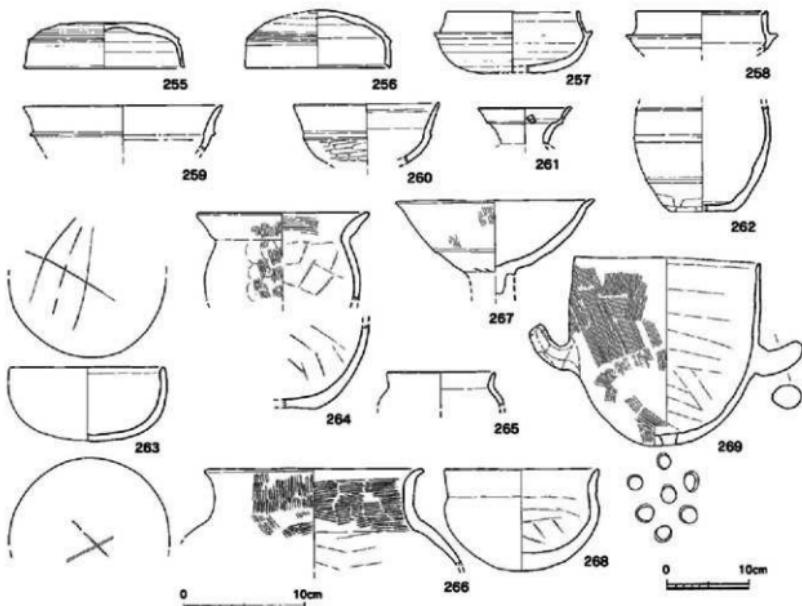


Fig.22 SK131出土遺物実測図(1/4・269~1/6)

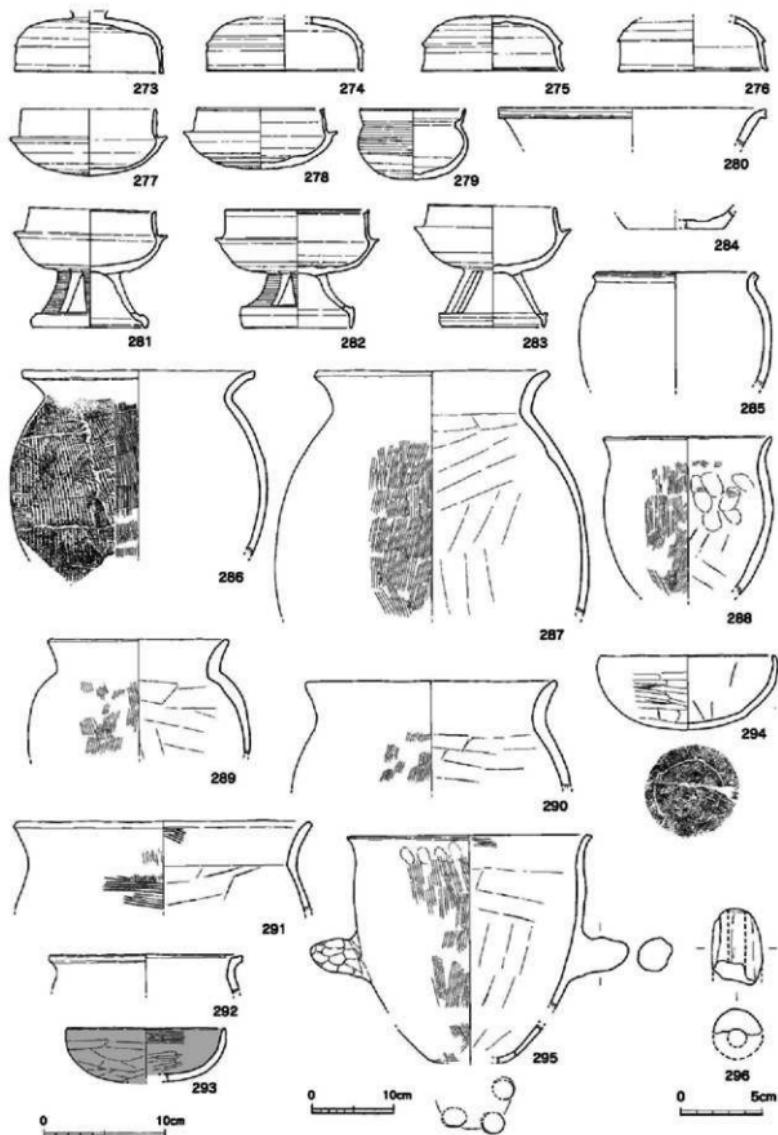


Fig.23 SK135出土遺物実測図(1/4・295-1/6・296-1/3)

255～272(Fig.22 PL.14)はSK131出土。255～262は須恵器。255・256は壺蓋で口径・器高は255で 13.2×3.7 ・256で 12×4.7 cm。ともに口唇内面に沈線を施す。256は内底に当具痕が残る。257・258は壺身で257は受部径13器高5cm。口唇は丸く収める。258は受部径12.4cm。口唇内面に沈線。259・260は無蓋高环坏部片。259は口径16.4cm。外面突帯下に波状文を施す。260は口径12cm。外面突帯下に横方向の手持ちヘラケズリを施す。胎土は精良で暗灰色。261・262は横瓶で同個体と思われる。261は口縁部で径7.7cm。内面に厚く自然釉が掛かる。262は胴部片で口径11.4cm。細かい3本の突帯間に波状文を施す。側面脇に手持ちヘラケズリを施す。胎土は精良で暗灰色。263～269は土師器。263はほぼ完形の壺。口径12.8器高6cm。内外面にナデを施し、内底に「卅」様の外底に「×」様のヘラ記号を記す。264～266は甕。264は平底で口径14.2cm。胴外面にタテハケ。265も小型で口径9cm。266は口径18cm。口縁内面にヨコ外面にタテ、以下にナナメの粗いハケメを施す。267は高环坏部で口径16.2cm。体部が殆ど屈曲せず痕跡程度で直線的に延びる。脚部は接合面から剥がれる。268は壺で口径12.7器高8.3cm。内面頸部下にケズリを施す。269は甕。口径23器高23.5cm。直口口縁で、底面に径13～16mmの蒸気孔を七曜文状に穿つ。270～272(PL.14)は土師器片円盤で、径94mmで欠損・80mm58g・37mm12gを測る。273～296はSK135出土(Fig.23)。273～279は須恵器。273～276は壺蓋で口径・器高は273で 12.2×5.2 ・274で 12.8×4.4 ・275で 11.8×4.5 cm。口唇内面に沈線を施す。273は口唇を面取りし摘みを持つ。277・278は壺身で277は受部径12.8器高5.5cm。口唇は丸く収める。278は受部径12.7器高5cm。口唇は凹線気味に仕上げる。279はほぼ完形の甕。口径8.8器高5.8cm。体部上半にカキメを施す。281～283は有蓋高环。受部径・器高は 12.6×9.7 ・ 13.4×9.6 ・ 12.8×10 cmを測る。281・282は口唇内面を凹線気味に脚部外面にカキメと方形透かしを283は口唇を丸く収め脚に方形透かしを施す。280・284～286は半島系土器。280・285・286・292は軟質甕。280は口径22cm。口唇端部に凹線。285は短頸の甕で口唇に沈線を施す。口径13cm。286は口径19.2cm。胴部外面に縦位の平行叩き。内面はナデ。胎土は黄橙色。292は口径16cm。口唇外面を面取り。284は陶質平底甕底部。径8cm。内外面ナデで胎土は暗黄橙色。287～295は土師器。287～291は甕。それぞれ口径19.2・13.8・15・20.6・24.4cmを測る。294はほぼ完形の壺。口径14.4器高6.1cm。内外面にヘラ・ユビナデを施し外底に「○」様のヘラ記号を記す。295は甕。口径30器高28cm。口唇に沈線、底面に径25mmの蒸気孔を五曜文状に穿つ。293は黒色土器環。口径13器高4.5cm。296は土錘。径3cmで半折。

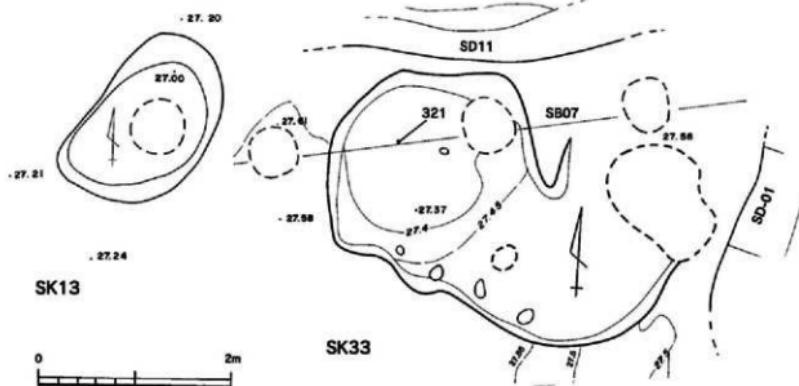


Fig.24 SK13・33実測図(1/50)

(6)B群南部 SC13~25のB群南西住居群の西側に沿う様に位置し、大型の土壙は無く、径5m以下のSK13・14・33・32の4基を検出している。

SK13 (Fig.24) SK13は同期のSC12の南に位置し同規模のSK14と並列する。楕円形に近い土壙で、 $3.85 \times 1.2 \times 0.21$ mを測る。

出土遺物 (Fig.25 PL.15) 297は須恵器坏蓋で口径13cm高4cm。口唇内面を凹線様に仕上げる。298は土師器甕口縁で径29.4cm。299は黒色土器の鉢で口径10.6×6.5cmを測る。

SK33 (Fig.24PL.4-2) SK33は同期のSC11の西に位置する。不整形の浅い土壙で、 $3.7 \times 2.0 \times 0.08$ mを測る。

出土遺物 (Fig.25 PL.15) 300~305は須恵器。300・301は坏蓋で口径・器高は12.2・13.2×33cm。300は口唇内面に301は端面に沈線を施す。302・303は坏身。受部径・器高は $13.4 \times 4.6 \cdot 13.2$ cm。ともに口唇内面を凹線様に仕上げる。304は高坏脚部で径9.2cm。方形透かしを穿つ。305は甕口縁。径19.2cm。外面頸部にカキメを施す。306~309は土師器甕口縁でそれぞれ径12.8・12・13.8・15cmを測る。310は黒色土器の鉢で口径15.6cm。311は軟質系の瓶把手。上面縦方向に切れ目を入れる。312は精製の滑石製紡錘車。裁頭円錐形で径4.8高2孔径0.7cm重45gを測る。側面上段に部分的に斜格子文を、下段に柳目文を細線で線刻する。底面には下書き様の線刻が残る。

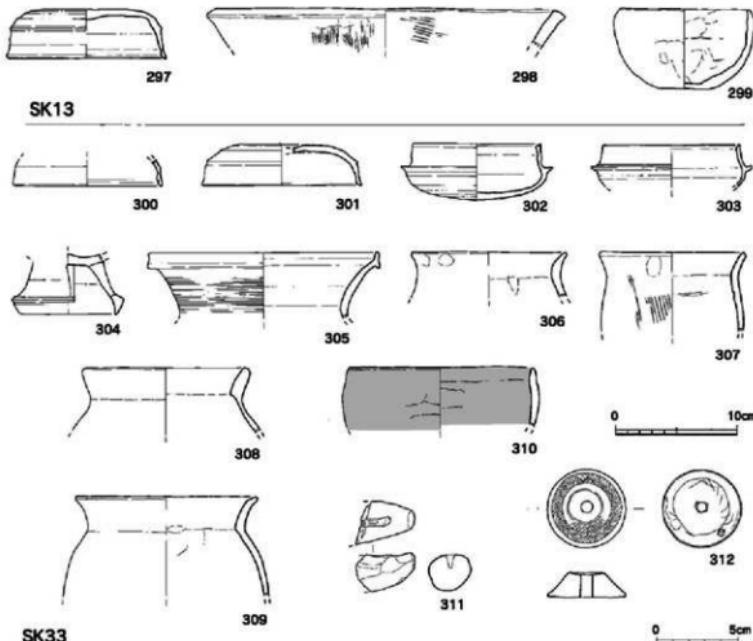


Fig.25 SK13・33出土遺物実測図(1/4・312-1/3)

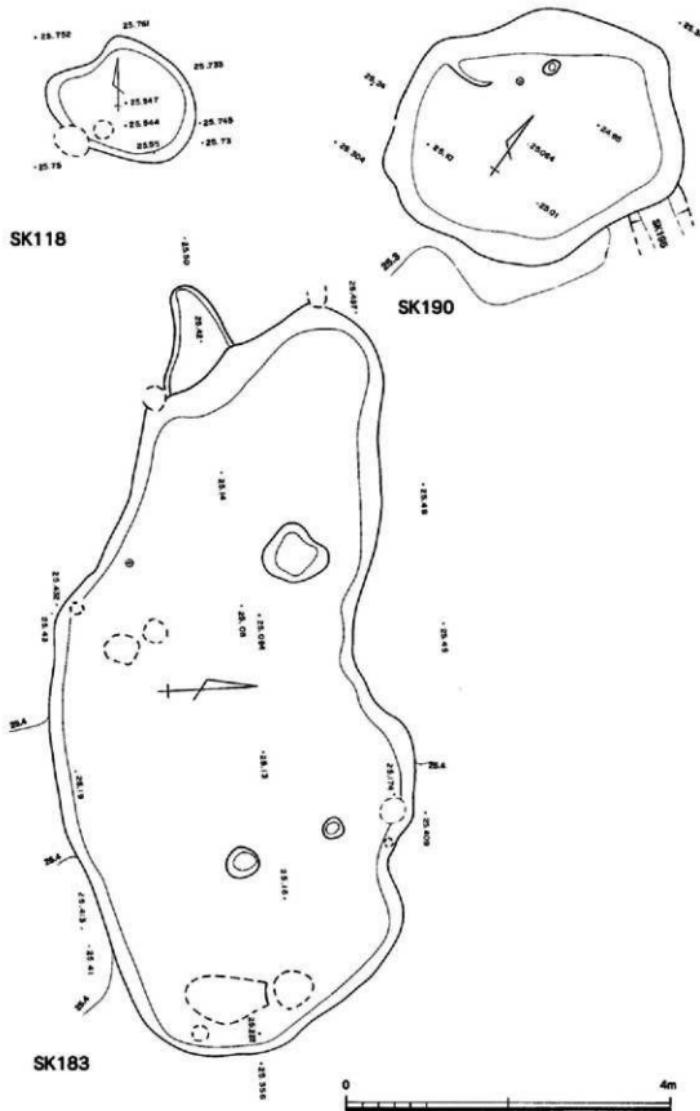


Fig.26 SK118・190・183実測図(1/60)

(7)C群北部 C群は竪穴住居群の一番の空隙地であり、住居は北西のSC100・中央のSC75・南西のSC101の3軒のみで、この間に土塙87基が調査区北辺の10m程のベルト状と、東の甕棺ベルトに沿うように幅25m程のベルト状にひしめいている。北部はこの10m程のベルト状にSK183・244等の5mを超える大型土塙8基を含む43基が分布している

SK118 (Fig.26) 西部のSC100の南、同期のSB51の内側に位置する。円形に近い $1.8 \times 1.4 \times 0.19$ mを測る浅い土塙である。

出土遺物 (Fig.27 PL.15) 313・314は須恵器壺蓋で口径・器高はそれぞれ6cm・ 11.8×4.6 cm。313は径3.2mmの摘みを314は口唇内面が段状となる。315は須恵器甕で胴部に細かな縦位の平行叩きを施す。316は黒色土器環。口径14cm器高5cm。粗いケンマを施す。

SK190 (Fig.26) ベルト地帯のほぼ中央に位置する。やや不整の隅丸方形で $3.65 \times 2.8 \times 0.29$ mを測る浅い土塙である。遺物はコンテナ2箱分出土している。

出土遺物 (Fig.27 PL.15) 318～323は須恵器。318～320は壺蓋で口径・器高は $12.6 \times 5.1 \sim 11.8 \times 4.6 \sim 12.6 \times 4.4$ cm。318・319は口唇内面に沈線を320は面取りする。321・322は壺身。受部径・器高は $12.4 \times 4.4 \sim 11.2 \sim 13.6 \times 4.8$ cmと322はゆがむ。口唇内面を凹線状に仕上げる。323は無蓋高环坏部。口径14.2高4.7cm外面体部に波状文、脚に方形透かしを4ヶ所穿つ。324～327は土器器。324～326は甕。口径20・15・14cm。327は瓶口縁。328は黒色土器環。口径11.6器高4.4cm。

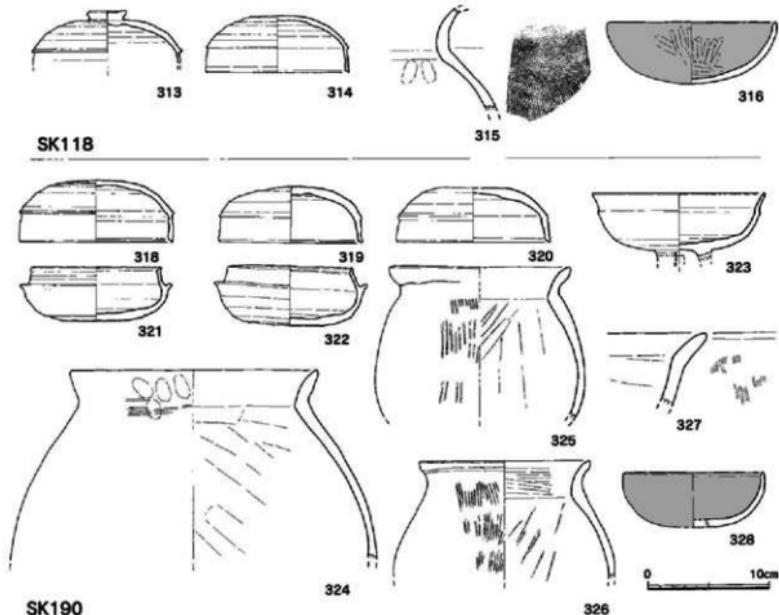


Fig.27 SK118・190出土遺物実測図(1/4)

SK183 (Fig.26) 西部に位置する不整の長方形に近い、土取り場状の大型土壤で、 $9.4 \times 4.5 \times 0.35$ mを測る浅い土壤である。遺物はコンテナ4箱分出土している。

出土遺物 (Fig.28 PL.15) 329～336は須恵器。329・330は壺蓋で口径・器高は $11.8 \times 5.1 \times 12 \times 4.8$ cm。329は径2.8mmの縞みを持ち口唇内面が凹線状。330は口唇内面が段状となる。331・332は壺身で受部径・器高は $12.2 \times 5.4 \cdot 13 \times 5.1$ cm。口唇内面は凹線状。333は無蓋高壺。口径 $16.4 \cdot 11.5$ cm。体部に波状文を、脚部にカキメと方形透かしを4ヶ所施す。334は筒形器台の筒部片で突帯で径10.8cm。突帯間

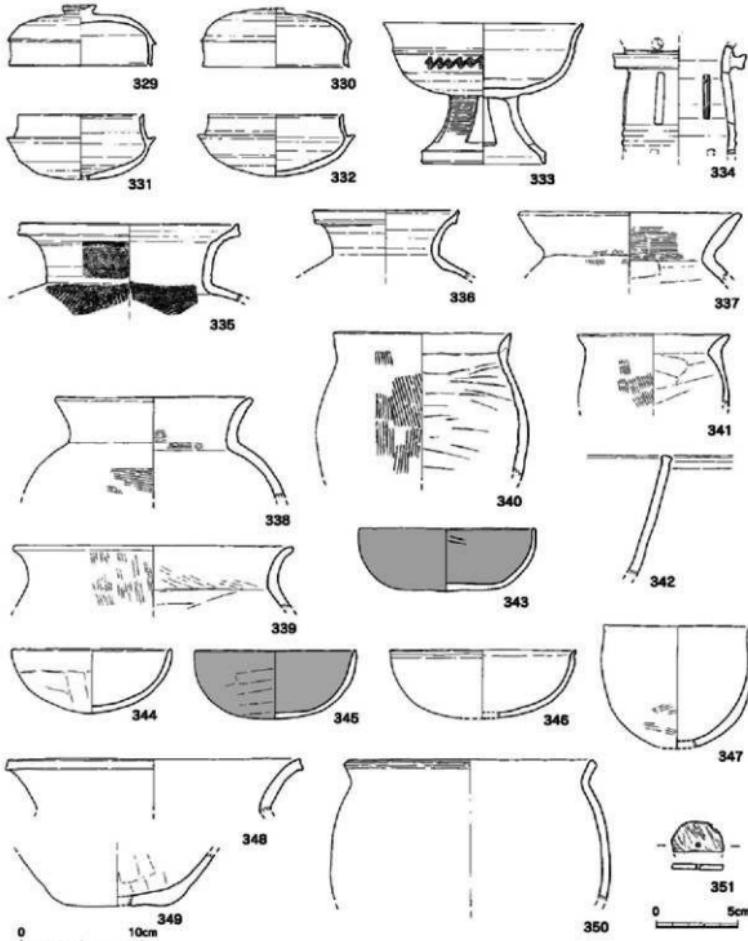


Fig.28 SK183出土遺物実測図(1/4・351-1/3)

に波状文と、方形透かしを6ヶ所、突带上に径7mmの円形透かしを穿つ。335・336は甕で口径18・12cm。頸部に波状文を施す。337～345は土師器。337～341は甕。口径18.3・16.2・23・14.6・12.5cm。342は瓶口縁。344・346は壺。口径・器高は13.2×5.2・15.2×5.6cm。347は鉢で口径12.2器高10cm。343・345は黒色土器環。口径・器高は14.5×5.1・13.4×5.6cm。348～350は軟質土器甕。348は口径24cm。口唇外面を面取りする。胎土は暗黄橙色。349は平底で径8.3cm。350は口径20cm。口唇端面を面取りし沈線を施す。351は滑石円盤片で径31厚3孔径1.5mmを測る。352～354(PL.15)は土師器片円盤。長径・重量は33mm8g・47mm18g・57mm40gを測る。

(8)C群南部 調査区東端の甕棺ベルトに沿うように、南西から北東方向に幅25m程のベルト状にSK168・201等の5mを超える大型土壙8基を含む41基が分布している

SK161 (Fig.29) 南部で同期のSC75・SC101間に位置する。円形に近い2.95×2.7×0.06mを測る浅い土壙である。遺物はコンテナ1箱分出土している。

出土遺物 (Fig.30 PL.15) 356～368は須恵器。356は甕蓋で口径12.2器高5cm。口唇内面が凹線状となる。357は壺身。受部径12.8器高4.3cm。358は高环脚部。径9.8cm。細い「コ」字突带上に径8mmの円孔を3ヶ所穿つ。359～361は土師器。359・360は甕。口径19.8・13.4cm。361は壺。口径14.5器高4.5cm。362は土師質の紡錘車。径4.3厚2.2孔径0.9cm50g。363・364は土錐。363は長2.4径1.5孔径0.3cm4g。364は大型で長8径4.6孔径1.2cm150gを測る。

SK197 (Fig.29) 北部でⅣ期の満SD41に切られる。不整長方形で2.3×1.7×0.1mを測る浅い土壙である。

出土遺物 (Fig.30 PL.15) 365～372は須恵器。365～368は壺蓋で口径・器高は12.9×6.7・12.6×5.3・12.6×5.4・12.2×4.4cm。365・366は摘みを持ち体部境は突帶状で口唇内面が凹線となる。367・368は体部境は突帶状で367は口唇内面に沈線を368は丸く収める。369・370は壺身。受部径・器高は13×5.9・13×5.1cm。ともに口唇は丸く収める。371は瓶口縁。径14cm。口縁外面と頸部に波状文を施す。372は高环形器台の脚部。突帶間に波状文と方形透かしを穿つ。373～378は土師器。373は壺。口径13器高6cm。374・376は甕。口径10.6・26.6cm。375は瓶口縁。口径23cm。378は小型高环の環部。口径11残高3.7cm。内面体部にケンマを施す。379は半島系の算盤玉形紡錘車。土師質で径4.2厚2.6孔径0.6cm59g。380は土師器片円盤。底部片を利用して長径67mm44gを測る。

SK167 (Fig.29) 中央部に位置し、同期の大型土壙SK168を切る。不整円形で3.02×2.9×0.27mを測る浅い土壙である。遺物はコンテナ2箱分出土している。

出土遺物 (Fig.31) 381～385は須恵器。381は甕蓋で口径12cm。体部境は突帶状。口唇内面が凹線状に、内底に当具痕が残る。382は壺身。受部径13.3器高5.1cm。383は無蓋高环部。口径17.7cm。口縁下に波状文を施す。384は高环脚部。径10.8cm。外面にカキメ後方形透かしを穿つ。385は小型の把手付土器。口径7.6器高4.4cm。外底脇に手持ちヘラケズリを施す。386・387は土師器。386は壺。口径11.8cm。387は甕。口径12.8cm。388は黒色土器環。口径11.8cm。389は軟質の壺蓋。平坦な天井部に径3cmの擬宝珠状の摘みを持ち天井径は15.2cmを測る。胎土は浅黄橙色を呈する。390は紡錘形の大型管状土錐の半折品。径4.5孔径1cm。391 (Fig.37) は塊形渾で長径4.4厚1.4cmを測る。

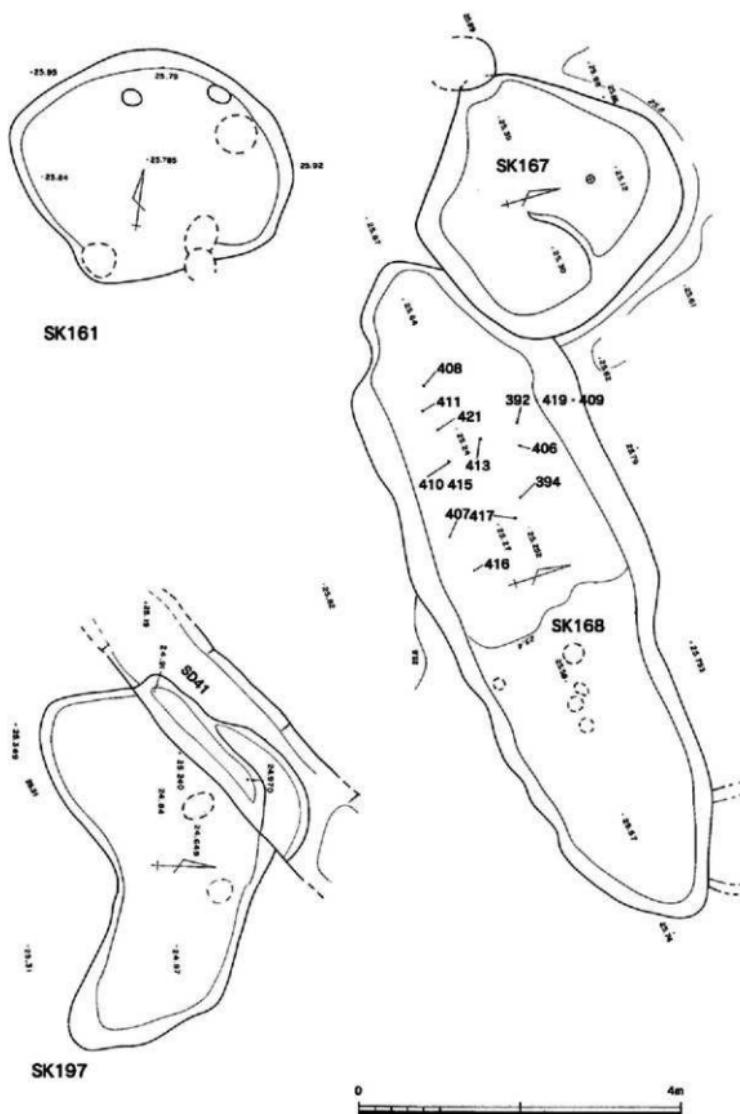


Fig.29 SK161・167・168・197実測図(1/60)

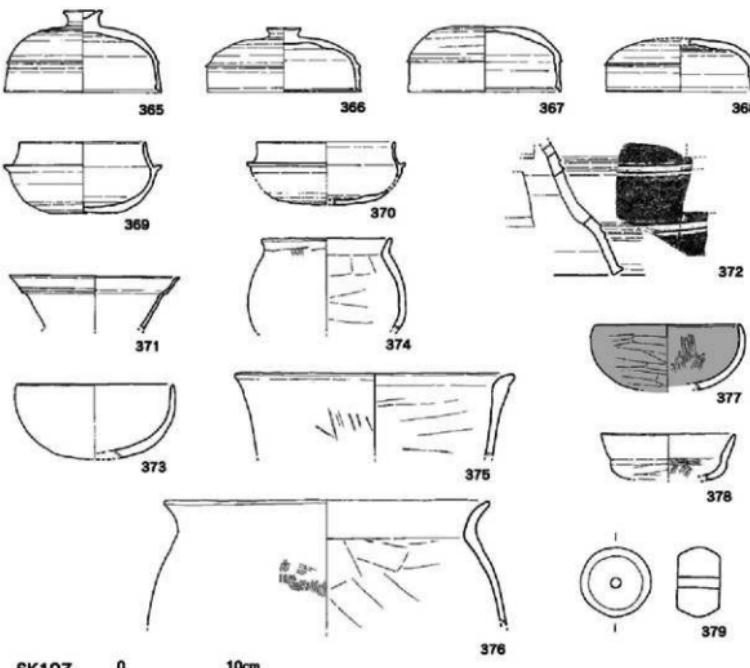
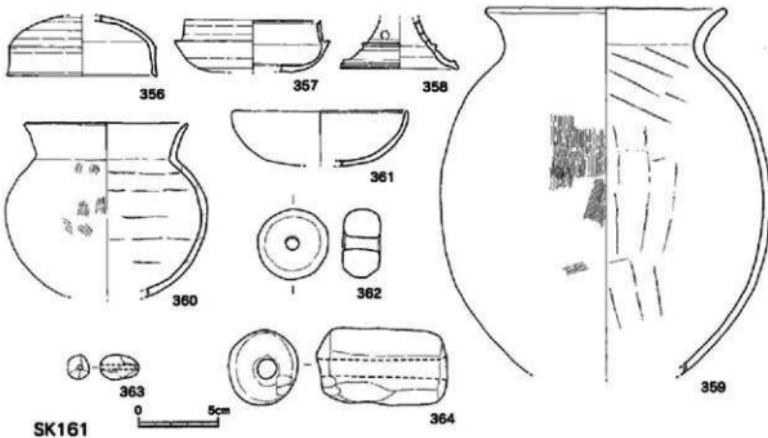


Fig.30 SK161・197出土遺物実測図 (1/4・362～364・379—1/3)

SK168 (Fig. 29 PL.5-1) 中央部に位置し、同期の土壙SK167に切られる。不整長方形で8.85×2.8×0.58mを測る比較的浅い土壙である。遺物は完形品が目立ちコネナ8箱分出土している。

出土遺物 (Fig.31 PL.16) 392~401は須恵器。392・393は環蓋で口径・器高は13.2×4.9・11.4×4.7cm。体部縁は突帶状。口唇内面が回線状になる。394・395は环身。受部径・器高は12.6×5・12×4.5cm。口唇内面は面取りする。396・397は甌。396は口縁で径13.4cm。口縁外面と頸部に波状文を施す。397は胴部片で径15.3cm。沈線間に1.2cmの注口を穿ちカキメ工具の刺突文を2段に、中位にカキメ

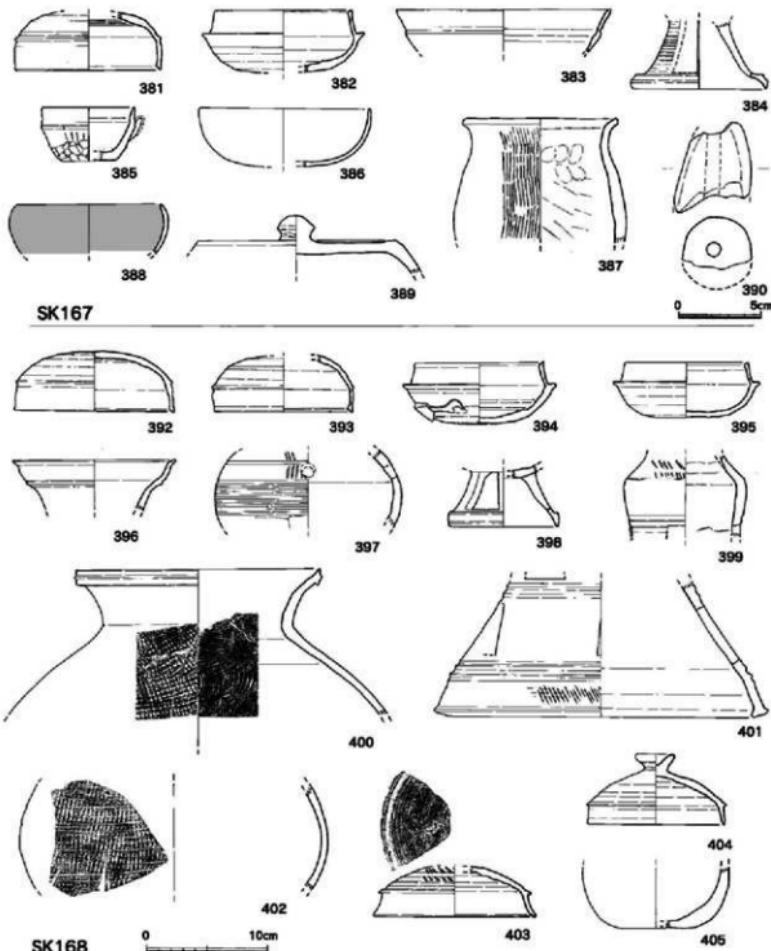


Fig.31 SK167・168出土遺物実測図(1/4・390—1/3)

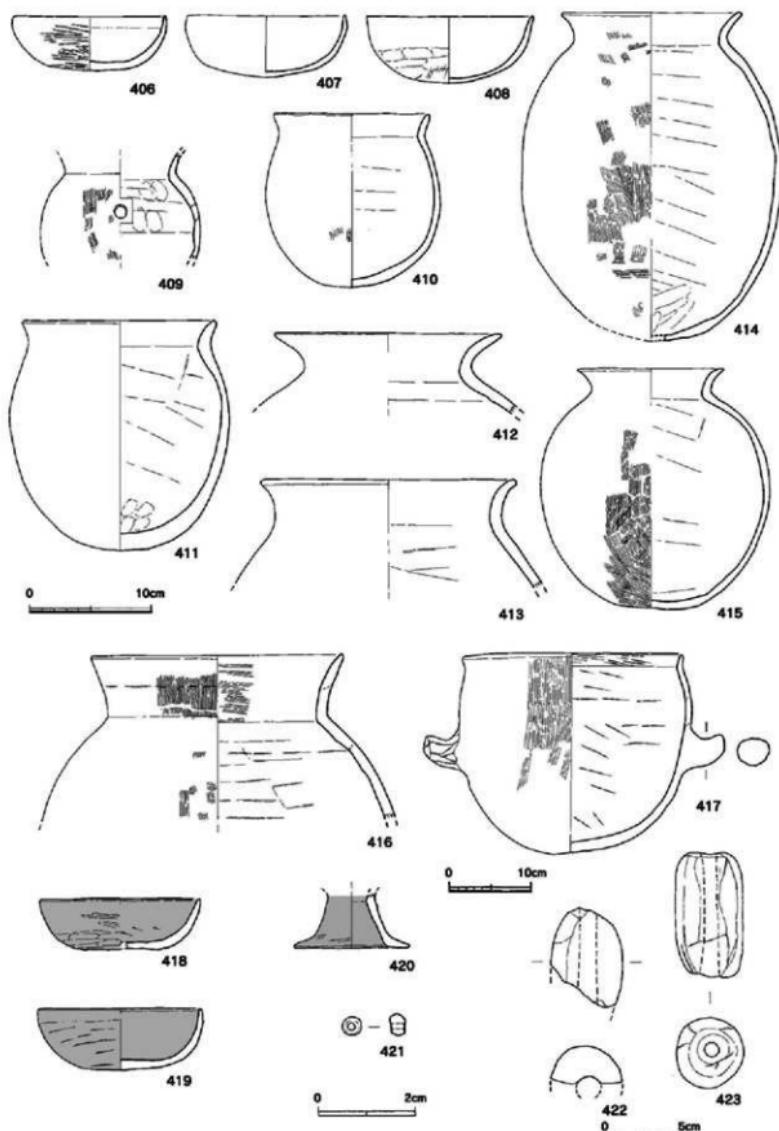


Fig.32 SK168出土遺物実測図(1/4・414・415・417-1/6・421-1/1-422・423-1/3)

を施す。398は高環脚部。径9cm。広い方形透かしを穿つ。399・401は器台。399は筒形器台の肩部。径10.1cm。肩部にカキメ工具の連続刺突文を2段に、以下の胴部突帯間に波高の高い波状文と方形透かしを施す。401は高環形器台の脚部。径27.6cm。外面2重の突帯間にカキメ後波状文を4段、方形透かしを施す。400は甕。口径20cm。胴外面に格子目叩きを施す。402～404は陶質土器。402は甕胴部。径25.3cm。外面に縦位の平行叩き後ヨコカキメ。内面はナデ消し。403は坏蓋。口径13.4cm。口唇内面に沈線を、83同様天井部に2段のカキメ工具の連続刺突文を、中央に鉤状摘みを持つと思われる。胎土は褐灰色。404は径3.2cmの杯状の摘みを持つ坏蓋。口径11.2cm。天井が高く器高5.8cmを測る。調整は全面回転ナデ。胎土は灰色。405は軟質の平底甕底部。径6cm。406～417 (Fig.32) は土師器。406～408は环。口径・器高は12.4×4.5・13.2×5.1・13.6×5.5cm。406は外面ケンマ。他はナデ。409は壺で胴上位に難様の径1.1cmの焼成前の穿孔がある。胴径13cm。410～416は甕。口径・器高は12.8×14.2・16×18.9・18.6・21・22×40.3・18×29.4・20.8cm。417は釜形土器。口径26.6器高24.5cm。器形は瓶であるが底面に穿孔は無い。外面は暗橙色・内面は黒褐色を呈す。418～420は黒色土器。418・419は坏。口径・器高は13.2×4.1・13.5×5.1cm。420は高環脚部。径9.4cm。421はガラス小玉。ライトブルーを呈し径4厚3mm0.05gを測る。422・423は大型管状土錘。422は径4.2cmの欠損品。423は長径7.7怪4.2孔径0.8cm145gを測る。424～426 (PL.16) は土師器片円盤。長径・重量は45mm16g・50mm18g・46mm15gを測る。

SK201 (Fig.33 PL.5-2) 中央北寄りに位置し、Ⅲ期のSC103・Ⅳ期のSD41に切られる。大型の土取り場状の不整形土塹で6.5×4.0×0.13mを測る浅い土塹である。

出土遺物 (Fig.34～36 PL.17) 427～442は須恵器。427～431は坏蓋で口径・器高は12.6×5.4・13.4×5.5・12.6×3.6・12.2×5.1・12.4×4.8cm。430の体部境が突帯を成す以外は段を成す。口唇内面は凹線か段を成す。427・428は摘みを持つ。432～434は坏身。受部径・器高は13.1×4.9・12×4.6・12.6×4.8cm。口唇内面は432は段を433は沈線を434は端部を凹線気味に仕上げる。435は口径7.2cmの小壺。436・437は無蓋高环の环部。436は口径16.4cm。437は口径14.残高5.3cm。ともに突帯下に波状文を施す。437は脚部に方形透かしを4ヶ所穿つ。438は甕。口径11.2・胴径10.7cm。頸部と胴部沈線間に波状文を施す。胴下半は手持ちヘラケズリを施す。439は甕。口径18.8cm。口唇外表面を面取りし頸部以下に縦位平行叩きを施す。陶質土器の可能性もある。440・441は壺口縁。440は口径17.5cm。口唇外表面を2段に肥厚させ頸部突帯上下に波状文を施す。441は口径15.6cm。口唇外表面を凹線状に仕上げ2条の頸部突帯上下に波状文を施す。陶質土器の可能性もある。他に内面ナデ消しで胴外面に縦位の平行叩き後1.5～2cm間隔で平行沈線を6本以上施す破片がある。442は高環形器台ではば完形。口径34・頸部径11・脚径25.6器高33.1cm。口縁は短く外反し端正な口唇の外間に三角突帯を1条施し、坏体部は木目直交の平行叩きで成形しこれを回転ナデで消しているが、下位と胴内面に残っている。内面下半にも当具痕が残る。外面には2条単位の三角突帯を2箇所施し、この間に櫛描波状文を施文する。脚部外面上には同様に2条単位の三角突帯を3箇所施し、2段の空間に櫛描波状文を3段施文しさらに方形透かしを4箇所穿つ。外面の四分の一程と坏内底には自然釉が掛かり重ね焼きの痕跡が残る。443～454は土師器 (Fig.35)。443～448は甕。口径・器高は20・15.6×21・13.6×13.7・16・12.8・12cm。445は著しい被熱を受け全体的に黒く変色する。449・450は瓶。449は口縁が外反し口径32.2器高36.5cm。丸底の底部に径6cm前後の蒸氣孔を6孔梅鉢状に穿つ。450は小型で口径16.6cm。452・454は环。口径・器高は13.5×7.3・14.8×5.4cm。453は鉢。口径17.5器高14.5cm。外面下半に指圧痕が多く残る。451は黒色土器坏。口径12cm。口縁内外にケンマを施す。455～462 (Fig.36) は半島系の軟質土器。

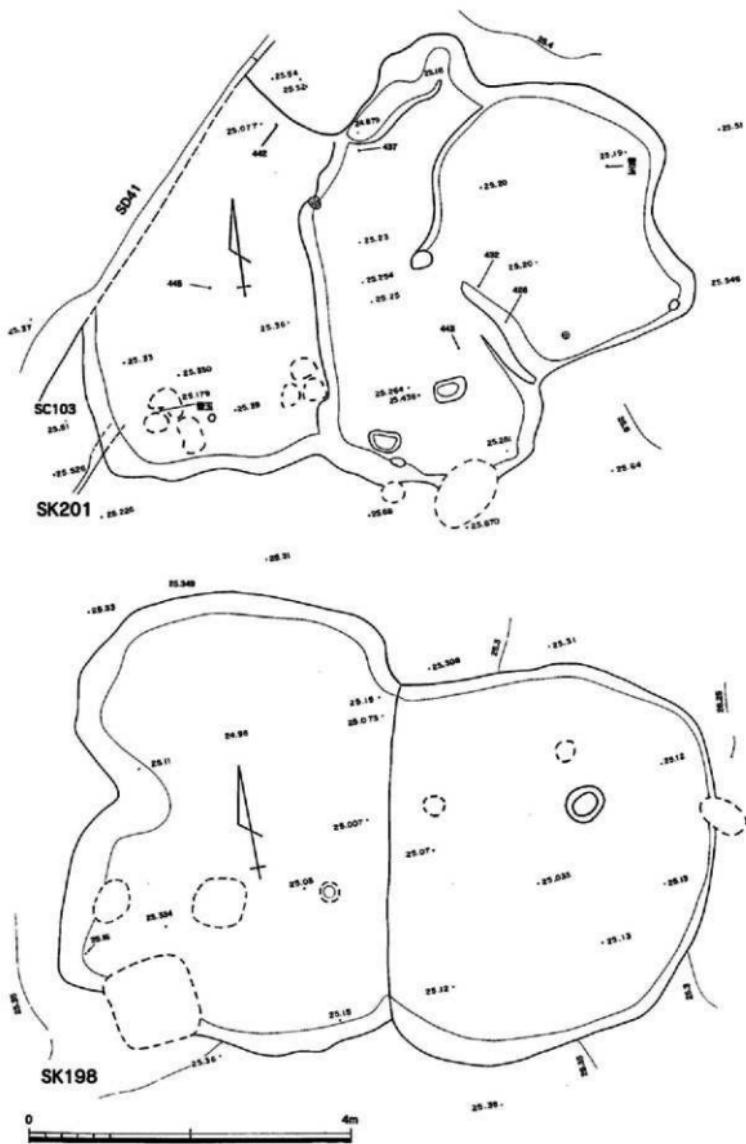


Fig.33 SK201・198実測図(1/60)

455は瓶。口径25.6cm。緩く外反する口縁端部に沈線を施し把手上面に切れ目を入れる。器壁が荒れ調整不良。胎土は暗橙色。456・457は平底の盤形土器。456は口径29.4器高11.8cm。口唇両端を若干肥厚させ全面にナデ、外底脇に指圧痕が残る。胎土は暗黄橙色。457は口径18.4器高5cmで器形・調整は456と同様。胎土は暗橙色。458は把手付土器。口径16.8器高15.4cm。口縁下に突帶を2条削り出し径1cmの円孔を焼成前に穿つ。これから底部脇にかけ1.8×1.6cmの方柱状の把手を貼付し上端に鶏冠状の装飾を貼付する。調整はナデ。暗橙色を呈する。459・460は小型の鉢で口縁下に突帶を1条削り出し、把手を持つ可能性がある。口径・器高は12.8・12.8×6.9cm。暗橙～暗黄橙色を呈する。461は389様の蓋の摘み。径2.9cm。暗黄橙色を呈する。462は小型の甕の口縁片。強く外反する口縁端に沈線を施す。胎土は精良で橙色を呈する。463は滑石製の管玉。長30径8孔径3mm3.1g。464は碧玉製管玉。長12径10孔径5mm1.6g。465は半島系の算盤玉形土製劔鍔車の半損品。径40厚16孔径7mm。陶質でヘラナデ調整。466・467(PL.17)は土師器片円盤。それぞれ長径26mm4g・60mm42gを測る。468～470(Fig.37)

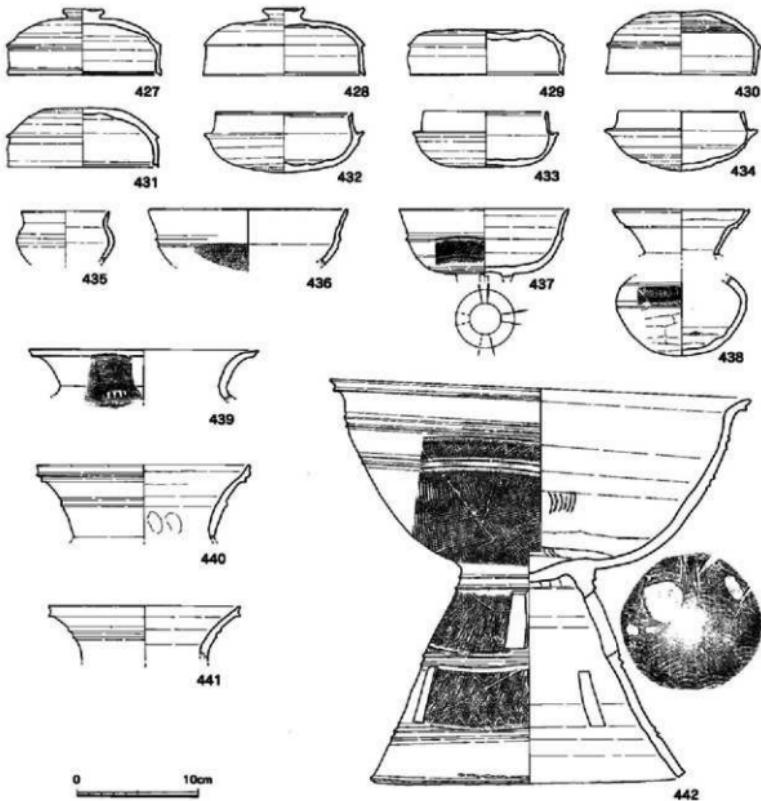


Fig.34 SK201出土遺物実測図.1(1/4)

は炉壁と思われ、土師質で多くのスサを含む。灰褐色を呈し469は還元焼成部分が残る。468・470には径20・32mmの模骨痕がある。他に焼土塊470点(PL.17-588)がある。

SK198 (Fig.33 PL.6-1) 北東部に位置する大型の土取り場状の不整形土壙で8.0×4.5×0.33mを測る浅い土壙である。

出土遺物 (Fig.36 PL.17) 471~478は須恵器。471~473は壺蓋で口径・器高は11.6×5.4・13×5・11.4×4.6cm。体部境は段を成し口唇内面は凹線か段を成す。471は摘みを持つ。474・475は壺身。受部径・器高は12.4×5.1・12.4×5.5cm。口唇内面は474は凹線を475は沈線を施す。476は有蓋高环の壺

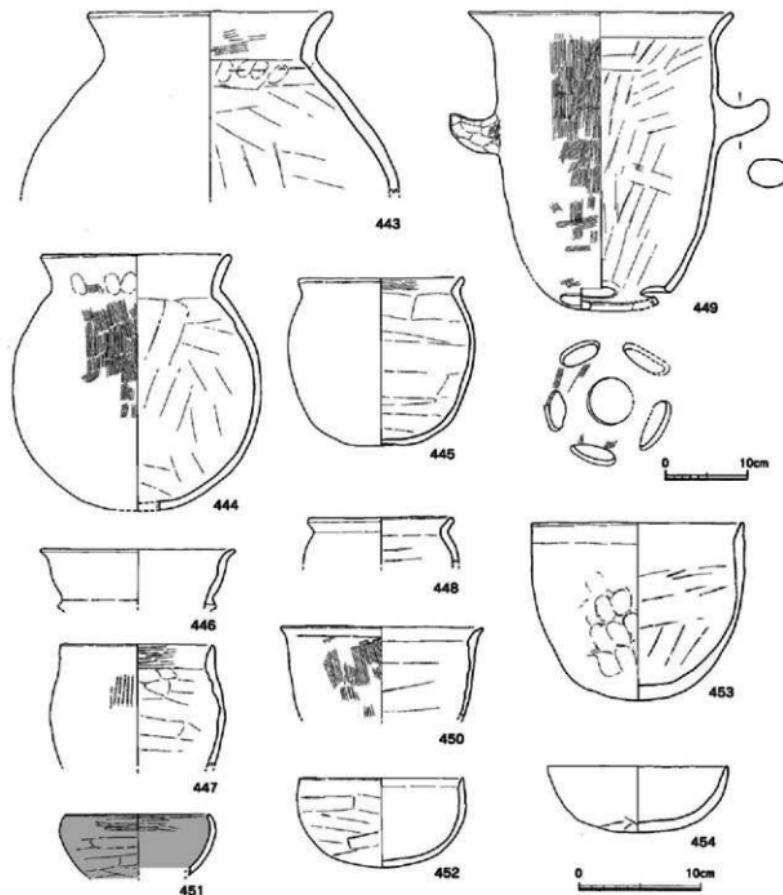


Fig.35 SK201出土遺物実測図.2 (1/4・449-1/6)

部。受部径13cm高4.7cm。口唇端部に沈線を施す。脚部に方形透かしを4ヶ所穿つ。477は壺口縁部。口径16.6cm。口唇外面を面取りし胴部に継ぎ平行叩きを施す。内面ナデ消し。478は壺口縁部。口径17cm。口唇内外に肥厚させ口縁下と頸部に細かい突帶を施しこの上下に波状文を施す。479は土師器甕。口径19cm。外面はヨコナデ内面頸部下はケズリを施す。480・481は大型の管状土錘。480は長87径38孔径17mm105g。481は長88径48孔径14mmで横半分近くが欠損する。482(PL.17)は土師器片円盤。長径42mm27gを測る。

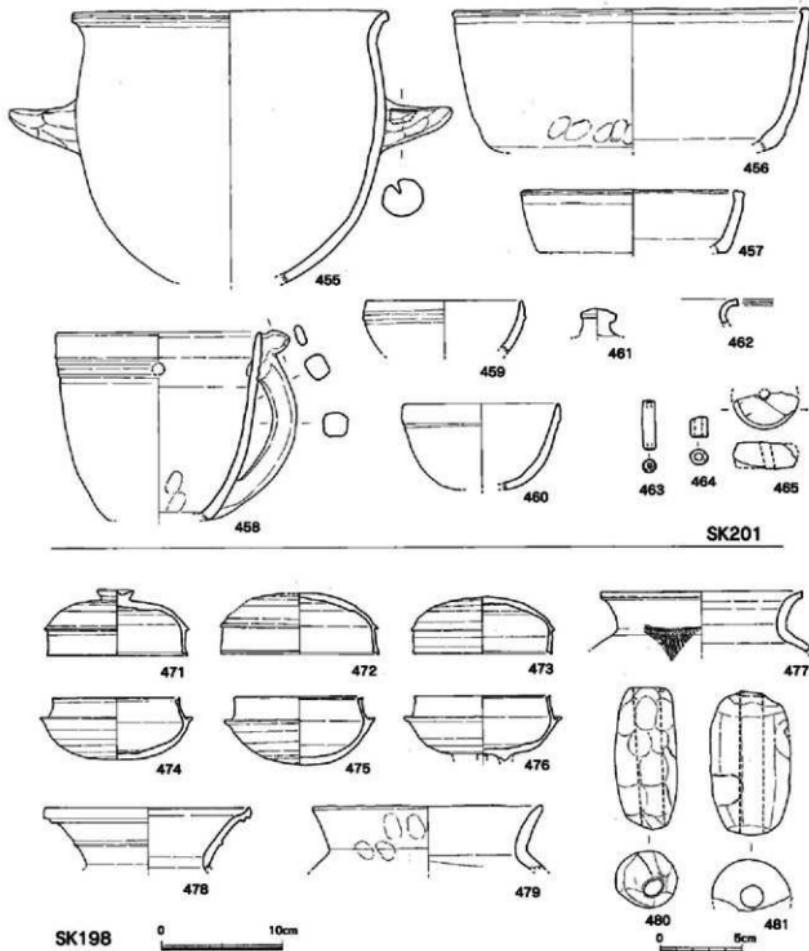


Fig.36 SK201・198出土遺物実測図(1/4・463～465・480・481-1/3)

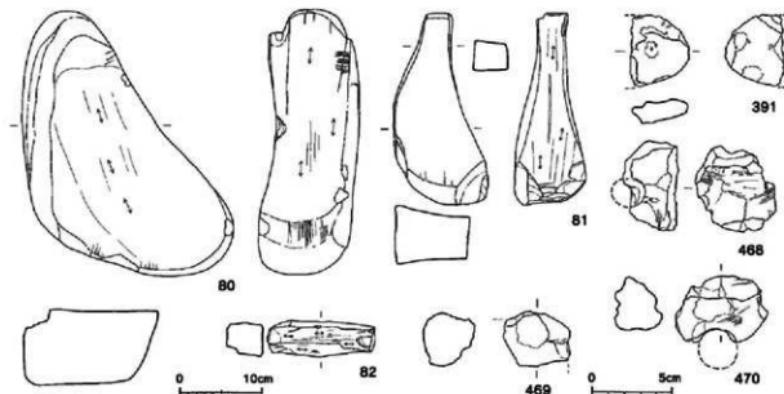


Fig.37 SK出土石製品・鉄滓実測図(1/6・391・468~470-1/3)

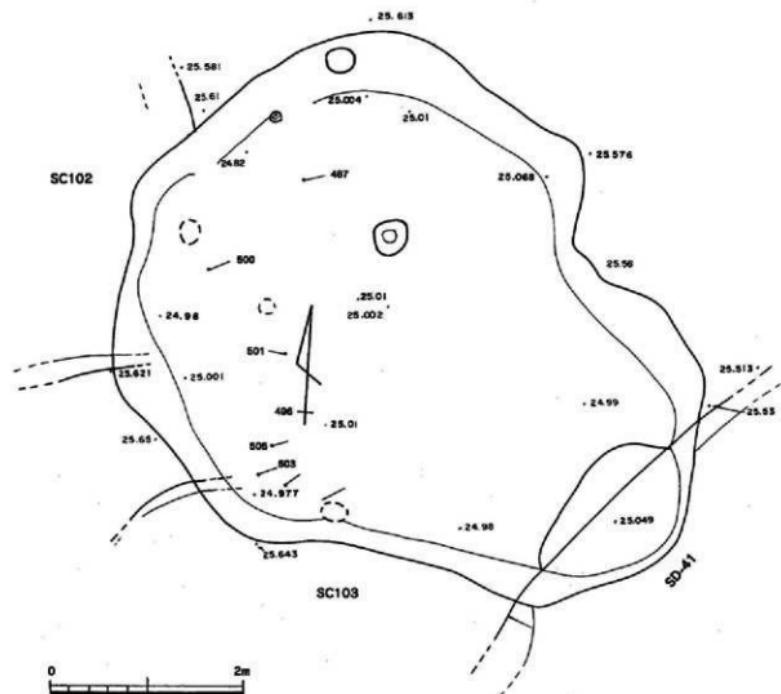


Fig.38 SK214実測図 (1/50)

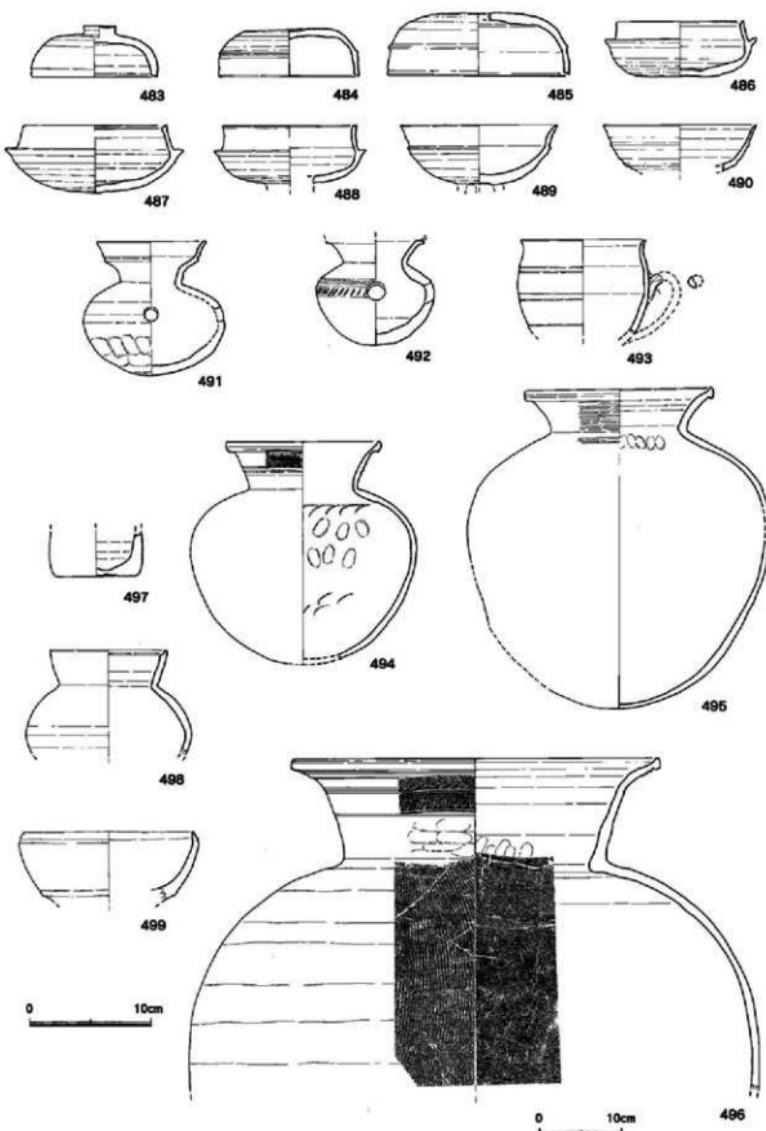


Fig.39 SK214出土遺物実測図.1 (1/4 × 494~496-1/6)

SK214 (Fig.38 PL.6-1) SK201の北西部に位置する大型の土取り場状の不整形土壇で $6.4 \times 5.15 \times 0.56$ mを測る。ⅢB期のSC102・103に切られ、コンテナ16箱分の遺物が出土している。

出土遺物 (Fig.39・40 PL.18) 483～496は須恵器。483～485は環蓋で口径・器高は $10.2 \times 4.3 \cdot 11.6 \times 3.9 \cdot 15 \times 5.2$ cm。484・485は体部境は突帯を成し口唇内面は凹線を成す。483は境を成さず径2.6cmの摘みを持つ。486・487は环身。受部径・器高は $12.4 \times 4.6 \cdot 14.2 \times 5.5$ cm。口唇内面は486は沈線を487は凹線を施す。488～490は高环の坏部。488は受部径12.5残高4.7cm。口唇端部に凹線を施す。489・490は口径・残高は $12.8 \times 4.9 \cdot 12.4$ cm。外面突帯下に波状文を施す。491・492は甕。491は口径9器高11cm。口縁外面に波状文胸下半に手持ちヘラケズリを施す。注口径1.1cm。492は口縁部を欠く。胸径9.8cm。頸部に波状文を胸部2条沈線下に波状工具の連続刺突文を施す。胸下半には平行叩痕が残る。注口径1.4cm。493は把手付土器。口径10.2cm。調整は回転ナデ。器壁は薄く胎土は灰赤色を呈し陶質土器の可能性もある。494～496は甕。494は口径19器高27.5cm。頸部突带上に波状文を胸上半にカキメ下半に格子目叩きを施し内面はナデ消す。495は口径23器高39.6cm。頸部にカキメ胸部に平行叩き内面に当具痕が残る。496は口径45.5胸径70cm。頸部に1条突帯を施し上下に波状文を施す。胸部に継位平行叩きを施し、内面を緩くナデ消す。497～499は半島系土器。497は陶質の小型平底甕。径6.6cm。外底にヘラナデを施す。498は瓦質の壺。口径14cm。内反する口縁外面に沈線を施す。黄橙色を呈す。500～509 (Fig.40) は土師器。500・501は坏。 $12.6 \times 5.9 \cdot 12.8 \times 4.9$ cm。502は黒色土器坏。 14.2×5.7 cm。503は甕。 7.2×11.2 cm。504・505は高坏。 $13.6 \cdot 12.6 \times 9.8$ cm。506は鉢。17.8cm。507は甕。13.6×13cm。底部に径8cmの焼成後の穿孔がある。509は甕。 22×26 cm。508は瓶か釜。19.4cm。510は滑石白玉。径5.5厚2孔径2mm。511・512 (PL.18) は土師器片円盤。60mm・43mm 14g。589～592は炉壁32～55mm。一部熔解する。

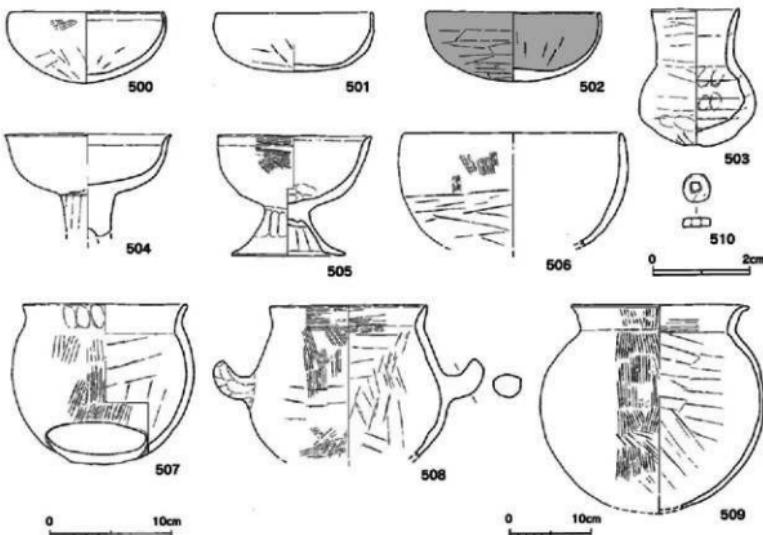


Fig.40 SK214出土遺物実測図.2 (1/4・508・509-1/6・510-1/1)

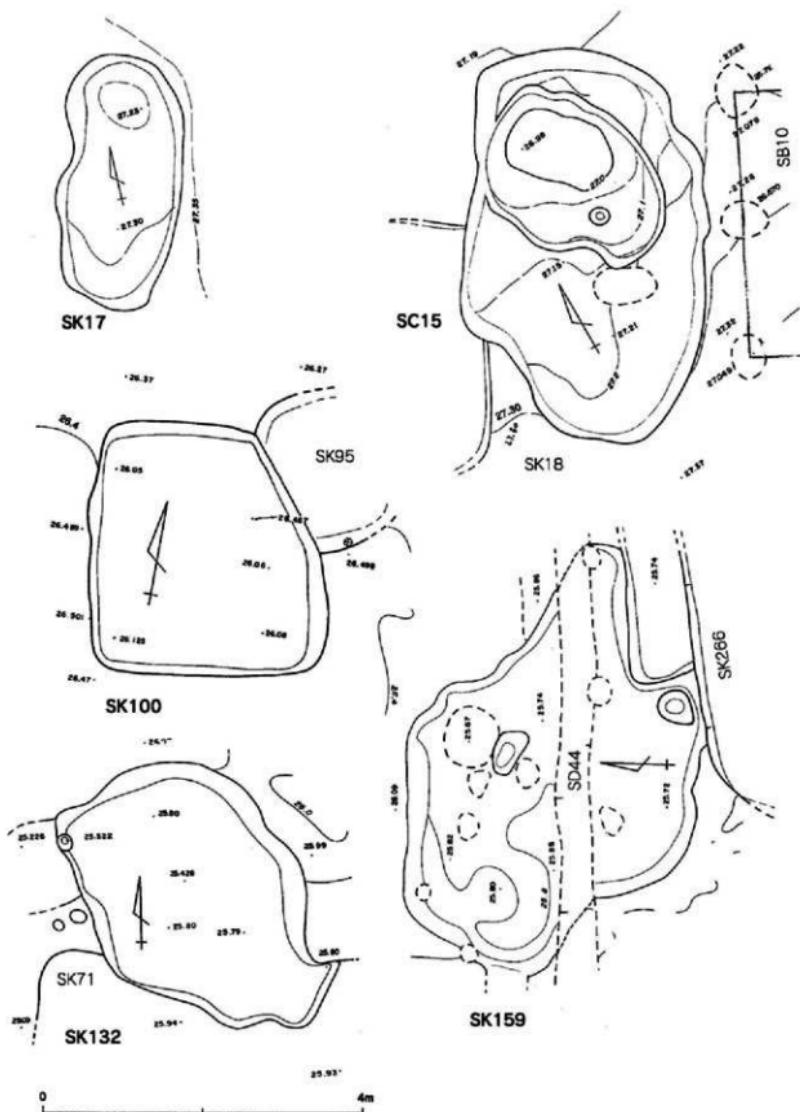


Fig.41 SK17・18・100・132・159実測図 (1/60)

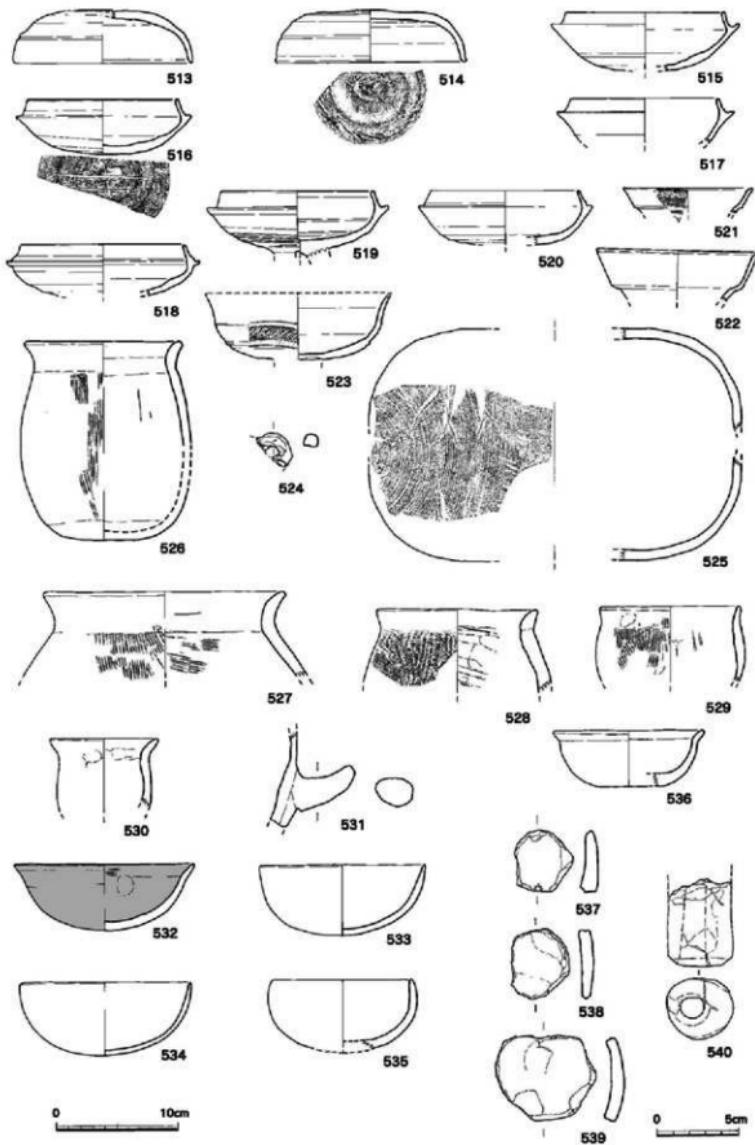


Fig.42 SK17出土遺物実測図 (1/4・537~540-1/3)

3). III期の土壤

I期の111基から激減し、A群でSK17・18・78・79・290の5基・B群でSK100・103・107・132・152の5基・C群でSK109・159・160の3基の計13基が散漫に分布する。このうちSK78・79・290は竪穴住居の可能性がある。また、5mを超える大型土壇もSK109・159の2基のみで大半は2~3mの規模となる。

SK17 (Fig.41) A群のSC14・15に隣接する位置にあり、 $3.2 \times 1.4 \times 0.05\text{m}$ を測る浅い土壇で、遺物はコンテナ1箱分出土した。

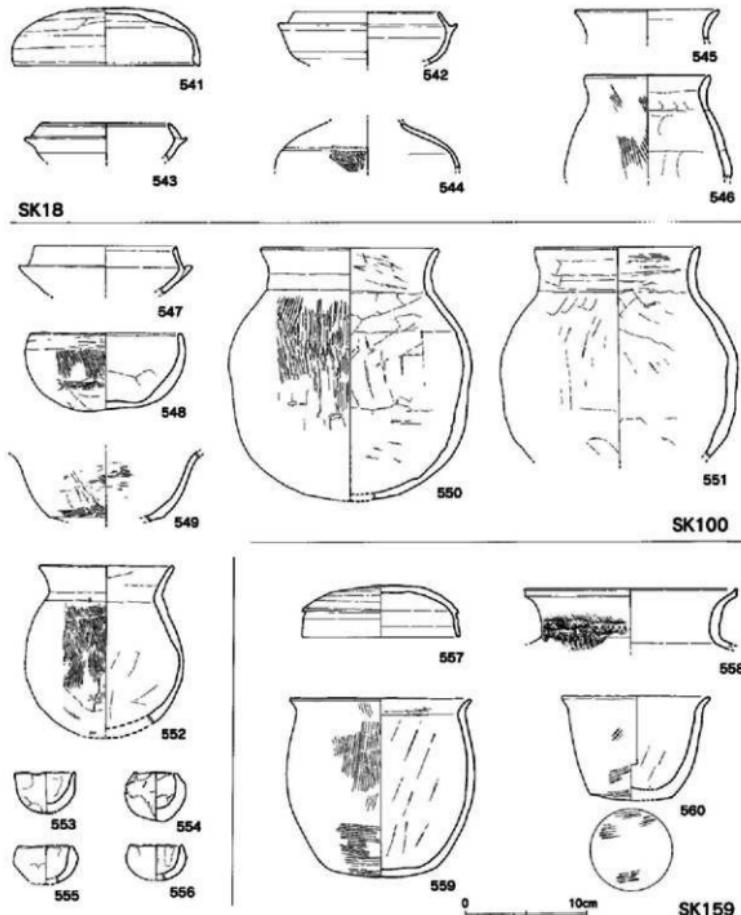


Fig.43 SK18・100・159出土遺物実測図 (1/4)

出土遺物 (Fig.42 PL.19) 513～525は須恵器。513・514は壺蓋で口径・器高は $14.8 \times 4.2 \cdot 15.6 \times 4.3$ cm。体部境は沈線化し513は口唇内面に沈線を514は丸く収め内底に当具痕が残る。515～517は壺身。受部径・器高は $15.4 \times 4.8 \cdot 14.5 \times 4.4 \cdot 14.6$ cm。口唇丸く収める。516の外底にヘラ記号がある。518～520は有蓋高環の壺部。受部径・残高は $15.9 \times 4.2 \cdot 15 \times 5 \cdot 14.2 \times 4.5$ cm。519は体部にカキメを施す。518はⅠ期の混入。523は無蓋高環壺部。口径 13.2 cm。突帶間に波状文を施す。521・522は塵口縁部。口径 $10.6 \cdot 13.2$ cm。521は口縁外面に波状文を施す。524は提瓶か甕の把手。525は横瓶の体部片。径 19 cm。526～535は土師器。526～530は甕。口径・器高は $13.0 \times 16.2 \cdot 20 \cdot 13.2 \cdot 11.6 \cdot 8.9$ cm。526は平底に近く内面下半に炭化物が付着する。528は胴外面に平行叩きが残る。529・530は被熱で全体に黒くなる。531は甕。533～535は甕。 $13.6 \times 5.8 \cdot 14 \times 6 \cdot 11.4 \times 6$ cm。532は黒色土器甕。 14.8×5.5 cm。536は平底の軟質土器甕。 12.4×4.6 cm。灰白色。537～539は土師器片円盤。長径・重量は $51 = 28$ g・ $53 = 29$ g・ $82 = 66$ gを測る。540は大型管状土錐の半損品。径 4.1 孔径 1.2 cmを測る。

SK18 (Fig.41) SK17の北、建物10の西に隣接しⅢA期の住居SC15を切る。不整形土壙で $4.9 \times 3 \times 0.22$ mを測る浅い土壙である。

出土遺物 (Fig.43 PL.19) 541～544は須恵器。541は壺蓋で口径 15.5 ・器高 4.7 cm。542・543は壺身。受部径は $14.6 \cdot 13.3$ cm。543は口唇内面に沈線を施す。544は壺胴部片。沈線下に波状文を施す。545・546は土師器甕。それぞれ口径 $11.8 \cdot 10.4$ cmを測る。

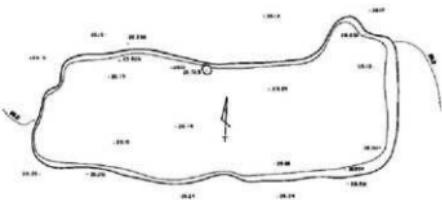
SK100 (Fig.41) B群のSC04・66間に位置しⅠ・Ⅱ期のSK95を切る。台形様の土壙で $3.1 \times 2.9 \times 0.32$ mを測る浅い土壙である。

出土遺物 (Fig.43 PL.19) 547は須恵器壺身。受部径は 14.2 cm。口唇内面を面取りする。548～556は土師器。548は甕。口径 12.4 器高 6.4 cm。549は高環壺部。内外にハケメ後ヨコナデを施す。550～552は甕。口径・器高は $14.6 \times 20.6 \cdot 13.6 \cdot 11 \times 14.1$ cm。550・552は外面ハケ調整。551は外面ヘラナデで煤が付着する。553～556はミニチュア土器。口径・器高は $5 \times 5 \cdot 3.6 \times 4 \cdot 5.4 \times 3.2 \cdot 4.4 \times 2.8$ cmを測る。何れも手捏ねでナデ調整。

SK132 (Fig.41 卷頭) B群の北東SC66の南に位置しⅠ・Ⅱ期のSCK71を切る。不整形の土壙で $4.1 \times 2.9 \times 0.27$ mを測る浅い土壙である。中央部と南部に床面から浮いた状態で多くの土器が破損した状態で検出されている。遺物は水洗までの保管期間中に、当時用いていた防水加工した布ラベルが腐食し、確定できない状態となっている。写り込んだ須恵器壺身の形態からⅢA期と思われる。

SK159 (Fig.41) C群の南部SC74の西に位置しⅠ・Ⅱ期の土壙SK158を切り古代の清SD44に切られる。不整形土壙で $5.4 \times 3.65 \times 0.08$ mを測る浅い土壙である。

出土遺物 (Fig.43 PL.19) 557・558は須恵器。557は壺蓋で口径 13 器高 4.3 cm。558は甕。口径 17.5 cm。胴部外面に平行叩きを施す。559は土師器甕。口径 15 器高 14.5 cm。平底に近い丸底で胴から底面までハケメを施す。560も同様に平底に近い丸底を呈する土師器鉢で、半島系土器の影響を受けていると思われる。口径 12.2 器高 8.6 cm。外面脇から底面までハケメを内面はヘラケズリを施す。

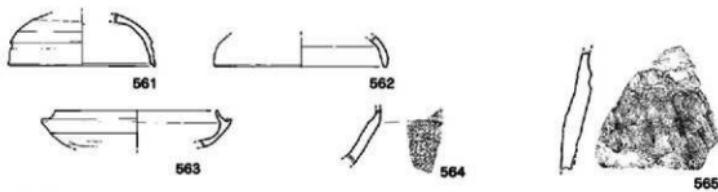


SK93

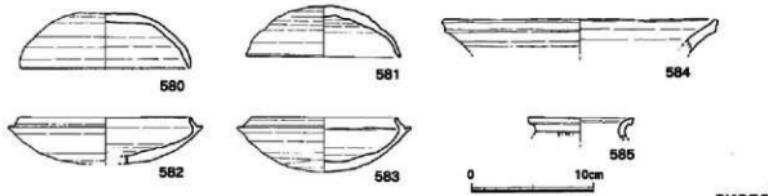
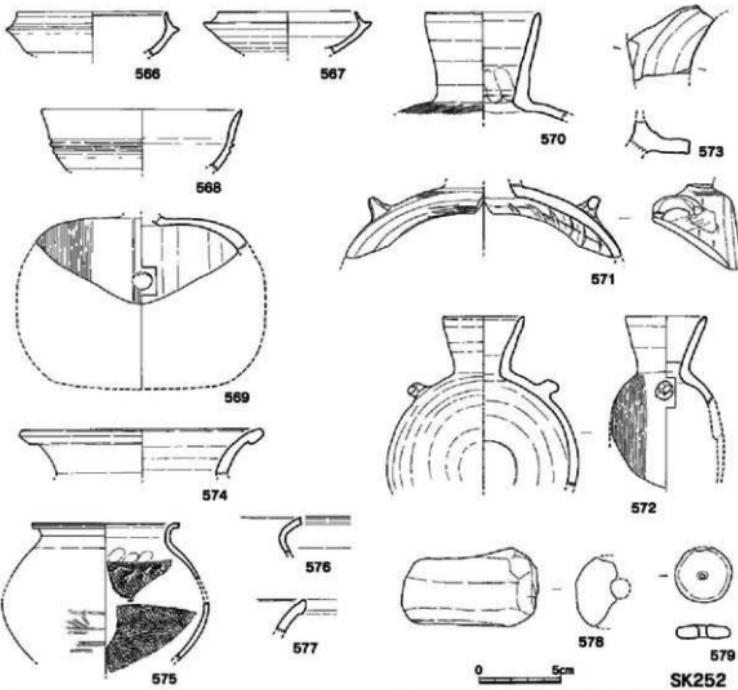


0 1 4m

Fig.44 SK93・252・253実測図 (1/100)



SK93



SK253

Fig.45 SK93・252・253出土遺物実測図 (1/4・578・579-1/3)

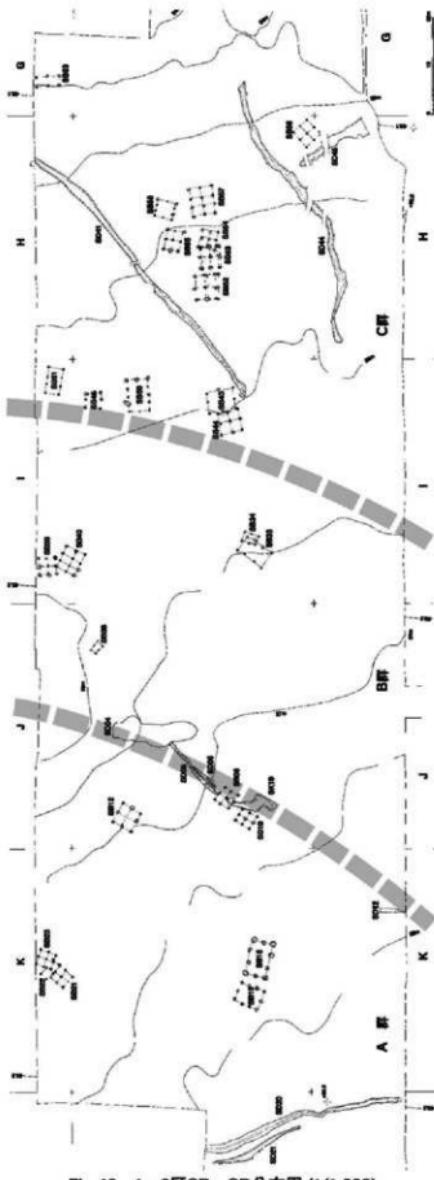


Fig.46 1~3区SB・SD分布図 (1/1,000)

4) IV期の土壤

III期同様減少傾向に変わりなく、A群でSK74の1基・B群でSK11・94・94・115・149の5基・C群でSK115・252・253の3基の計13基が住居群の分布とは逆に、東寄りに分布し、住居に近接するものは少ない。このうちSK74は竪穴住居の可能性がある。また、10mを超える大型の土取場状の土壤もSK252の1基を含め再び出現し、大型化の傾向を示す。

SK93 (Fig.44) B群の北部に位置し、「L」字に近い不整長方形を呈する。7.5×2.3×0.2mを測る浅い大型の土壤である。同規模の土壤SK94が東に20m程離れて位置する。

出土遺物 (Fig.45) 561~563・565は須恵器。561・562は壺蓋。口径は12・14.6cm。561は口唇内面を面取り。563は高環壺身。受部径は15.6cm。564は軟質土器の壺胴部。外面に格子目叩き内面はナデ消し。橙色を呈する。565は壺胴部小片で内外面ともにナデを施す。

SK252・253 (Fig.44 PL.7-2) C群の中央東端に位置する、不整形の一連の土取場状の大型土壤で、13.8×8.2×0.31mを測る。遺物はコンテナ3箱分出土。

出土遺物 (Fig.45 PL.19) 566~572は須恵器。566・567は壺身。受部径14・13.8cm。566は口唇内面に沈線を施す。568は無蓋高環壺部。口径は16.4cm。肩口縁外面に暗文状のヘラナデを、2条の突帯下に波状文を施す。569は俵形の胴部片。径13.7幅20.3cm。両端部外面にカキメ内面に回転ナデ。一部当具痕が残る。注口は径1.6cm。上部に径3.8cmの頸部が乗る。570・571は提瓶。570は口縁部で口径9.4頸部径8.4cm。571は胴部片。頸部径6.5cm。肩部と胴部にカキメを施し

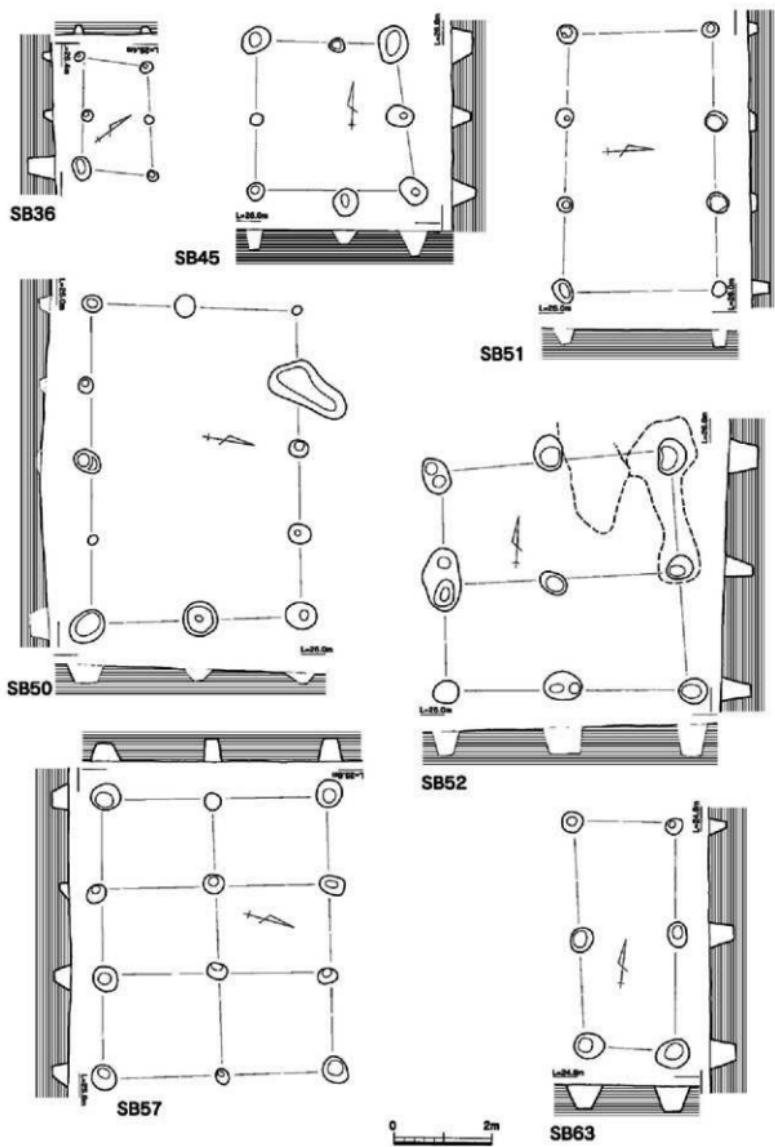


Fig.47 I・II期堀立柱建物SB36・45・50・51・52・57・63実測図 (1/100)

肩部直交方向に径4.3cm程の把手を貼付する。572は小型で口径6.7・胴径15.7・器高9.6cm。肩部に突起状の把手を貼付する。573は土師器窓口部小片。574～577は半島系土器。574は瓦質の窓口縁で口径20cm。口唇外面が丸く肥厚する。淡灰色を呈する。575は瓦質の壺。口径12・胴径17cm。強く外反する口縁の端部に沈線を、胴外面は回転ナデ3下半はケンマ内面には鳥足状の当具痕が残る。器壁は薄く淡灰色を呈す。576は同様の器形の陶質土器窓口縁小片。暗灰色を呈す。577は軟質の窓口縁小片。口唇外面を丸く肥厚する。暗橙色を呈す。578は大型管状土錘の半欠品。長8.3・径4.5・孔径1.1cm。579は土師質の纺錘車。径3.4・厚0.7・孔径0.4cm。

580～586はSK253出土。580～583は須恵器。580・581は壺蓋。口径・器高は14×4.5・12.6×4.1cm。581は天井部にヘラ記号がある。582・583は环身。受部径・器高は16×3.8・14.2×4.5cm。584は軟質の窓口縁部。口径22.6cm。口唇外面に凹線を施す。橙色。585は陶質壺口縁部。口径8.6cm。強く外反する口縁端部に凹線を、頸部沈線下に暗文状のヘラナデを施す。灰黄色を呈す。586(PL19)は須恵器提瓶胴部の円盤。長径155mm・298gを測る。

3. 1～3区の掘立柱建物

掘立柱建物は1～3区で26棟を検出しているが1×1間は竪穴住居の可能性があり除外した。しかし柱穴は無数にあり、十分な検討を尽くしたとは言えず、増える可能性は大である。

時期区分は柱穴内出土土器と他遺構との切り合いで確定したが、出土土器も乏しく、各建物の時期の上限を示している様相が強い。図化可能なものは混入と判断した資料も含め図示した。

分布は各期・各群での竪穴住居の戸数に比例する様で、住居がI・II期39%・III期49%・IV期11%を示すのに対し建物はI・II期7棟27%・III期13棟50%・IV期6棟23%と、住居に近い比率を示す。また、住居に隣接するものと、10m以上間隔をとって分布するものがある。また、1×2間を含め総柱建物は18棟I・II期4棟III期11棟IV期3棟と、側柱建物は8棟I・II期3棟III期2棟IV期3棟であり総柱建物が69%を占め、III期では85%を占める。またIV期では側柱建物3棟全てが桁行3間と大型化が伺える。以下時期毎に詳報する。

1). I・II期の建物

I・II期は竪穴住居28軒中18軒が集中するB群に7棟中SB36・45・50・51の4棟が、2軒のC群にSB52・57・63の3軒が分布し、側柱建物の45・50・51が住居に近接して位置し総柱は離れて住居群の間隙に位置する傾向にある。

SB36 (Fig.47) B群の北西SK29の東に隣接する。2×1間2.25×1.4mの建物で方位をN-57° -W

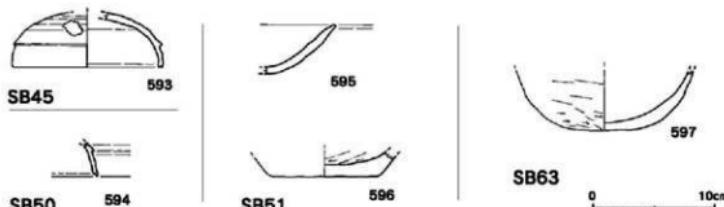


Fig.48 I・II期 SB出土遺物実測図(1/4)

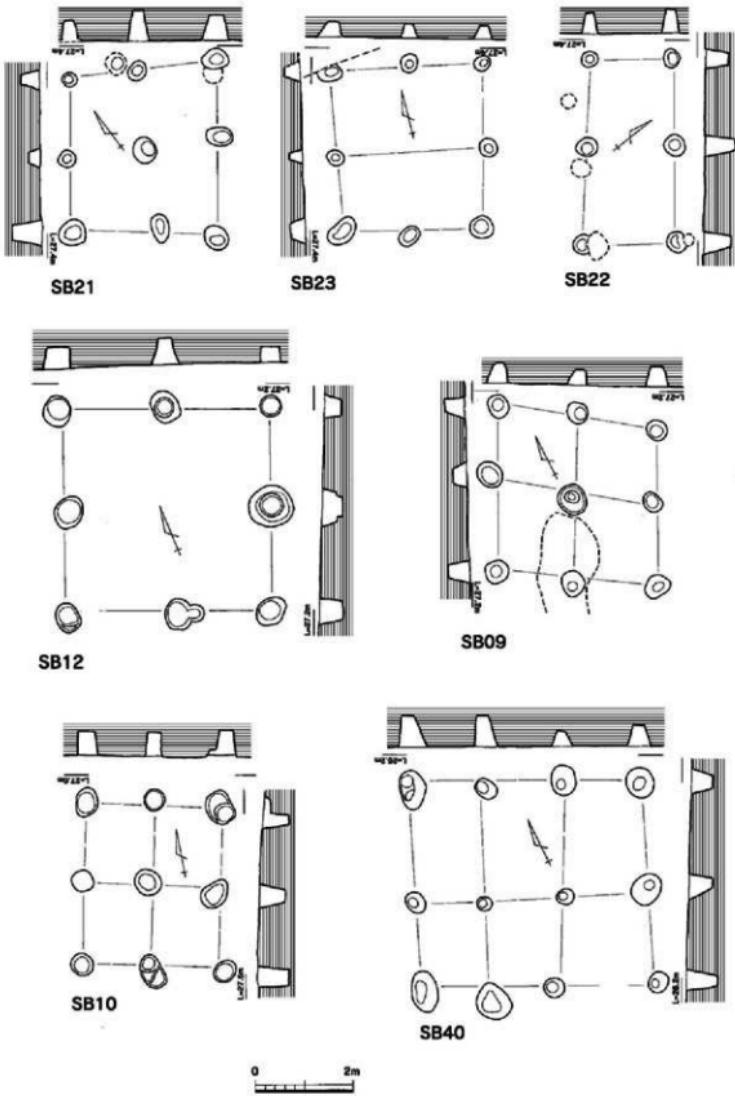


Fig.49 III期堀立柱建物・SB21・23・22・12・09・10・40実測図 (1/100)

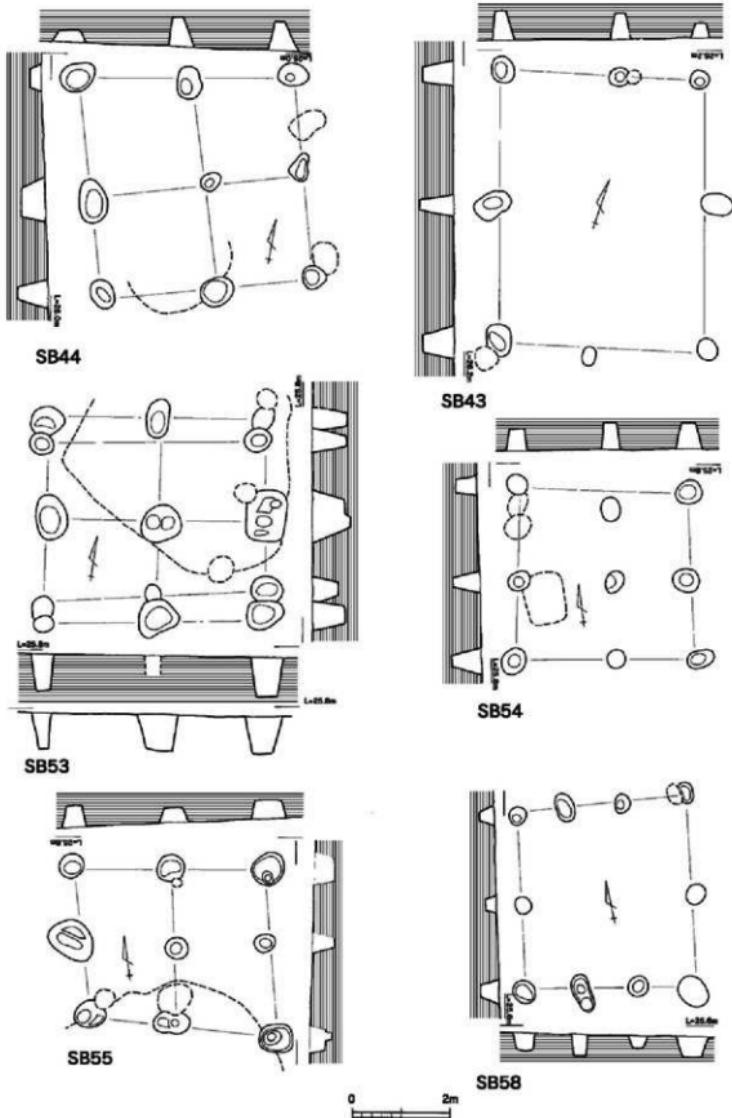


Fig.50 III期堀立柱建物.2SB44・43・53・54・55・58実測図 (1/100)

にとる。塙方は径20~50cmを測る。柱は径10cm程か。遺物は須恵器等の小片が出土。

SB45 (Fig.47 PL9-2) B群の北東SC100の南にSB50・51と南北に並んで隣接する。周囲を同期のSK120~123等が取り囲む。2×2間3.0×3.0mの側柱建物で方位をN-0°~Wにとる。塙方は径15~40cmを測る。柱は径20cm弱か。柱痕跡は不明。遺物は須恵器等の小片が出土。

出土遺物 (Fig.48) 593は須恵器坏蓋で口径12.4・器高4.5cm。口唇端部に沈線を施す。混入品。

SB50 (Fig.47) SB45の南に並んで位置する。4×2間6.45×4.2mの側柱建物で方位をN-82°~Eにとる。塙方は径20~60cmを測る。柱は径20cm程か。遺物は須恵器等の小片が出土。

出土遺物 (Fig.48) 594は須恵器坏蓋小片で口唇内面は段を成す。

SB51 (Fig.47) SB45の北に並んで位置し、SK118を囲っている。3×1間5.25×3.0mの側柱建物で方位をN-84°~Wにとる。塙方は径30~50cmを測る。柱は径20cm程か。

出土遺物 (Fig.48) 595は土師器坏底小片・596は平底の軟質甕で径9cm。橙色を呈す。

SB52 (Fig.47 PL6-2) C群のSC75の北に位置し、同期のSK168・201・211等に囲まれる。2×2間5.0×4.65mの総柱建物で方位をN-86°~Eにとる。塙方は径25~40cmを測る。

SB57 (Fig.47 PL6-2) SB52の東に並行して位置し、同期のSK170・229等に囲まれる。3×2間5.5×4.65mの総柱建物で方位をN-75°~Eにとる。塙方は径30~50cmを測る。柱は径20cm程か。

SB63 (Fig.47 PL6-2) C群北東部に位置する2×1間4.75×1.95mの側柱建物で方位をN-10°~Wにとる。塙方は径35~65cmを測る。柱は径20cm程か。

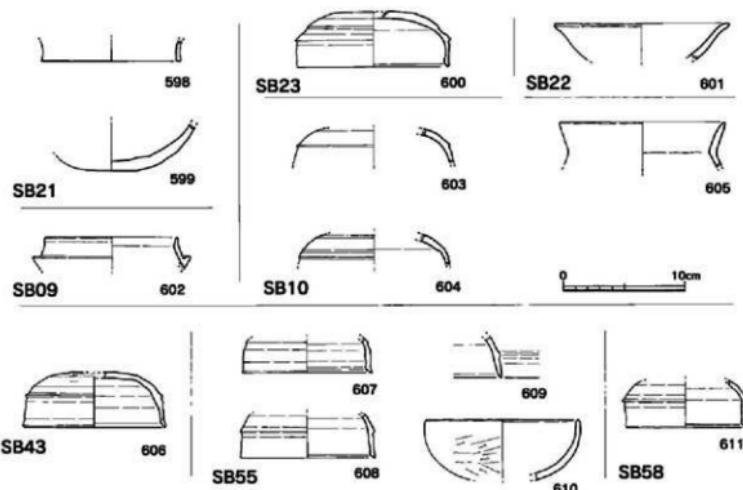


Fig.51 III期 SB出土遺物実測図 (1/4)

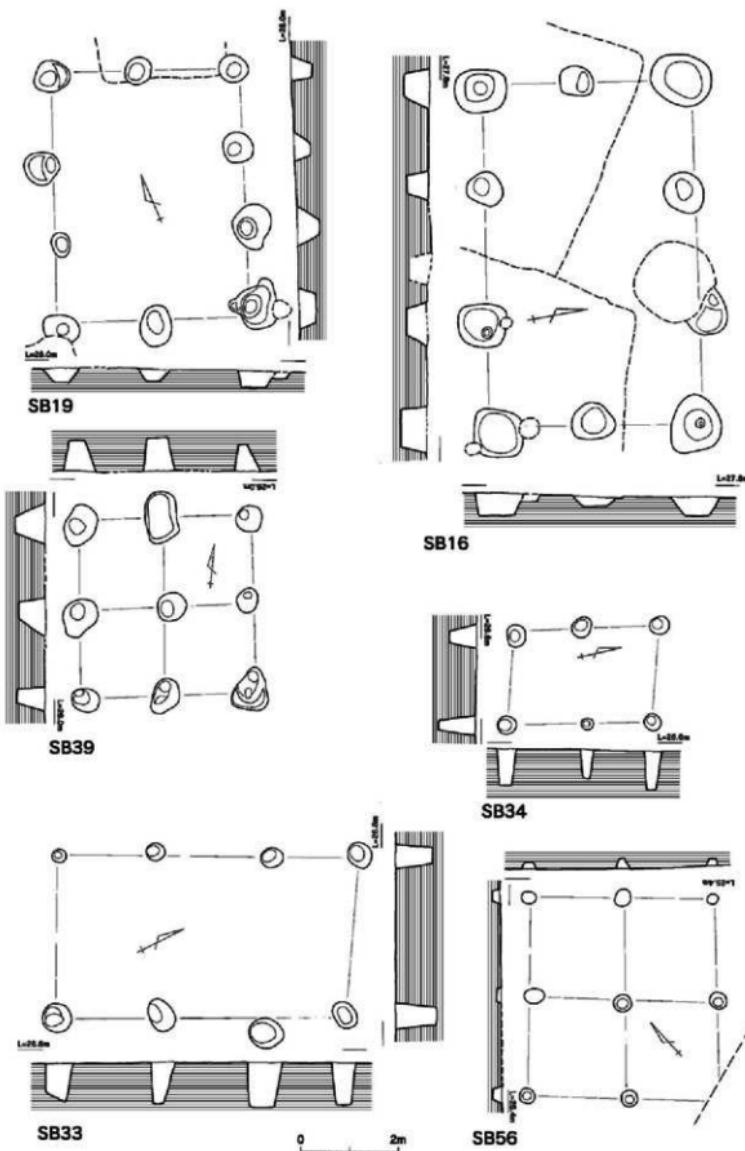


Fig.52 SB19・16・39・34・33・56実測図(1/100)

出土遺物 (Fig.48) 597は丸底の土師器底底部で径14.5cm程。橙色を呈す。

2.) III期の建物

III期は竪穴住居35軒中23軒が集中するA群に13棟中SB10・12・21・22・23の5棟が、6軒のB群にSB29・40の2軒が、同じく6軒のC群にSB43・44・53・54・55・58の6棟が分布し東部の住居の疎らな区域に分布する傾向にある。側柱建物の43・58は少ない住居を埋め合わせる様にC群の住居間に位置し、総柱建物はSB10以外は離れて住居群の間隙に位置し、側柱建物に近接する。

SB21 (Fig.49) A群の北西SK75の東にこれを切り、SB22を切って位置する2×2間3.35×3.0mの総柱建物で方位をN-37°-Eにとる。堀方は径25~55cmを測る。柱は径20cm弱か。

出土遺物 (Fig.51) 598は須恵器壺身で口径11.4cm。口唇を面取りする。599は土師器底底部。

SB23 (Fig.49) SB21の北にSB22と切り合って位置する2×2間3.35×3.0mの総柱建物で方位をN-14°-Eにとる。堀方は径30~50cmを測る。柱は径20cm弱か。

出土遺物 (Fig.51) 600は須恵器壺蓋。口径12.4cm高4.5cm。口唇内面は段を成す。

SB22 (Fig.49) SB21の北にこれに切られて位置する2×1間3.8×1.75mの側柱建物で方位をN-48°-Wにとる。堀方は径35~45cmを測る。柱は径20cm程か。

出土遺物 (Fig.51) 601は土師器高環口縁部で口径14.4cm。暗橙色を呈す。

SB12 (Fig.49 PL.7-1) A群住居の北に15m程離れて位置し、I・II期のSB31を切る2×2間4.25×4.12mの総柱建物で方位をN-22°-Eにとる。堀方は径40~90cmを測る。柱は径35cm。

SB09 (Fig.49) A・B群間の中央に位置しII期のSK19を切る。2×2間3.3×3.3mの総柱建物で方位をN-28°-Eにとる。堀方は径45~60cmを測る。柱は径30cm。

SB10 (Fig.49 PL.7-1) SB09の南西に並んで位置しII期のSK19を切る。2×2間3.25×2.8mの総柱建物で方位をN-17°-Eにとる。堀方は径40~55cmを測る。柱は径30cm。

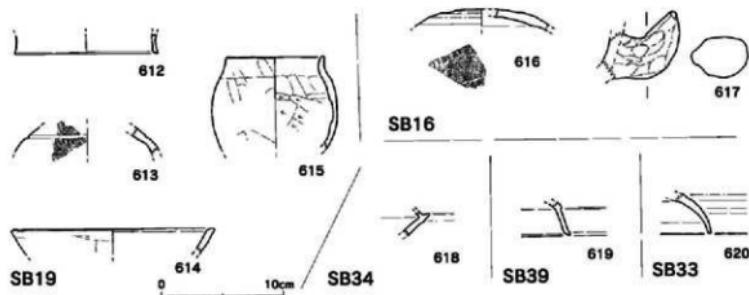


Fig.53 IV期SB出土遺物実測図(1/4)

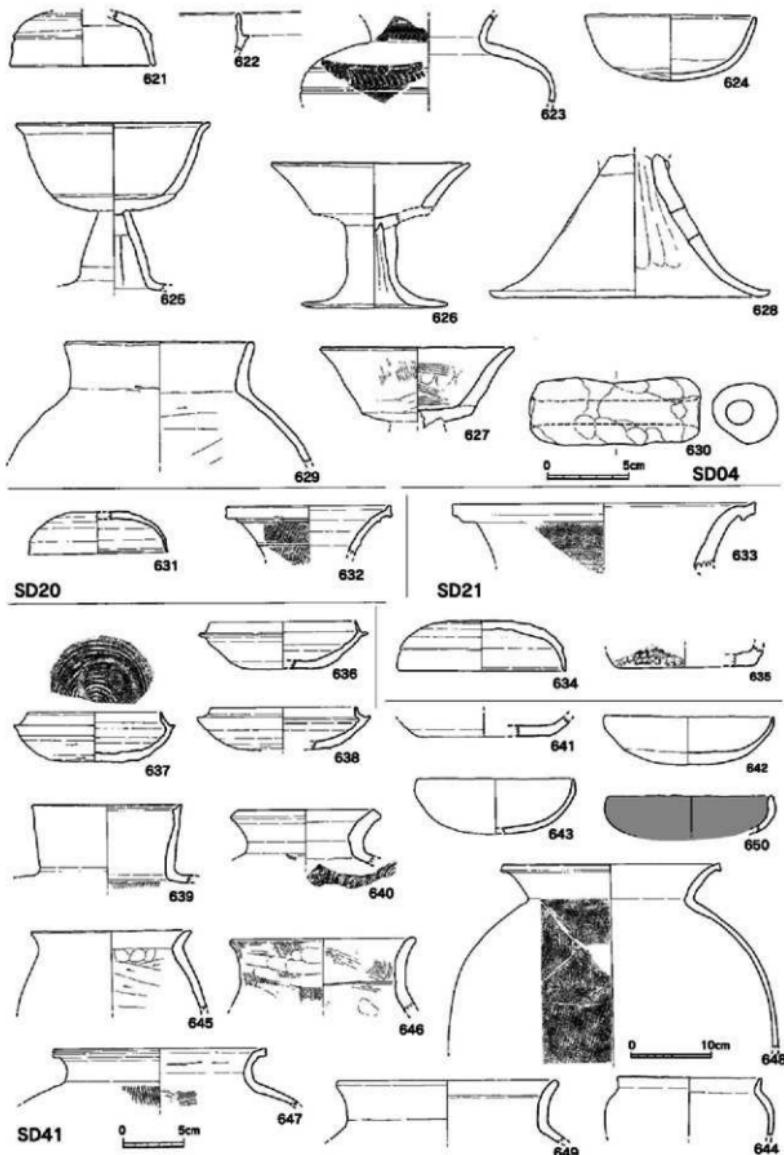


Fig.54 SD04・20・41遺物実測図 (1/4・630-1/3・648-1/6)

出土遺物 (Fig.51) 603・604は須恵器壺蓋。体部境は段。605は土師器甕口縁部で口径13.6cm。

SB40 (Fig.49 PL.8-2) B群北端SC66の西20m程に位置する3×2間4.8×4.1mの総柱建物で
Ⅳ期SB39に切られる。方位をN-64°-Wにとる。堀方は径35~70cmを測る。柱径20cm程か。

SB44 (Fig.50 PL.8-1) C群中央の空隙地西側に側柱建物SB43と並んで位置し、これとI・II期の
SK127を切る。2×2間4.7×4.4mの総柱建物で方位をN-19°-Wにとる。堀方は径40~65cmを測る。
柱は径25cm程か。

SB43 (Fig.50 PL.8-1) SB44と並んで位置し、これに切られる2×2間5.6×4.2mの側柱建物で方位
をN-15°-Wにとる。堀方は径40~50cmを測る。柱は径20cm程か。

出土遺物 (Fig.51) 606は須恵器壺蓋。口径11.7cm。体部境は突帶状。混入か。

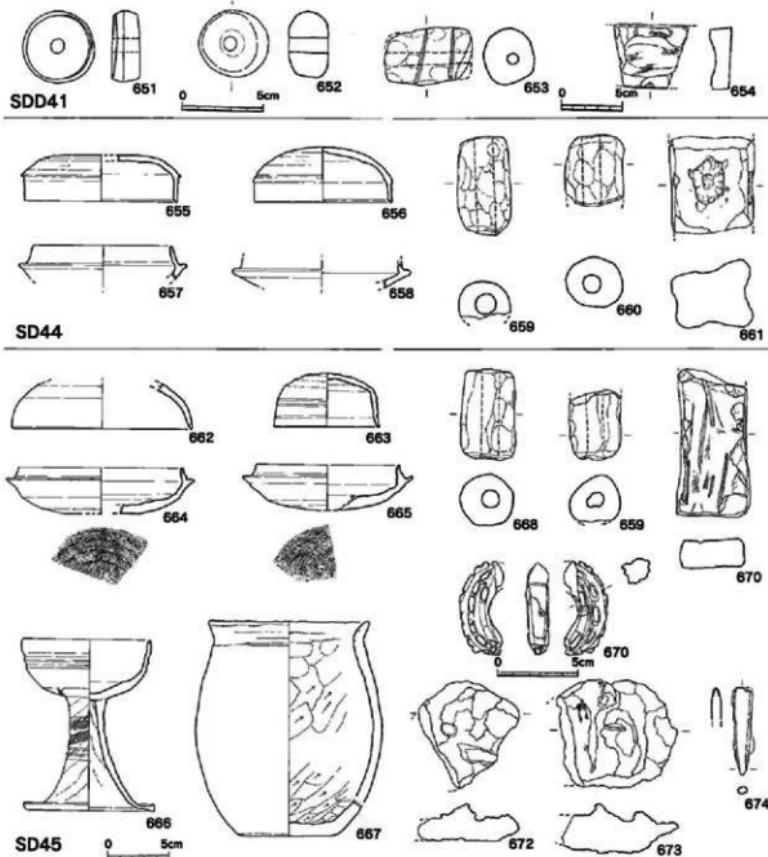


Fig.55 SD41・44・45出土遺物実測図 (1/4・651・652・670・674-1/3)

SB53 (Fig.50 PL.6-2) C群中央の空隙地東側に4棟分布し、SB54に切られⅡ期のSK211を切る。2×2間 4.5×4.2 mの総柱建物で方位をN-6°-Wにとる。建て替えを行っており南北で切り合いがある。堀方は径35~80cmを測る。柱は径20cm程か。

SB54 (Fig.50 PL.6-2) SB53とⅡ期のSK211を切る。2×2間 3.7×3.5 mの総柱建物で方位をN-9°-Eにとる。堀方は径40~55cmを測る。柱は径20cm弱か。

SB55 (Fig.50 PL.6-2) SB55の北に並行して位置しⅠ期のSK200を切る。2×2間 4.0×3.5 mの総柱建物で方位をN-0°-Eにとる。堀方は径50~65cmを測る。柱は径15cm程。

出土遺物 (Fig.51) **607・608**は須恵器環蓋。口径は $9.6 \cdot 10.8$ cm。**607**の体部境・口唇内面は凹線・**608**の体部境は段、口唇内面は凹線。**609**は土師器環蓋口縁片。**610**は土師器環。口径12.8器高5cm。

SB56 (Fig.50 PL.6-2) SB55の東に並行して位置し3×2間 3.7×3.5 mの側柱建物で方位をN-11°-Eにとる。堀方は径25~55cmを測る。柱は径15cm程か。

出土遺物 (Fig.51) **611**は須恵器環蓋。口径9.8cm。口唇内面は凹線をなす。混入品。

3.) IV期の建物

IV期は豊穴住居8軒中5軒が集中するA群にSB16・19の2棟が、3軒のB群にSB33・34・39の3棟、東端のC群にSB56の1棟が分布し、側柱建物が住居がまとまる西部に、総柱建物が東部の住居域外に分布する傾向にある。側柱建物は全て桁行3間で大型化が伺える。

SB19 (Fig.52) A群住居群中部でⅢ期のSC33Ⅳ期SC34を切る。3×2間 5.1×3.95 mの側柱建物で方位をN-18°-Eにとる。堀方は大きく径40~80cmを測る。柱は径25cm程か。

出土遺物 (Fig.53) **612**は須恵器環蓋口縁。口径11.6cm。**613**は須恵器耳肩部片。沈線上下にカキメ工具連続刺突文を施す。**614**は土師器環口縁で口径16.6cm。**615**は土師器甕。口径8cm。

SB16 (Fig.52 PL.7-1) SB19の東に並行して位置しⅢ期のSC24・39を切る。該区での最大規模の3×2間 6.95×4.3 mの側柱建物で方位をN-75°-Wにとる。堀方は大きく隅丸方形から円形。径80~120cmを測る。柱は径20cm程か。

出土遺物 (Fig.53) **616**は須恵器環蓋小片。**617**は土師器瓶把手。

SB39 (Fig.52 PL.8-2) B群北端中央に位置しⅢ期のSB40を切る。2×2間 3.65×3.6 mの総柱建物で方位をN-5°-Wにとる。堀方は径45~75cmを測る。柱は径20cm弱か。

出土遺物 (Fig.53) **619**は須恵器環蓋口縁。口唇内面に沈線を施す。混入品。

SB34 (Fig.52 PL.9-1) B群SC62の東20m程に位置しSB33と切り合う。2×1間 2.95×1.95 mの建物で方位をN-11°-Eにとる。堀方は径20~45cmを測る。柱は径15cm程か。

出土遺物 (Fig.53) **618**は須恵器环身小片。立ち上がりは強く内傾する。

SB33 (Fig.52 PL.9-1) SB34と切り合う3×1間6.1×3.3mの大型の側柱建物で方位をN-27° -Eにとる。壠方は径25~60cmを測る。柱は径20cm程か。

出土遺物 (Fig.53) 620は須恵器環蓋小片。口唇は丸く収め体部境は凹線となる。

SB56 (Fig.52 PL.9-1) C群南東部で1棟のみSD44・45に囲まれて位置する2×2間4.1×3.8mの総柱建物で方位をN-47° -Wにとる。壠方は径20~35cmを測る。柱は径20cm弱か。

4. 1~3区の溝

溝はI・II期でSK19を含めたSD05・06の2条、III期でSD04・20・21の3条、IV期でSD44・45の2条を検出した。

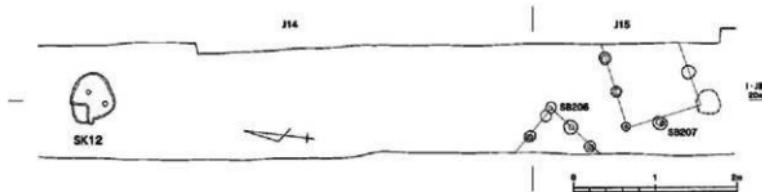


Fig.56 2号支線道路区遺構分布図 (1/300)

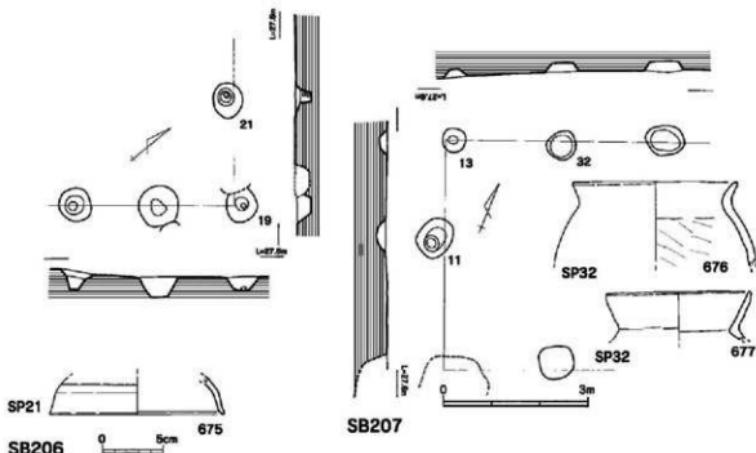


Fig.57 SB206・207・出土遺物実測図 (1/100 - 1/4)



Fig.58 2号排水路区分分布図 (1/500)

SD41 住居のないC群中央から北東に、等高線に直交方向に掘削する溝で幅1深さ0.15m。直線的に延び、Ⅲ期のSC103・104を切る。

出土遺物 (Fig.54・55 PL20) 636～640は須恵器。636～638は壺身。受部径・器高は14×3.9・13.2×4.1・14.3cm。637は内底に当具痕が残る。639は直口壺口縁。口径12.4cm。口唇内面に凹線。640は甕口縁。径12.3cm。641は陶質土器甕底部。径11.2cm。赤灰色を呈す。642～649は土師器。642・643・644は壺。口径・器高は径13.8×3.9・12.8×4.5・11.6cm。645～649は甕。口径は13.2・15・17.6・27・18cm。646・649は頸部内面に沈線。647は口縁を須恵器様に、胴内外面はハケメ。648は胴外面に平行叩き内面にナデを施す。650は黒色土器壺。口径13.2cm。651は陶質の半島系統鍤車。径44厚17孔径8mm43g。652土師質の紡錘車。径41厚26孔径9mm51g。653は大型管状土錐。長70径45孔径11mm142g。直交方向に2条沈線を施す。654は頁岩製砥石。4面を使用。幅50厚17mm。708(PL19)は須恵器片円盤。長径50mm20gを測る。

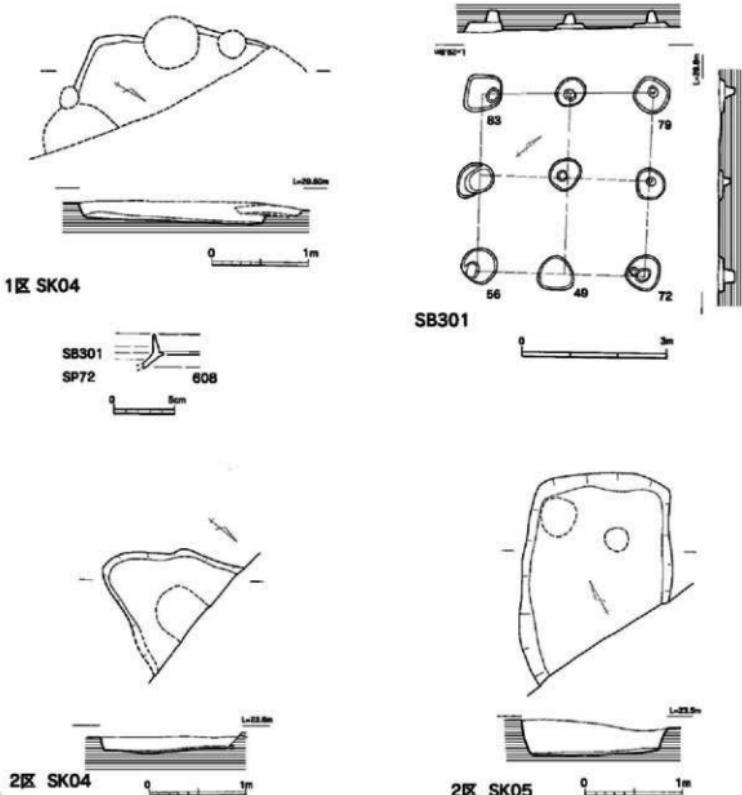


Fig.59 2号排水路1・2区造構・遺物実測図 (1/50・1/100・1/4)

SD44 (PL.7-2) SD41の南で同じようにC群中央から東に、等高線に直交方向に掘削する溝で幅1深さ0.3m。SK252の南側はこれに沿う様に濶出する。Ⅲ期のSK159を切る。

出土遺物 (Fig.55 PL.20) 655~658は須恵器。655・656は壺蓋。口径・器高は12.6×3.8・11.2×5.5cm。口径内面は段を成し655の内底に当具痕が残る。657・658は壺身。受部径13.8・14.7cm。659・660は大型管状土錘。659は長80径42孔径17mm。660は長58径48孔径14mm125g。661は凝灰質砂岩の砥石を転用した叩石。4面を使用。77×66×55mm。

SD45 (PL.9-2) SD44の南でこれの直交方向に掘削する溝で幅1.5深さ0.4m。同期のSB56を囲んでいる。7・8基の甕棺を破壊して掘削される。

出土遺物 (Fig.55 PL.20) 662~666は須恵器。662は壺蓋。口径14.8cm。663は壺蓋。口径8.7器高4.5cm。外面に沈線3条施す。664・665は壺身。受部径・器高は15.4×3.8・14×3.8cm。外底にヘラ記号がある。666は高壺。口径10.4器高14cm。体部・脚部に2条単位の沈線を施す。体部外底に「X」字のヘラ記号がある。667は軟質土器の影響を受けた平底の甕。口径13.2器高17cm。外面はナデ。外面

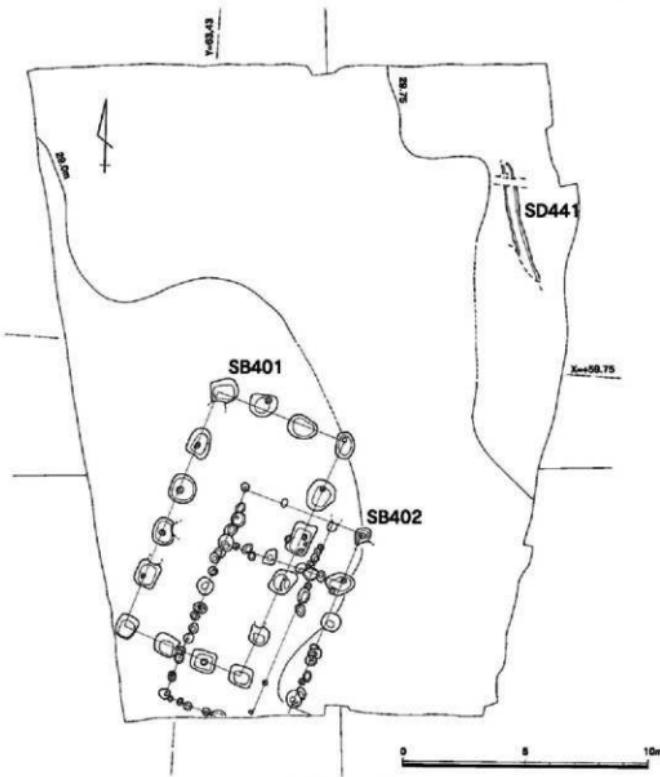
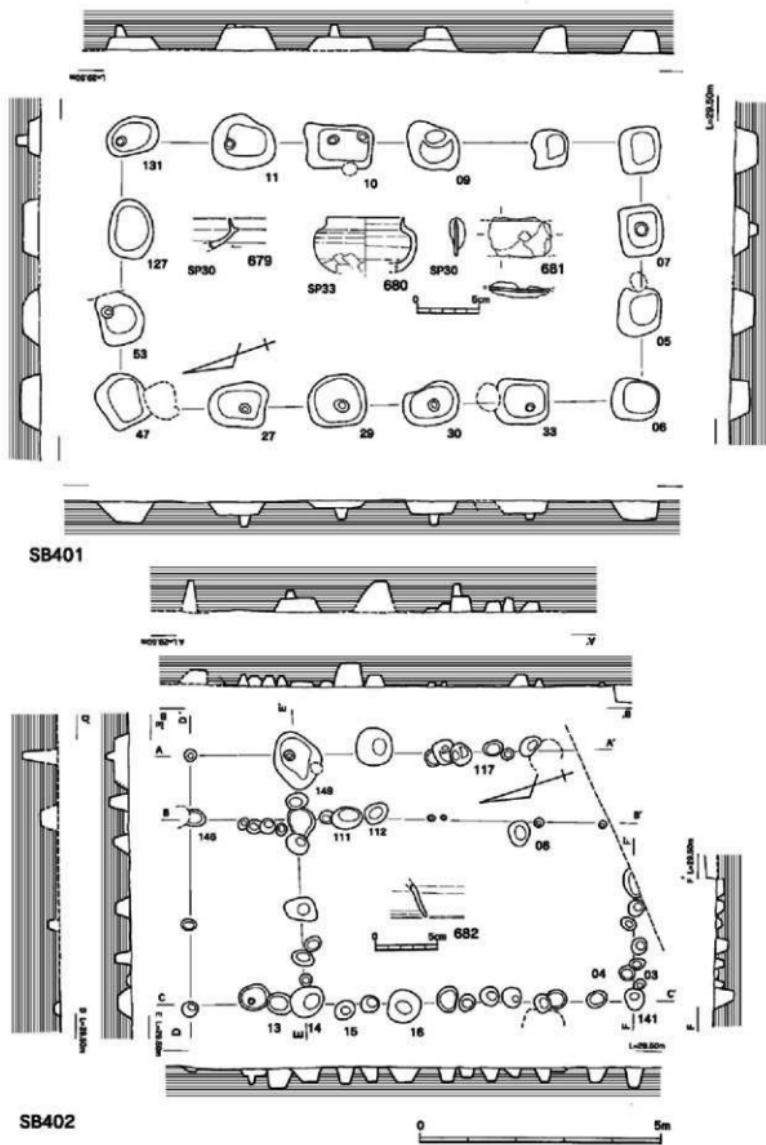


Fig.60 4区遺構分布図(1/200)



は火熱のため器壁が剥落する。668・669は大型管状土錘。668は長74径45孔径14mm 164g。669は長57+α径42孔径15mm。670は子持勾玉。茶灰色の滑石製。長57幅20厚13mm。頭と尾の一部を欠損し頭部紐通し孔は径2mm。内面中央と尾部に穿孔途中の孔がある。側面は2重の輪状に内輪に3外輪に5個・背部に7個、子を配する。砂層出土で摩滅する。671は砂岩製紙石。4面を使用。幅53厚23mm。672・673は?形鍛冶津。小気孔が多く剥片・粒状津の付着は無い。674は鍛状の鉄器で長52幅12厚5mmを測る。

5. 2号支線道路区 (Fig.56)

2号支線道路区は3区東端部14グリッドから南に延びる幅7m長さ68.5mの調査区で、北半部に古墳～古代の建物群を、南半部に甕棺ベルトに連なる甕棺墓群を検出している。

古墳時代の遺構は北端部で、Ⅱ期で長径3.6mの不整形土壙SK12・ⅢA期の掘立柱建物SB206・後期の掘立柱建物SB207を検出している。

SB206 (Fig.57 PL.10-1) 調査区中央部西壁にかかって検出。2×1間以上で柱間は1.7~2.2mの側柱建物で方位をN-53°-Wにとる。堀方は大きく径60~80cmを測る。柱は径20cm程か。

出土遺物 (Fig.57) 675は須恵器環口縁。口径14.2cm。外面体部境・口唇内面に沈線を施す。

SB207 (Fig.57 PL.10-1) SB206の南に位置し、央部東壁にかかって検出。2×2間以上で柱間は2.2mの側柱建物で方位をN-68°-Eにとる。堀方は大きく径45~70cmを測る。柱は径20cm弱。

出土遺物 (Fig.57) 676・677は土師器甕。口径13.6・12cmを測る。

6. 2号支線排水路1・2区 (Fig.58)

2号支線排水路区は本体工事区1～3区の南に接して、東西方向に幅3m長さ510mにわたる調査区で、本体3区の西側130m程までを1区、本体1区の東60~90mの範囲を2区とした。

1区は本体3区との間に小河川をはさんでおり、地形的には4区と同一の低台地に立地する (fig. 2)。調査区はS27号墳を中心に第12次調査区と交差する。標高は29m程度である。古墳時代の遺構は2基の円墳S27・28号墳、竪穴住居3軒とともに土壙SK04・掘立柱建物SB301を検出している。

2区は本体1区の東に幅60m程、旧河川が北に湾曲した部分をはさんで、本体調査区と同一低台地状に立地する (fig. 3)。標高は23m程度である。古墳時代の遺構はI・II期の竪穴住居SC01とともに後期の土壙SK04・05の2基を検出した。

1区SB301 (Fig.59) 調査区西部でⅢA期のSC01を切って検出。2×2間3.7~×3.52mの縦柱建物で方位をN-37°-Eにとる。堀方は大きく径55~75cmを測る。柱は径15~20cm。

出土遺物 (Fig.59) 678は須恵器環身口縁片。受部は短く口唇は丸く收める。

1区SK04 (Fig.59) SB301の北に位置し、Ⅳ期の住居SC02に切られる。方形で3.5×1.1m以上深さ40cmを測る。床面は平坦。遺物はⅢA期の須恵器・土師器小片を出土。

2区SK04 (Fig.59) SC01の東に隣接する。方形で1.45×1.2m以上深さ13cmを測る浅い土壙で床面は平坦。遺物は須恵器・土師器小片を出土。

2区SK05 (Fig.59) 調査区中央でSC01の南に隣接する。長方形で 1.55×2.05 m以上深さ38cmを測る。床面は平坦。遺物は須恵器小片を出土。

7. 4区 (Fig.60)

4区は3区の北西約100m、第12次（野方・金武線8次）調査I'区の東に隣接する。標高は29m程である。現地表の等高線と第11次調査・2号排水路1区で検出された小河川を合わせると、1~3区が立地する低台地の北の、別個の低台地上に立地している。

516m²の狭い調査区に、古墳時代の遺構は竪穴住居3軒・Ⅳ期で3×5間の最大の掘立柱建物SB401・同期の大壁建物SB402の2棟と、溝SD441を検出した。

SB401 (Fig.61 卷頭) 調査区南西部に位置し、ⅢB~Ⅳ期のSC422を切り、大壁建物SB402に切られる。5×3間 10.7×5.35 mの側柱建物で第9次調査区中最大規模の建物である。方位をN-8° -Eにとる。堀方は大きくほぼ隅丸方形が占め径80~130cmを測る。柱は径15~20cm。

出土遺物 (Fig.61) 679は須恵器坏身口縁片。立ち上がり・受部は短く口唇は丸く収める。680は須恵器小壺。口径6.4cm。681は鉄器で手鎌の残片と思われる。現存長3.8幅2.4cmを測る。

SB402 (Fig.61 卷頭) SB401を切って南東に位置する大型建物。調査時は大型建物の概念が無く4×3間の側柱建物ととらえていた。整理中に再認識されたもので堀方径40~80cmの大柱は4×3間9.1×5.1mで間違いないがこの大柱間を多くの堀方径15~40cmの小柱が埋める。西から2間目と北から1間目に柱列があり、間仕切りと考えられる。方位はSB401に近くN-18° -Eにとる。柱は径15cm程。

出土遺物 (Fig.61) 682は須恵器坏蓋口縁片。口唇内面に凹線を施す。

8. その他の遺物。 (Fig.62PL.20)

Fig.62はその他の遺構・検出面等からの出土遺物。683は須恵器把手付土器。SK146出土。口径11cm。684は陶質土器坏身。口径11.6cm。SK252出土。685は軟質土器甕。口径15.6cm。胴外面に平行叩き内面に平行彫の当具痕が残る。SK04出土。686は提瓶様の土師器壺。K14グリッド検出面出土。687は軟質の影響を受けた木葉压痕を残す土師器壺。口径12.4cm。SK28出土。688は口径33.8器高21.6cmの土師器高壺。SK153出土。689は径7mm0.07gのコバルトブルーのガラス小玉。SP183出土。690・691は滑石白玉。径・重は4.5mm0.07g SP159出土・6mm0.1g SK151出土。692は半島系土師質紡錘車。径4.7cm60g。693~697は土師質紡錘車。693はSP242出土。4cm47g・694はSK164出土3.9cm46g・695はSK158出土5.5cm・696はSP234出土3.4cm19g・697は出土地不明3.7cm31g。698・699は滑石質紡錘車。4.2cm59g包含層出土・4.8cm66g出土地不明。700は海獸骨質紡錘車。径5.8厚1.7孔径0.7cm30g。全面を研磨する。上下両面の硬骨組織間は海綿状組織が露出する。出土地不明。701・702は管状土錘。長×径×孔径×重は $4.8 \times 2.5 \times 0.7$ cm×30g SK204出土・ $7.6 \times 4.9 \times 1.6$ cm×185g SK160出土。703は土師器ミニチュアの把手。長22mm。出土地不明。704・705は板状不明鉄器。5.6×4.3×0.5・7.2×6.3×0.7cmを測る。K14グリッド検出面出土。

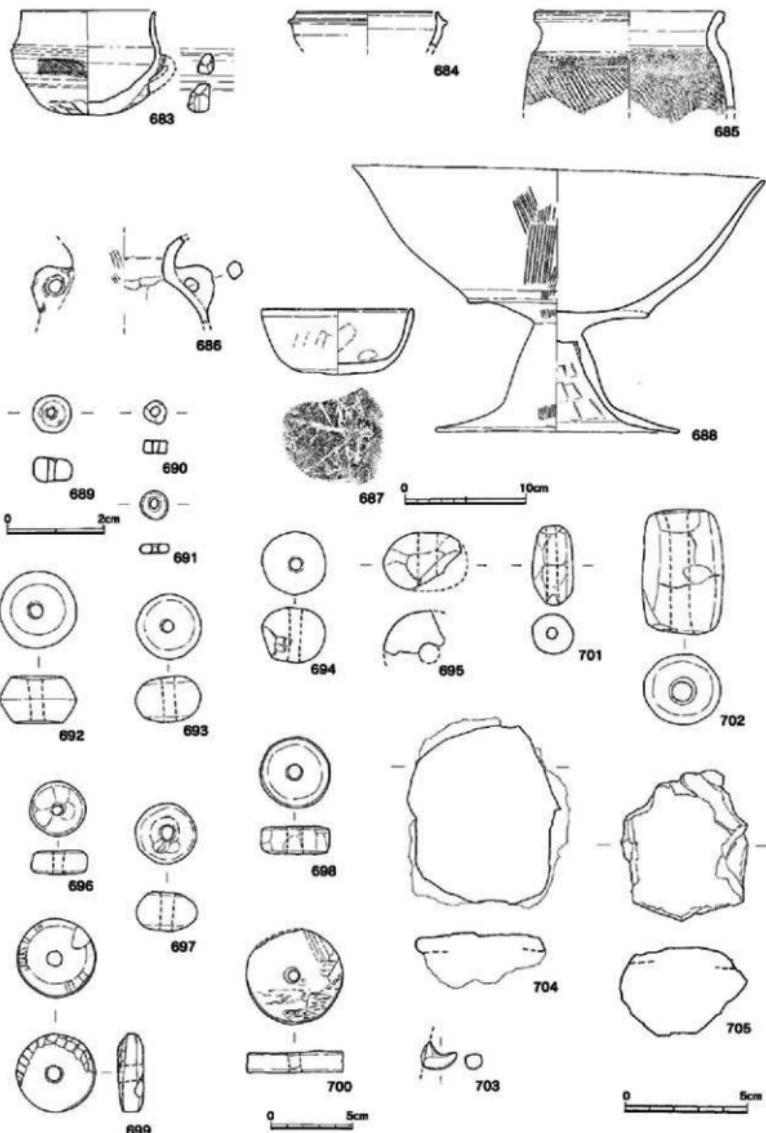


Fig.62 その他の遺物(1/4・689~691-1/1・692~703-1/3・704・705-1/2)

第四章 おわりに

本報告では第9次調査の古墳時代竪穴住居を除いた土壙・建物・溝の生活遺構の報告を行った。

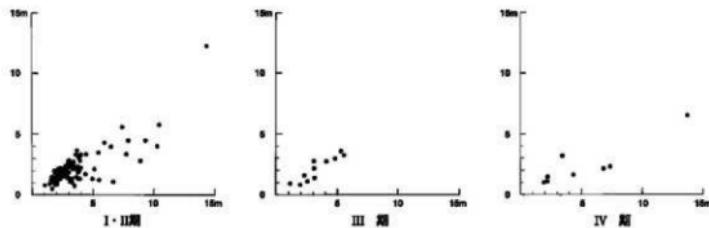
土壙は149基を検出。前期はSK024の1基のみ。I・II期で111基の土壙が住居群を囲む様に分布し、殊に住居群空隙地の東部には、土壙87基が調査区北辺と、東の甕棺墓に沿うように集中する。規模は1~5m以下に集中するが度数分布では5つの群に分かれる (Tab.2)。5mを超える土取場状の大型土壙も17基と多く、最大のSK75で14mを超える。相当量の土を排出している。深さは10cm弱から30cm前後が殆ど浅い土壙で、地山の礫層を掘り抜く1mを超えるものはなく、土取りを目的としたことを裏付ける。III期は激減し、14基が散漫に分布する。大型土壙も5m程のSK109・159の2基のみで縮小する。度数分布は2mからこの間に長幅比11:7で並ぶ。IV期はIII期同様減少し13基が住居群の分布とは逆に、東寄りに分布する。また、10mを超える大型の土取場状の土壙もSK252が再び出現し大型化の傾向を示す。度数分布は4つの群に分かれ再びばらつきをみせる。

掘立柱建物は31棟を検出した。分布は各期・各群での竪穴住居の戸数に概略比例するが、住居がI・II期39%・III期49%・IV期11%を示すのに対し建物はI・II期7棟23%・III期15棟50%・IV期8棟27%と、I・II期とIV期が微妙に逆転し建物の増加傾向が見える。1×2間を含め総柱は18棟でI・II期4棟・III期11棟・IV期3棟、側柱は13棟でI・II期3棟・III期4棟・IV期5棟・時期不詳1棟であり総柱が60%を占め、III期では73%を占める。IV期では側柱5棟全てが桁行3間と大型化が伺える。分布は住居に隣接するものと、10m以上間隔をとって分布するものがある。I期では側柱に前者が多くIII期では総柱で後者をとるものが多い。IV期では側柱が住居の空隙に、総柱が離れて分布する。規模は (Tab.3) I・II期で2.25~6.45mの長幅比13:9で並ぶ傾向にあり、III期では総柱が多いためか3.3~5.6mの長幅比5:4のまとまりに、IV期では2.95~10.7mの長幅比21:11前後で並ぶ。方位は (Tab.4) I・II期で丘陵稜線のN~73°~Eの地形に沿う傾向にあり、一部地形にも磁北にも沿わない稜線軸に45°程傾くもの (SB36・51) が現れる。III期はこれが増大し直交方向と合わせ主体を占める。IV期はこの直交方向が殆どを占める。

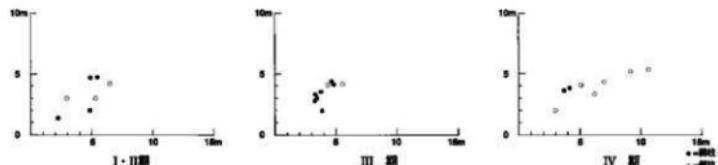
溝は1~3区でI・II期で2条、III期で3条、IV期で2条を検出した。I・II期はA・B群間の稜線軸方向に、III期は集落西を画する南北方向の溝と居住区、倉庫群を分かつ南北方向溝を、IV期は集落東部で稜線軸方向とこれに直交する溝を検出した。

全体を概観すると、前期は土壙1基と土器棺1基のみ、集落形成に先行して2号排水1区で5世紀初頭から前半に円墳SK27・28号墳が造営され以後III期まで追葬される。I・II期から本格的に集落の形成が始まり、A・B群を中心に住居群が分布し、はずれの東部に建物が営まれる。土壙は集落を囲むように配され殊に東部に集中し浅く大規模土壙が多い住居の壁・屋根材用の土を供給した可能性が高い。建物SB45・52・57は土壙に囲まれ、屋根材用の土を供給し周溝を兼用するものと考える。III期は西部の居住区・東部の倉庫群と分化が顕著となり2号排水1区・2号支線道路区・4区に集落が拡大する。IV期は集落の縮小期で建物の比重が高まり4区に中心が移行する。

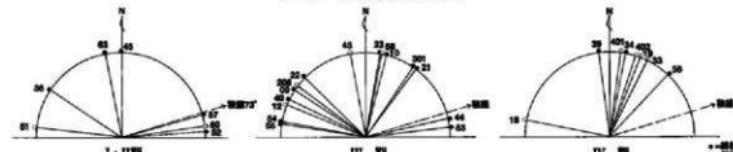
出土する関連資料として (Tab.5)、加耶系や百濟系等半島系資料が他遺跡に比べ突出して多く、全遺構の20%54遺構から検出される。鉄滓等製鉄関連遺物もI・II期の7遺構以後IV期まで15遺構で検出され、古墳や住居出土の鉄器と合わせ半島色が強く伺える。また、100gを超える大型の管状土器の多量出土も特異でI・II期の13遺構をはじめ19遺構で検出される。I・II期では8遺構で半島系土器と併せており半島由来の大型魚を対象とした川漁法の可能性も考えられ、特異な形態の木製浮子も第4次調査から検出される。以上、大型建物とともに半島文化との深い関わりを示している。



Tab.2 土壤深度分布表



Tab.3 建物密度分布表



Tab.4 建物方位分布表

Tab.5 開遠遺物出土遺構一覧表(基數)

開遠遺物出土住居(SC)

	I-II期(33)	III期(34)	IV期(7)	計
平島系遺物	31・69・75・100(4)	03・23・29・32・47・420(6)	11・19(2)	12
別の開遠遺物	12・20・21(3)	06・14・24(3)	11(1)	7
土器				0

開遠遺物出土土器(SK)

	I-II期(111)	III期(14)	IV期(9)	計
平島系遺物	03・25・33・75・91・92・95・96・98・105・ 130・135・142・146・161・164・167・168・175・176・ 182・183・185・189・201・204・214・225・236・240・ 245・247・248・261(4)	04・152・252・253(4)	93・94(2)	
別の開遠遺物	37・78・167・214(4)	253(1)		40
土器	17・75・98・105・135・158・161・164・168・169・ 188・201・204(13)	160・262(2)		5

開遠遺物出土車輪(SB)

	I-II期(7)	III期(15)	IV期(8)	計
平島系遺物	61(1)		33(1)	2
別の開遠遺物		09・301(2)	40(1)	3
土器				0

開遠遺物出土溝(SD)

	I-II期(2)	III期(3)	IV期(3)	計
平島系遺物		21(1)	41・45(2)	3
別の開遠遺物	20(1)		41・45(2)	3
土器	04(1)		41・44・45(3)	4

総計

	I-II期(163)	III期(66)	IV期(27)	計
平島系遺物	25%(36)	17%(11)	26%(7)	23%(57)
別の開遠遺物	5%(7)	11%(7)	15%(4)	7%(54)
土器	8%(13)	5%(9)	11%(3)	8%(54)

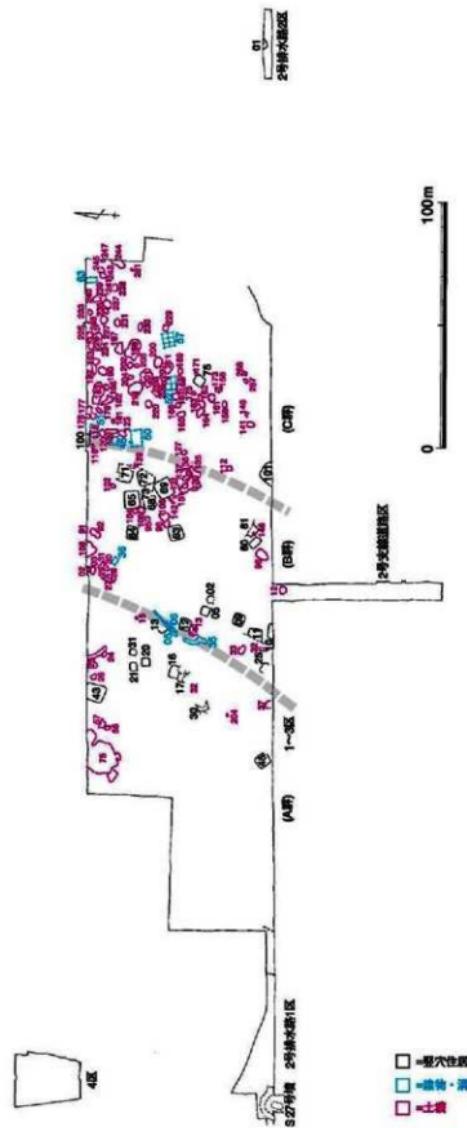


Fig.63 第9次調査古墳時代前期・I・II期造構分布図 (1/2,000)

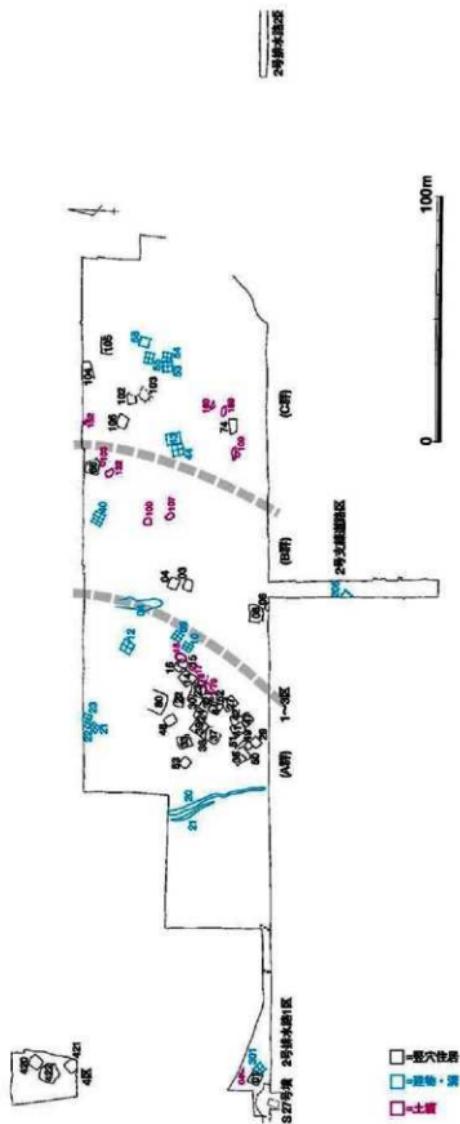


Fig.64 第9次調査古墳時代III期造構分布図 (1/2,000)

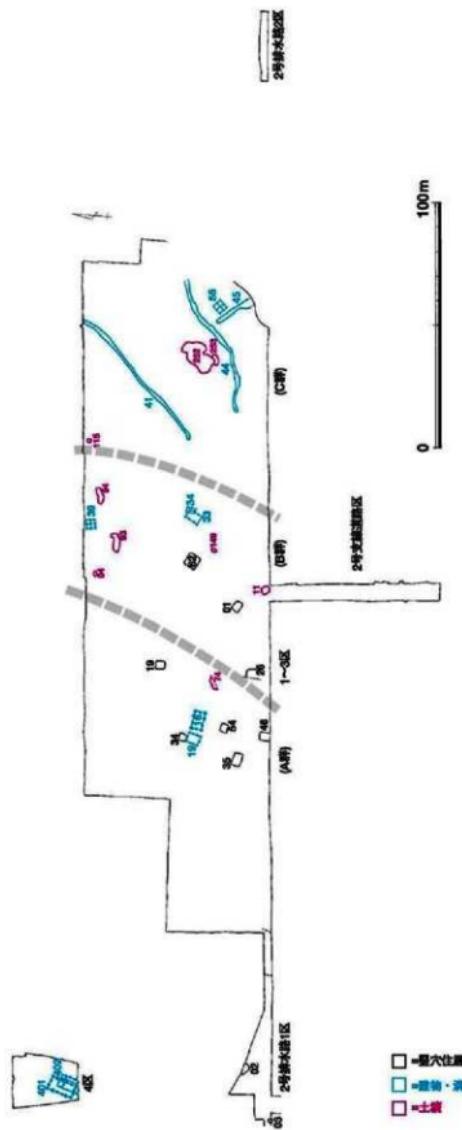


Fig.65 第7次調査古墳時代IV期造構分布図 (1/2,000)

Tab.6 9次調査古墳時代土壤一覧表.1

土壤番号	グリッド	時期	規格 幅×横×深さ(m)	平面形	主な出土物	備考	検査番号
SK002	J12	I B~II	2.75×1.7×0.36	楕円形	陶器器(黒・高环・茎・杯身・杯底) 土器底(灰・堆・堆・堆) 土器片円盤		14
SK003	J12	II	3.5×2.3×0.4	円形	陶器器(黒・茎・杯身・杯底) 土器底(黒・瓶・环) 黒色土器(灰) 収載土器(黒)	SK04に切られる	
SK004	J12	III B~IV	2.0×1.0×0.09	不規形	陶器器(黒・杯身・杯底・高环) 土器器(黒・高环) 土器底(灰・杯身・杯底) 土器底(黒・瓶・环)	SK03を切る	
SK006	J13	後期	1.6×0.95×0.24	椭円形	陶器器(灰) 土器器(黒・高环・环)		
SK011	J14	N	3.25×3.5×0.58	円形	陶器器(黒・杯身・杯底) 土器底(黒・高环)		
SK012	J14	II	3.6×3.0×?	不規形	陶器器(黒・杯身・杯底) 土器底(黒・高环)		
SK013	J13	I B~II	1.85×1.2×0.21	円形	陶器器(灰・杯身・杯底) 土器底(灰・环・瓶)		24
SK014	J13	II	1.9×1.1×0.06	椭円形	陶器器(黒・杯身・杯底) 土器底(黒・杯・瓶・瓶)		
SK015	J13	I B~II	1.7×1.15×0.17	円形	陶器器(灰・杯身・杯底) 土器底(灰)		
SK017	K13	II ~ III A	3.2×1.4×0.05	椭円形	陶器器(黒身・杯身・瓶环・瓶底) 土器底(黒・环・高环・瓶)		41
SK018	J13	III A	4.9×3.0×0.22	不規形	陶器器(灰身・杯身・瓶环・瓶底) 土器底(黒・环・高环・瓶) 土器片円盤 売土塊	SC15(III A) を切る	41
SK019	J13	II	10.3×2.0×0.15	不規形	陶器器(黒)	SD5のつまか SB9・10に切られる	
SK020	J13	後期	2.2×2.0×0.4	円形	陶器器(黒・外) 土器底(高环・茎・瓶)		
SK023	K13	III B	1.2×1.0×0.56	不規形	陶器器(不・身・瓶) 土器底(灰)	SB16柱穴	
SK024	J13	後期	2.2×1.5×0.19	円形	陶器器(灰・瓶)	SK25に切られる	6
SK025	J12	I B~II	10.4×5.8×0.85	不規形	陶器器(灰・瓶・茎・高环) 土器器(高环・环・瓶・瓶) 土器底(灰・瓶・茎・高环) 土器底(灰・环・瓶・瓶) 銀石	SK24を切る 溝を持つ	10
SK026	K12	I B~II	2.8×1.9×0.31	楕円形	陶器器(黒) 土器底(黒・环・茎・瓶)		10
SK027	J13	I B~II	3.45×1.8×0.07	不規形	陶器器(黒・环・高环) 土器器(黒・环・高环・瓶)	SK28・29を切る	14
SK028	J13	I B~II	1.8×1.5×0.09	円形	陶器器(灰身) 土器底(环・瓶・茎)	SK29を切り 27に切られる	
SK029	J13	I B~II	5.2×3.7×0.01	不規形	陶器器(黒・瓶) 土器底(黒・环・瓶・环・瓶)	SK27・28・30に切られ 31を切る	14
SK030	J13	II	2.9×1.35×0.78	椭円形	陶器器(黒・瓶・茎・高环) 土器器(高环・环・瓶・瓶) 土器底(灰)	SK29を切る	
SK031	J13	II	0.9×1.1×0.03	椭円形	陶器器(灰・环・瓶) 土器底(灰・环・瓶)	SK29に30に切られる	
SK032	J14	II	3.75×1.4×?	円形	陶器器(灰) 土器底(灰・环・瓶)	SC6の可逆性アリ	
SK033	J14	I B~II	3.7×2.0×0.08	不規形	陶器器(黒・杯身・杯底・高环) 土器底(黒・环・吸管 土器・瓶) 土器片円盤 売土塊 細縫車		24
SK037	K14	I B~II	2.3×1.3×3.1×0.32	不規形	陶器器(灰身・杯身・瓶・高环) 土器底(黒・茎・瓶・ ニチュア・グ・高环) 土器底(灰・茎・瓶)		10
SK056	K13	I B~II	1.55×1.7×0.08	円形	陶器器(灰) 土器底(黒・环・茎) 土器片円盤	SD14に切られる	
SK057	K13	II	3.2×2.3×0.04	不規形	陶器器(灰身) 土器底(黒・环・茎)	SD21に切られる	
SK074	K13	N?	1.3×0.53×0.51	不規形	陶器器(灰身) 土器底(灰・环・不・瓶) 土器片円盤	SD10可能性 SK49を切る SD33に切られる	
SK075	K12	I B~II	14.3×12.7×0.55	不規形	陶器器(灰・茎・瓶・高环・瓶) 土器底(黒・瓶・瓶) (黒・外・瓦器土器・灰・吸管) 土器・土器片円盤 破石	SK76に切られる 土取	7
SK076	K13	II	3.9×2.9×0.23	不規形	陶器器(灰身・杯身・瓶・高环) 土器底(黒・茎・瓶・ 灰・高环) 土器土 色 土器片円盤 狹縫	SK75を切る	
SK078	K13	N?	0.5×1.3×3.1×0.07	不規形	陶器器(灰身・杯身・瓶) 土器底(灰・环) 土器片円盤土塊	SC6可能性 SC52(II A) を切る	
SK079	K13	II B~B	1.7×1.5×0.2	不規形	土器底(灰) 土器底(灰・环・茎)	SC6の可能性を SK44で切られ 78・29を切る	
SK091	I12	I B~II	0.95×1.9×0.53	不規形	陶器器(灰身・瓶・高环・瓶) 土器底(黒・环・瓶・ 茎・高环・瓶) 土器底(灰・环)		
SK092	I12	I B~II	3.0×2.5×0.49	双円形	陶器器(黒・环・瓶) 土器底(黒・环・高环・ 瓶) 土器底(灰) 土器片円盤 破石		
SK093	J13	N	7.5×2.3×0.2	不規形	陶器器(灰身) 土器底(灰・环・瓶・高环・ 瓶) 土器底(灰) 土器片円盤 売土塊		44
SK094	I12	N	6.85×2.2×0.38	不規形	陶器器(灰身・杯身) 土器底(黒・环・瓶) ニチュア 土器土 茎 土器片円盤		
SK095	I13	I B~II	2.05×2.0×0.19	楕円形	陶器器(灰身・杯身・瓶・高环・茎) 土器底(黒・ 灰・高环) 收載土器(灰) 土器片円盤 売土塊	SK100に切られる	17
SK096	I13	I B~II	2.9×2.3×0.78	円形	陶器器(灰身・杯身・瓶・高环・茎) 土器底(灰・灰・ 高环・瓶) 土器底(灰)		17
SK098	J14	I B~II	5.54×3.5×0.11	円形	陶器器(灰・杯身・瓶) 土器底(黒・环・ 瓶・高环・瓶) 土器底(灰) 土器片円盤 土石	SC63(I B) に切られる	
SK100	I13	III A	3.1×2.9×0.32	不規形	陶器器(灰身・杯身・瓶) 土器底(黒・环・ 瓶・高环) 土器底(灰) 土器片円盤	SK95を切る	41
SK102	I13	I B	2.3×1.6×0.3	椭円形	陶器器(灰身・杯身・瓶) 土器底(黒・环・ 瓶) 土器片円盤		
SK103	I13	III A~B	2.42×1.62×0.43	不規形	陶器器(灰・杯身・瓶) 土器底(黒・环) 土器底(灰)		
SK104	I13	I B	2.7×2.2×0.73	不規形	陶器器(灰身・杯身・瓶) 土器底(灰・环・ 瓶) 土器片円盤		
SK105	I13	I B~II	3.35×2.8×0.3	不規形	陶器器(灰身・杯身・瓶・高环・茎・灰・ 瓶・高环・瓶) 土器底(灰) 土器底(灰・环・ 茎・高环・瓶) 土器片円盤	SK105に切られる	
SK106	I13	I B~II	2.2+α×1.7×0.14	不規形	陶器器(灰身・杯身・瓶・高环・茎・灰) 黑色土器(灰) 收載土器(灰) 土器片円盤 売土塊	SK96を切り 107に切られる	
SK107	I13	N	3.2×2.1×0.12	不規形	陶器器(灰・环・茎・高环・瓶・灰・高环・ 瓶) 土器底(灰・环・茎・高环・瓶) 土器片円盤 土石	SK106を切る	
SK108	J12	II	5.5+α×1.7×0.11	不規形	陶器器(灰・环・茎・高环・瓶) 土器底(灰・环・ 茎・高环・瓶) 土器底(灰) 土器片円盤 土石		
SK109	I14	I ~ II B	5.55×3.2×0.14	不規形	陶器器(灰・环・茎・高环・瓶) 土器底(灰・环・ 茎・高环・瓶) 土器底(灰) 土器片円盤 土石		
SK112	I14	II	2.4×1.5×0.45	円形	陶器器(灰身) 土器底(灰・环)		
SK115	I12	N	2.15×1.5×0.1	不規形	陶器器(灰身) 土器底(灰)		
SK116	I12	II	2.01×0.8×0.28	楕円形	陶器器(灰身・杯底・場合) 土器底(黒・环・ 瓶) 土器片円盤		
SK118	I12	II	1.8×1.4×0.19	不規形	陶器器(灰・环・茎・高环・杯身・杯底・場合) 土器底(灰) 黑色土器(灰) 土器片円盤 破石	SB51の中	26
SK120	I13	I B~II	3.52×3.3×0.24	円形	陶器器(灰・杯身・杯底) 土器底(灰・环・ 茎・高环・場合) 土器底(灰) 土器片円盤 売土塊	SK121に切られる	

Tab.7 9次調査古墳時代土壤一覧表.2

土 墓 番 号	グリッド	時 期	規 模 縦×横×深さ(m)	平面形	主な出土遺物		備 考	特 国 番 号
SK121	II3	I B~II	5.52×1.2×0.22	不整形	瓦器類(壺、高杯、杯盤、杯蓋、壺蓋) 土師器(高杯、壺、瓶) 土面片凹盤、燒土塊	SK120を切る		
SK122	II3	後期	1.5×1.32×0.46	円形	瓦器類(壺、高杯、杯盤、杯蓋) 土師器(壺、瓶)			
SK123	II3	I B~II	3.15×2.3×0.31	楕円形	瓦器類(壺、高杯、杯盤、杯蓋、壺蓋) 土師器(壺、瓶、高杯、瓶、壺、杯盤、杯蓋)			
SK124	II3	後期	1.8×1.4×0.12	円形	瓦器類(壺、高杯、杯盤、杯蓋) 黒色土器(印)	SB44に切られる		
SK127	II3	I B~II	2.25×2.0×0.51	円形	瓦器類(壺、高杯、杯盤、杯蓋) 土面片凹盤、燒土塊			
SK130	II3	I B	5.0+α×4.3+α×?	不整形	土師器(壺、瓶) 土面片凹盤	SK131を切り、135・147に切られる	20	
SK131	II3	I B	3.4+α×7.8×?	不整形	瓦器類(壺、高杯、杯盤、杯蓋、壺蓋) 土師器(壺、高杯、壺、瓶) 黑色土器(印)	SK137を切り、130・135・147に切られる	20	
SK132	II3	IIA	4.1×2.9×0.27	不整形	瓦器類(高杯、西壺) 土師器(壺、瓶、环、高杯)	SC71(1・II) を切り、土面片凹盤	41	
SK135	II3	II	3.0+α×1.5×0.12		瓦器類(壺、瓶、杯盤、杯蓋、壺) 土師器(壺、瓶、环、环、环、壺蓋) 土面片凹盤(印) 黒色土器(印)	SK130・131を切り	20	
SK136	II3	I B	1.15+α×1.5×0.22		瓦器類(壺、高杯、瓶盤、石台)	SK137に切られる		
SK137	II3	I B	1.2+α×3.4+α×0.33	円形	瓦器類(壺、环、环、环) 土師器(壺、环、高杯)	SK131に切られる		
SK138	II3	後期	1.7×1.15×0.15	方形	瓦器類(壺、土面片)			
SK139	II3	I B	1.3+α×1.5+α×?	方形	瓦器類(壺、高杯) 土師器(高杯、壺)	SC71(1 B~II) に切られる		
SK141	I14		3.0+α×2.25×?	不整形	瓦器類(壺、杯身、杯蓋) 土師器(壺、瓶)			
SK142	II3	I B~II	1.0+α×2.3+α×0.8	不整形	瓦器類(壺、高杯、杯盤、杯蓋) 土師器(壺、环、瓶) 土面片凹盤	SK151と同一		
SK145	II3	後期?	1.9×1.5×0.62	不整形	瓦器類(壺、土面片)			
SK146	H14	I B~II	1.2+α×1.7×0.1	円形	瓦器類(壺、把手附、杯身、杯蓋、高杯) 土師器(壺、环、高杯) 南貴土器(印) 土面片凹盤、燒土塊			
SK147	II3	II~	1.4+α×2.3×0.57		瓦器類(壺、土面片)	SK130・131を切り		
SK148	H14	I B	1.45×1.0×0.74		瓦器類(壺、环)	SC61(1 B~II) を切り		
SK149	J13	NA	2.1×1.2×0.22	円形	瓦器類(壺、杯身、高杯) 土師器(壺、环、环)			
SK151	II3	I B~II?	1.7×0.5×0.1			SC142と同一		
SK152	II2	IIIB	1.95×0.89×0.3	楕円形	瓦器類(壺、高杯、杯身、杯蓋、壺、环) 土師器(壺、高杯、环、环) 黒色土器(印) 土面片凹盤、燒土塊			
SK155	H13	I B	1.28+α×1.3+α×?	圓角方形	瓦器類(壺、土面片)	SK173と同一		
SK157	H13	後期	2.8×1.55×0.03	不整形	瓦器類(壺、土面片)			
SK158	H14	I B~II	5.4+α×3.65×0.08		瓦器類(壺、杯身、壺蓋) 土師器(壺、环、高杯)	SK159に切られる		
SK159	H14	I B	2.6+α×1.1×0.9		瓦器類(壺、杯身、高杯、環) 土師器(环、高杯、東教土器) 土面片凹盤、燒土塊	SK158を切り 143と同一	41	
SK160	H13	I B	2.95×2.7×0.06	円形	瓦器類(壺、环、环) 土師器(壺)			
SK161	H13	II	2.15×2.15×0.08	不整形	瓦器類(壺、环、环、环) 土師器(壺、环、环)			29
SK162	H13	II	3.7×2.35×0.1	不整形	瓦器類(壺、杯身、杯蓋) 土師器(壺、环、环、环)	SK163を切り		
SK163	H13	I B	4.0×2.15×0.18	楕円形	瓦器類(壺、土面片)	SK162・164に切られる		
SK164	H13	II	3.7×2.0×0.18	不整形	瓦器類(壺、环、环) 黑色土器(印) 土面片凹盤、燒土塊	SK163を切り		
SK165	H13	I B~II	2.3×2.05×0.09	不整形	瓦器類(壺、环、环) 黑色土器(印) 土面片凹盤、燒土塊			
SK166	H13	I B~II	3.02×2.9×0.27	円形	瓦器類(壺、高杯、杯身、杯蓋) 土師器(壺、环、环) 土面片			
SK167	H13	II	8.85×2.8×0.58		瓦器類(壺、高杯、环、环) 土師器(壺、环、环)	SK168を切り	29	
SK168	H13	I B	2.9×1.7×0.22	不整形	瓦器類(壺、环、环、环) 黑色土器(印) 土面片凹盤、燒土塊	SK167に切られる	29	
SK169	H13	II	2.7×1.8×?	不整形	瓦器類(壺、环、环、环) 土師器(壺、环、环)			
SK170	H13	後期	0.9+α×1.2×0.11	圓角方形	瓦器類(壺、环、环) 土面片	SK175に切られる		
SK171	H13	I B	0.9+α×0.6+α×0.12		瓦器類(壺、土面片)	SK158と同一		
SK173	H13	I B~II	1.4+α×1.8×0.08	圓角方形	瓦器類(壺、环、环) 土面片			
SK175	H13	II	1.8×1.0×0.21	楕円形	瓦器類(壺、环、环、环) 土師器(壺、环、环) 東教土器(印) 烧土塊、砾石			
SK176	H12	II	2.7×2.4×0.48	不整形	瓦器類(壺、环、环、环) 土师器(壺、环) 黑色土器(印) 東教土器(印) 土面片凹盤、砾石	SK177を切り		
SK177	H12	I B	5.1×1.1+α×0.4	不整形	瓦器類(壺、环、环、环) 土师器(壺、环)	SK176に切られる		
SK179	H12	II	3.28×1.02×0.52	不整形	瓦器類(壺、环、环、环) 土师器(壺、环)			
SK181	H13	II	2.05×1.1×0.2	圓角方形	瓦器類(壺、环、环、环) 土面片凹盤、燒土塊			
SK182	H13	II	4.85×1.35×0.19	不整形	瓦器類(壺、高杯、杯身、杯蓋) 土师器(壺、环、环) 黑色土器(印) 東教土器(印) 土面片凹盤、燒土塊			
SK183	H12	II	9.4×4.5×0.35	不整形	瓦器類(壺、高杯、杯身、杯蓋) 土师器(壺、环、环) 黑色土器(印) 東教土器(印) 土面片凹盤、燒土塊		26	

Tab.8 9次調査古墳時代土壤一覽表.3

土 墓 番 号	グリッド	時 期	規 模 縦×横×深さ(m)	平 面 形	主な出土遺物	備 考	sondage 番 号
SK184	H12	後期	1.7X1.55X0.42	円形	乳頭器(杯形) 土師器(黒・白)		
SK185	H13	I B	B2.3X1.85X0.5	円形	乳頭器(黒・白・杯形・杯底) 土師器(黒・白) 灰質土器(黒) 地上陶 磐石		
SK190	H13	II	3.65X2.8X0.29	南北方向 約九方形	乳頭器(黒・高杯・杯身・杯底) 土師器(黒・白・高杯・ 約) 黒色土器(白) 灰質土器(黒) 地上陶	26	
SK192	H12	I B	1.7+αX4.35X2	不整形	乳頭器(白) 土師器(白) 土面片円盤	SC104(ⅡA) SK193に切られる	
SK193	H12	II	3.2X2.6X0.2		乳頭器(黒・白・高杯・杯底) 土師器(黒・白) 黑色土器(白) 地上陶 土面片円盤 磐石	SK192を切る	
SK197	H13	I B~II	2.3+αX1.7X0.1	横円形	乳頭器(黒・高杯・杯身・杯底) 土師器(黒・高杯・ 約) 土師器(黒・高杯・杯・約) 黑色土器(杯・高杯) 灰質土器(白) 土面片円盤 地上陶	SD41に切られる	29
SK198	H13	I B~II	8.0X4.5X0.33	不整形	乳頭器(黒・白・高杯・杯身・杯底) 土師器(白) 土師器(白・黒・白・杯・杯底) 土面片円盤 土壁		33
SK200	H13	I B	4.5X3.35X0.19	円形	土師器(白) 土面片円盤	SK211・SB95に切られる	
SK201	H13	I B~II	6.5+αX4.0X0.13	不整形	乳頭器(黒・白・深外彌合台・杯底・杯身・杯底・ 約) 土師器(白・杯・杯・杯底) 黑色土器(白) 灰質土器(白・杯・手付付) 磨擦車(半成品) 地上 陶 土面片円盤 磐石片青瓦玉 磐子	SC103(Ⅱ~Ⅲ) SD41に切られる	33
SK202	H13	II	2.5X1.9X0.23	南北形	乳頭器(黒・杯身・杯底) 土師器(白・約) 地上陶	SD41に切られる	
SK203	H13	I B~II	2.0+αX3.0X0.28	円形	乳頭器(黒・高杯・杯身) 土師器(杯・約) 磐石		
SK204	H13	II	2.0X1.5X?	不整形	乳頭器(黒・高杯・杯身・杯底) 土師器(白)		
SK206	H13	I B~II	3.25X1.35X0.26	不整形	乳頭器(杯) 土師器 变化系	SB52に切られる	
SK207	H13	I B~II	3.5X0.7X?	南北形	乳頭器(黒・杯身) 土師器(杯・約) 地上陶	SB52に切られる	
SK208	H13	II	2.0+αX1.75X0.21	南北形	乳頭器(黒・高杯・杯身) 土師器(白・杯・約) 地上陶	SD41に切られる SC103に切られる	
SK211	H13	II	6.0X4.25X0.19	不整形	土師器(白) 磐石	SB53・SB41に切られる SK203を切る	
SK214	H13	I B~II	6.4X5.15X0.56	不整形	乳頭器(白・黒・白・杯・杯身・杯底・磐石) 土師器 (白・黒・白・白・白・白) 黑色土器(白) 土面片 (手付付) 灰質土器(白) 土面片円盤 仰棺 指石玉	SC103・102(ⅢB) に切られる 土取	38
SK220	H13	II	2.9X2.6X0.04	円形	乳頭器(杯・杯底) 土師器(黒・白) 地上陶	SC103に切られる	
SK222	H12	後期	1.5+αX0.175X?	南北方向 約九方形	乳頭器(杯) 土面片		
SK223	H12	II	1.7X1.45X0.35	不整形	乳頭器(杯・杯底) 土师器(白)		
SK224	H12	II	4.9+αX1.2+αX0.57	不整形	乳頭器(黒・高杯・杯身) 土師器(黒・杯・杯) 土师器(杯) 土面片円盤 土壁	SC105・SK225・ 226・227に切られる 土取	
SK225	H12	II	3.2+αX4.5X0.39	円形	乳頭器(黒・白・杯身・杯底) 土師器(白・杯・杯) 土师器(杯) 土面片円盤 土壁	SK224・225を切る	
SK226	H12	II	2.28X1.45X0.23	方形	乳頭器(杯・杯底) 土师器(杯) 地上陶	SK224を切り、227・225に切られる	
SK227	H12	II	1.2+αX3.1X0.27		乳頭器(杯・杯身・杯底) 土师器(杯・杯) 黑白色土器(杯) 地上陶	SK224・228を切り、SD41に切られる	
SK229	H13	I B	2.6X2.0	不整形	乳頭器(杯)		
SK230	H13	I B~II	3.6X1.45X0.35	不整形	乳頭器(杯・杯底) 土师器(杯・杯)		
SK231	H13	II	3.0X2.45X0.3	不整形	乳頭器(杯・杯身・杯底) 土师器(杯・杯・杯) 黑白色土器(杯・把手付) 地上陶		
SK232	H13	II	3.4X2.5X0.28	四形	乳頭器(杯・高杯・杯身) 土师器(杯・杯・杯) 土师器(杯・杯身・杯底) 地上陶		
SK233	H12	I B~II	2.4X1.7X0.11	不整形	乳頭器(黒・高杯・杯身) 土师器(杯・杯)		
SK235	H12	後期	2.8X2.3X0.2	不整形	乳頭器(杯)		
SK236	H13	I B~II	2.9X1.45X0.13	不整形	乳頭器(杯・高杯・杯身) 土师器(杯・杯) 黑色土器(杯) 仄覆口(杯) 地上陶		
SK237	H13	II	3.9X3.25X0.26	不整形	乳頭器(杯・杯底) 土师器(杯・杯) 土面片円盤	SK239を切る	
SK238	G13	I B	2.6+αX2.18X0.14	南北形 約丸方	乳頭器(杯・杯身・杯底) 土师器(杯・杯・杯) 土面片		
SK239	H13	II	3.35X2.2X0.21	不整形	乳頭器(杯・高杯・杯身) 土师器(杯・杯) 黑色土器(杯) 仄覆口(杯) 地上陶	SK237・240に切られる SD41を切る	
SK240	G12	II	3.01X1.85X0.11	不整形	乳頭器(杯・杯身・杯底) 土师器(杯・杯・杯) 黑色土器(杯) 土面片円盤 地上陶	SK239を切る	
SK241	G13	I B	3.15X1.35X0.04	不整形	乳頭器(杯・杯身・杯底) 土师器(杯・杯・杯) 土面片	SK239に切られる	
SK242	G12	後期	3.18+αX1.55X0.13	南北形	乳頭器(杯・杯身・杯底) 土师器(杯・杯・杯) 黑色土器(杯) 地上陶		
SK243	G13	I B	2.8X1.89X0.6	不整形	乳頭器(杯・杯身・杯底) 土师器(杯・杯・杯) 黑色土器(杯) 地上陶	SK245に切られる	
SK244	G13	I B~II	3.8+αX3.1X0.3	不整形	乳頭器(杯・杯身・杯底・高杯) 土师器(杯・杯・ 杯・高杯) 地上陶		
SK245	G13	II	2.9X1.4X0.41	不整形	乳頭器(杯・高杯・杯身・杯底) 土师器(杯・杯・杯) 黑色土器(杯) 地上陶 地上陶(杯) 收敛土器(杯) 地上陶	SK243を切る	
SK247	G13	I B~II	1.8+αX1.5X0.45	円形	乳頭器(杯・高杯・杯身・杯底) 土师器(杯・高杯・杯) 黑色土器(杯) 收敛土器(杯) 地上陶(杯) 地上陶		
SK248	H12	II	6.0X1.1+αX0.22	不整形	乳頭器(杯・高杯・杯身・杯底) 土师器(杯・杯・高杯・ 杯) 地上陶	SD41に切られる	
SK251	G13	I B~II	1.2X0.79X0.04	方形	土师器(杯) 土面片土器(杯)		
SK252	H13	III~IV	13.8X6.5X0.31	不整形	乳頭器(杯・高杯・杯身・杯底) 土师器(杯) 陶質土器(杯) 地上陶(杯) 收敛土器(杯) 地上陶	SK253を切る	44
SK253	H13	III~IV	4.3+αX1.4+αX0.13	南北方向 約丸方	乳頭器(杯・高杯・杯身・杯底) 土师器(杯) 黑色土器(杯) 地上陶(杯) 收敛土器(杯) 地上陶	SK252に切られる	44
SK267	H14	II	1.9+αX1.4X?	不整形	乳頭器(杯・高杯・杯身・杯底) 土师器(杯) 黑色土器(杯) 地上陶(杯) 收敛土器(杯) 地上陶		
SK268	H14	II	2.0X1.5X0.33	不整形	乳頭器(杯・高杯・杯身・杯底) 土师器(杯)		
SK290	K13	II~III	3.2+αX0.8+αX0.53	南北形	乳頭器(杯・高杯・杯身・杯底) 土师器(杯) 黑色土器(杯) 地上陶(杯) 收敛土器(杯) 地上陶	SK79に切られる	
SK04	2B18	ⅢA	3.5+αX1.1+αX0.4	方形	乳頭器(杯・高杯・杯身・杯底) 土师器(杯・高杯)		58
SK04	2B2R	後期	1.45+αX1.2+αX0.13	方形	乳頭器(杯・高杯)		58
SK05	2B2R	後期	2.05+αX1.55X0.38	南北方向 約丸方	乳頭器(杯・高杯)		58

Tab.9 9次調査古墳時代建物一覧表

建物番号	グリッド	時期	規 模 (幅×奥行×高さ(m))	種類	方位	主な出土遺物	備 考	辨認番号
SB009	J13	Ⅲ～	2.2×3.3×3.3	鰐柱	N-57° -W	須恵器(杯身) 鉄斧	SK19(II)を切る	49
SB010	J13	Ⅲ～	2.2×3.25×2.8	鰐柱	N-14° -E	須恵器(杯・盞・高环) 土師器(盤・杯・壺) 燐土塊 土器片円盤	SK19(II)を切る	49
SB012		ⅢB～	2.2×2.4.25×4.12	鰐柱	N-68° -W	土師器(甕・壺)	SC30(III A)を切る	49
SB016	K13	ⅢB～IV	3×2.6.85×4.3	鰐柱	N-79° -W	須恵器(甕) 土師器(甕)	SC24・39(III A)を切る	52
SB019	K13	IV～	3×2.5.1×3.95	鰐柱	N-22° -E	須恵器(杯・盞・高环) 土師器(甕・壺・盞)	SC33(III B)・34(IV)を切る	52
SB021	K12	ⅢA～	2×2.3.35×3.0	鰐柱	N-37° -E	須恵器(甕・壺) 土師器(甕・壺)	SK57を切る(II) SK75(1B～II)を切る	49
SB022	K12	IV	2×1.3.8×1.75	鰐柱	N-48° -W	土師器(甕・盤・高环)	SK75(1B～II)を切る	49
SB023	K12	Ⅲ～	2×2.3.35×3.0	鰐柱	N-10° -E	須恵器(杯身) 土師器(甕・盤)	SB22と切り合い	49
SB033	I13	IV	3×1.6.1×3.3	鰐柱	N-22° -E	須恵器(甕・壺・高环) 歌賀土器(甕)	SB34と切り合い	52
SB034	I13	IV	2×1.2.95×1.95	側柱	N-11° -E	須恵器(甕・杯身) 土師器(甕・壺)	SB33と切り合い	52
SB036	J13	I B～II	2×1.2.25×1.4	側柱	N-57° -W	砾石		47
SB039	I12	IV	2×2.3.65×3.6	鰐柱	N-7° -W	須恵器(甕・提瓶・杯置・高环) 土師器(甕・壺・壺) 燐土塊	SB40を切る	52
SB040	I12	ⅢB	2×2.4.8×4.1	鰐柱	N-64° -W	須恵器(甕) 土師器(甕) 燐土塊	SB39と切り合い	49
SB043	I13	ⅢA～	2×2.5.6×4.2	側柱	N-10° -E	須恵器(甕・杯身) 土師器(甕・壺)	SB44に切られる	50
SB044	I13	ⅢB～	2×2.4.7×4.4	鰐柱	N-78° -E	須恵器(甕・杯身) 土師器(甕・壺・高环) 燐土塊	SK127(I・II)を切る SB43を切る	50
SB045	I13	II～	2×2.3.0×3.0	側柱	0°	須恵器(杯身・高环・杯蓋・蓋) 土師器(甕・壺) 燐土塊	I雨土坑に囲まれる	47
SB050	I13	II～	3×2.6.45×4.2	側柱	N-82° -E	須恵器(杯身・杯蓋・高环) 土師器(甕・壺)	I雨土坑に囲まれる	47
SB051	I12	II～	3×1.5.25×3.0	側柱	N-54° -W	土師器(甕・高环) 黒色土器(甕) 歌賀土器(甕)	I雨土坑・住居に囲まれる	47
SB052	H13	II～	2×2.5.0×4.65	鰐柱	N-86° -E	須恵器(甕) 土師器(甕) 黑色土器(甕)	SK206・207を切る I～IIの土坑に囲まれる	47
SB053	H13	ⅢB～	2×2.4.5×4.2	鰐柱	N-84° -E	須恵器(杯身) 土師器(甕) 黒色土器(小片)	SB54を切る SK211(II)を切る	50
SB054	H13	ⅢA～	2×2.3.7×3.5	鰐柱	N-80° -W	須恵器(甕) 土師器 燐土塊	SB53に切られる SK211を切る	50
SB055	H13	ⅢA～	2×2.4.0×3.5	鰐柱	N-81° -W	須恵器(甕・杯身) 土師器	SK200(I B)を切る SK54と同期	50
SB056	H13	IV?	2×2.4.1×3.8	鰐柱	N-44° -E	須恵器(甕) 土師器	SD44・45(IV)に囲まれる	52
SB057	H13	ⅢA～?	3×2.5.5×4.65	鰐柱	N-75° -E	須恵器(甕) 土師器(甕) 黒色土器(甕)	I雨土坑に囲まれる	47
SB058	H13	ⅢA～	3×2.3.7×3.5	側柱	N-11° -E	須恵器(杯身・甕) 土師器(甕)	SB55に近似	50
SB063	G12	II～	2×1.4.7×1.95	側柱	N-10° -W	須恵器(甕) 土師器(甕・壺)	SB53に切られる SK211を切る	47
SB206	2支柱造	ⅢA	2×1以上 ·3.5×a×2.3+a	鰐柱	N-53° -W	須恵器(甕・杯身・杯蓋) 黒色土器(甕・高环)	SD56	56
SB207	2支柱造	後期	2×2以上 ·4.65×4.5+a	側柱	N-68° -E	土師器(甕・壺) 燐土塊		56
SB401	4区	IV	5×3.10.7×5.35	側柱	N-5° -E	須恵器(甕・杯身) 土師器(甕・高环) 燐土塊 級器(甕) 級洋	SC422(III B～)を切る	60
SB402	4区	IV	4×3.9.1×5.1	大壁	N-18° -E	須恵器(甕) 土師器(甕・高环)	SC422(III B～)・SB401を切る	60
SB301	2排水1区	ⅢB	2×2.3.7×3.62	鰐柱	N-37° -E	須恵器(杯身) 土師器(甕・高环) 燐洋	SC01(III A)を切る	59

Tab.10 9次調査古墳時代溝一覧表

溝番号	グリッド	時期	規 模 (上幅幅×深(m))	主な出土遺物	備 考
SD004	J13	ⅢA	3.9×0.7	須恵器(甕・高环・壺・杯身・杯蓋) 土師器(甕・高环・杯身・壺) 黒色土器(甕・高环)	SD05・06を切る
SD005	J13	II	0.8×0.2		
SD006	J13	II	0.6×0.2		
SD020	L13-14	ⅢB	0.85×0.15	須恵器(甕・壺・杯・杯蓋) 土師器(甕・壺) 級洋	SC13(II B～II)を切る
SD021	L13	ⅢB	1.6×0.15	須恵器(甕・杯蓋・高环) 土師器(甕・壺)	SC13(II B～II)を切る
SD041	I13 ～H12	IV	1.0×0.15	須恵器(甕・壺・罐・鋸形鋸刃) 土師器(甕・壺) 黒色土器(甕・高环・壺) 黒色土器(甕・高环・壺) 陶質土器(甕) 陶質土器(甕) 烧土塊 伊賀 土師器片円盤 砥石	SC103・104(IV)を切る
SD044	H14 ～G13	ⅢB～IV	0.9×0.3	須恵器(甕・高环・杯身・杯蓋) 土師器(甕・壺)	SK159を切る(143)
SD045	H14	ⅢB～IV	1.5×0.4	須恵器(甕・壺・鋸形鋸刃) 土師器(甕・高环・壺) 黒色土器(甕・高环・壺) 陶質土器(甕) 土師器(甕・壺) 烧土塊 土師器 片勾玉 犬形埴洋 不明鉄器	SC103・104(IV)を切る 板瓦
SD441	4K	後期	0.6×0.06	須恵器(甕・杯) 土師器(甕・壺) 瓷片	

図 版

PLATES



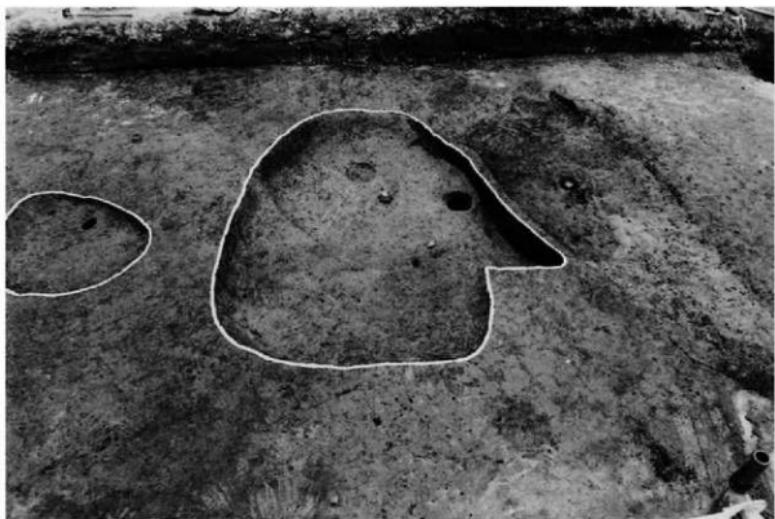
1. 3区・飯盛山遠景(東から)



2. 1・2区全景(南から)



1. K204(北西から)



2. SK25 + 26(南から)



1. SK26遺物出土状況(南西から)



2. SK37遺物出土状況(北西から)



1. SK105遺物出土状況(西から)



2. SK33滑石製鋤車出土状況(南から)



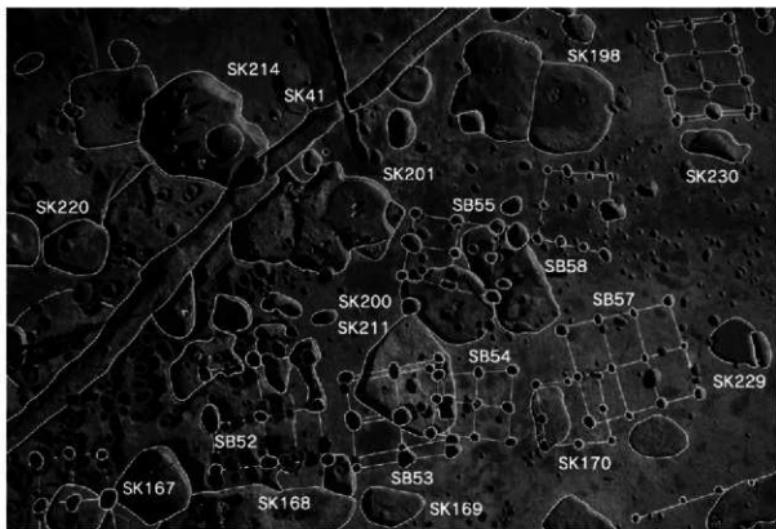
1. SK168遺物出土状況(南西から)



2. SK201遺物出土状況(南から)



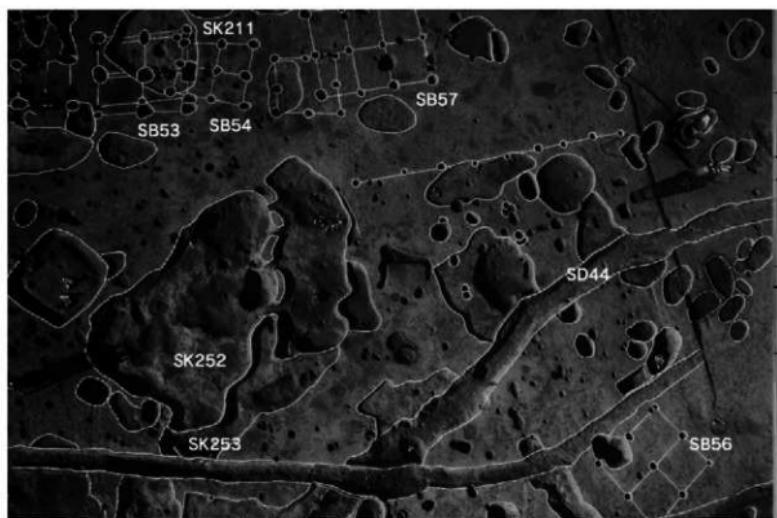
1. SK214遺物出土状況(東から)



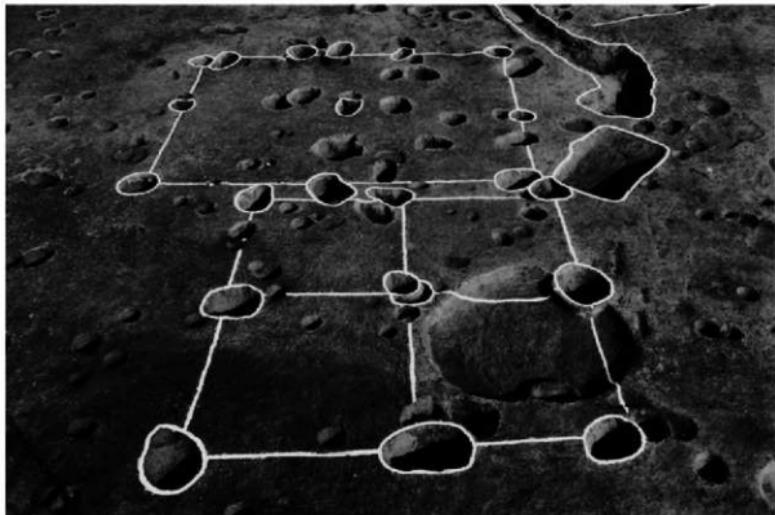
2. SB52・55・57~59・SK198・201他(南から)



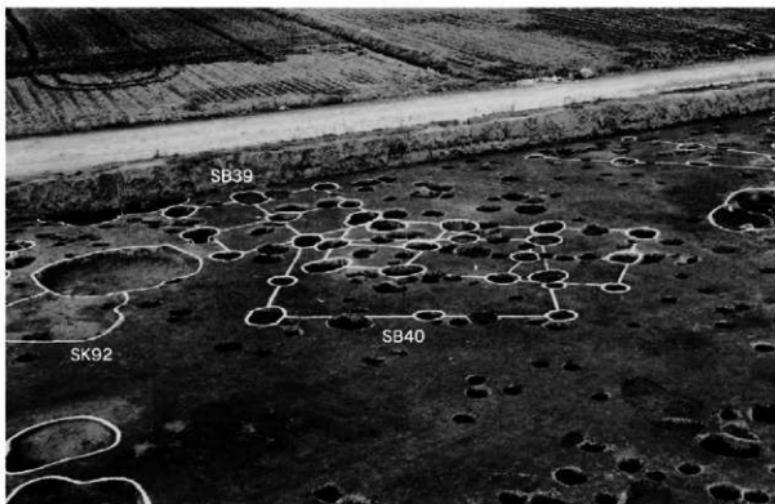
1. SD05・06 SB10・12他(東から)



2. SB52～55・57～59・SK198・201他(南から)



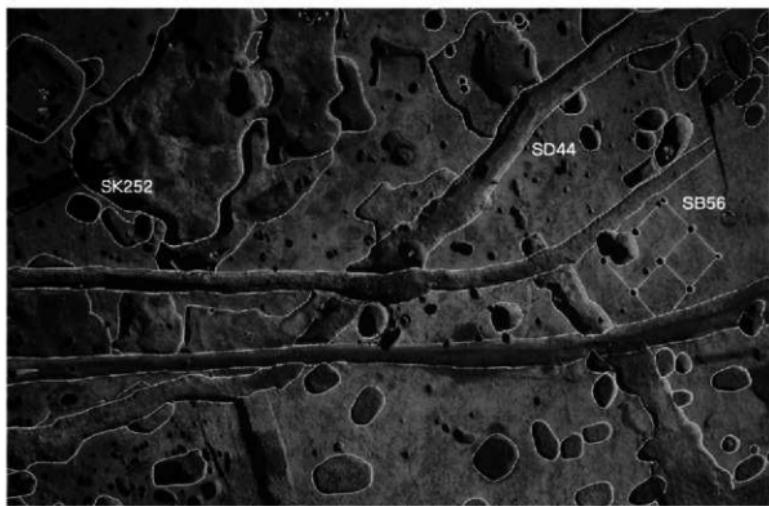
1. SB44・43(手前より・西から)



2. SB39・40他(南から)



1. SB33・34他(東から)



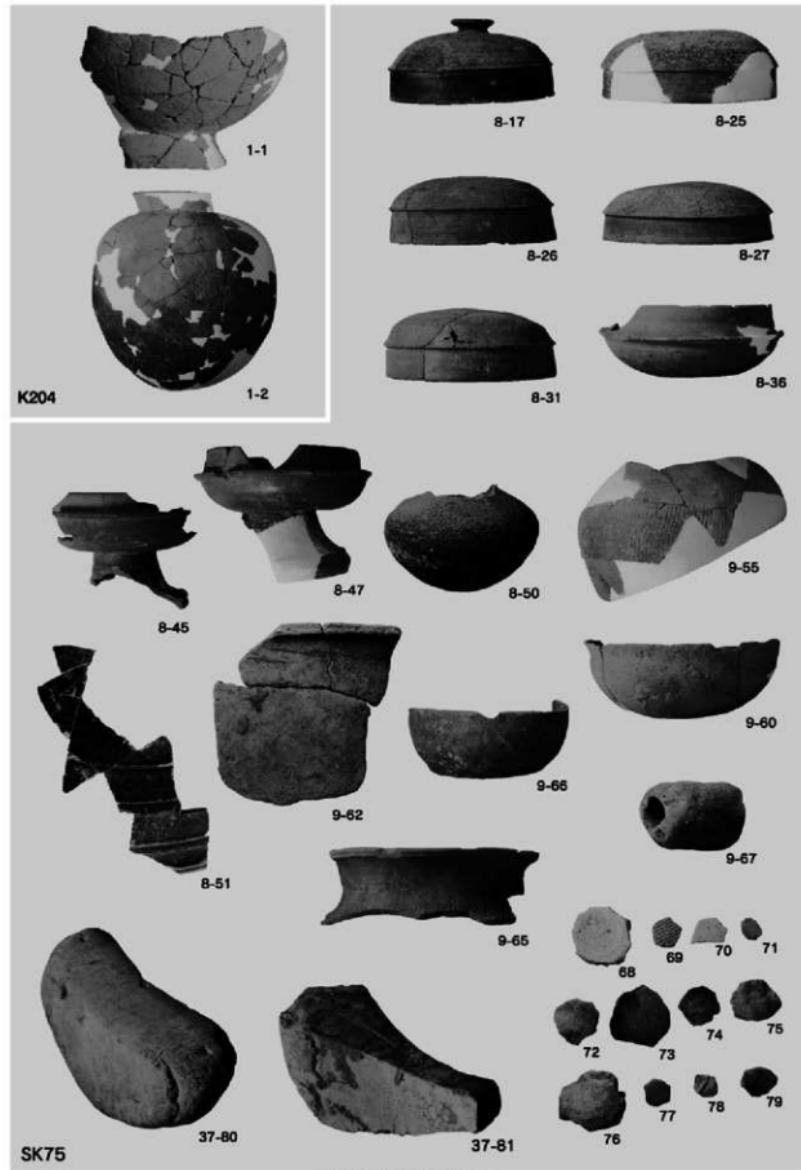
2. SD44・45・SK252・SB56(南から)



1. 2号支線道路区(南から)

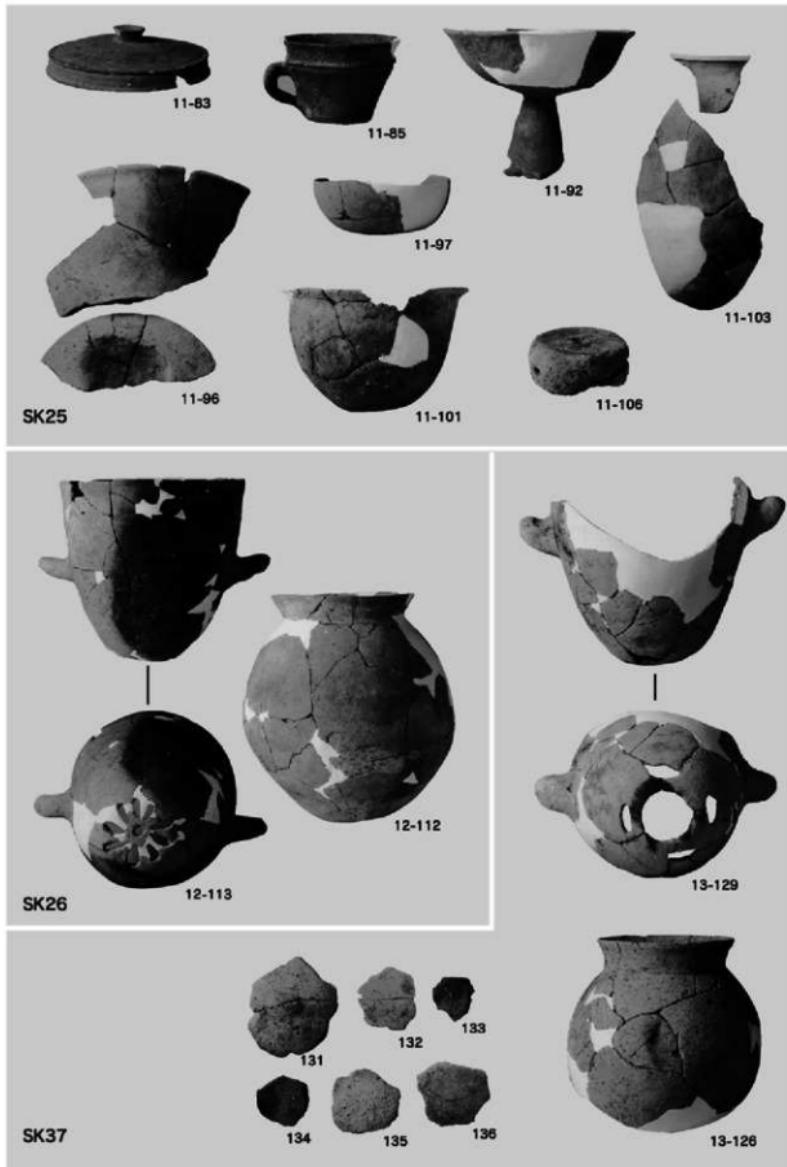


2. 2号支線排水路2区(西から)

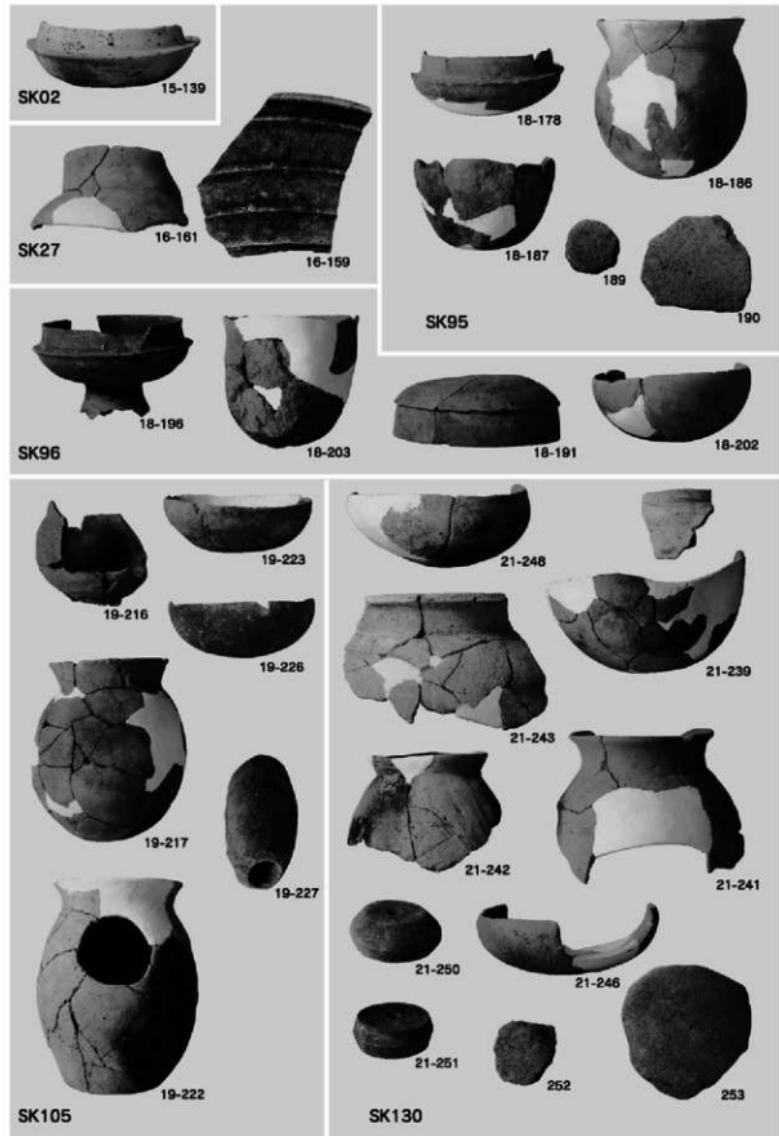


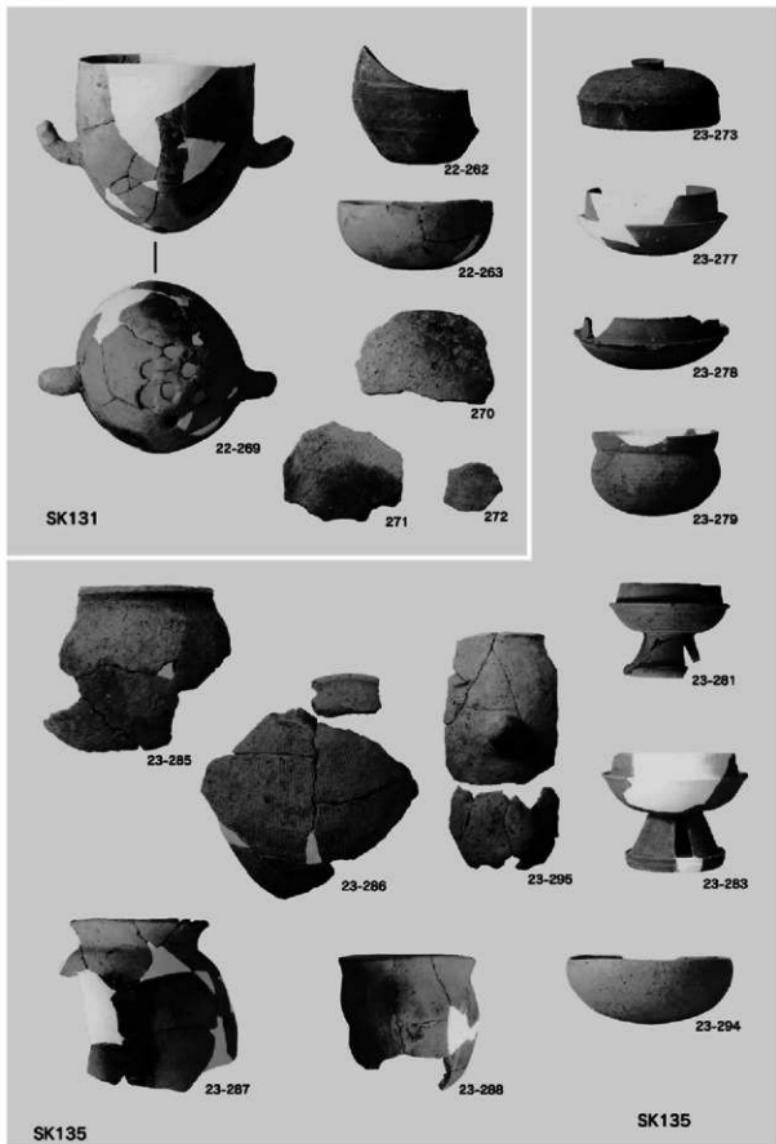
K204・SK75出土遺物

PL.12



SK25・26・37出土遺物





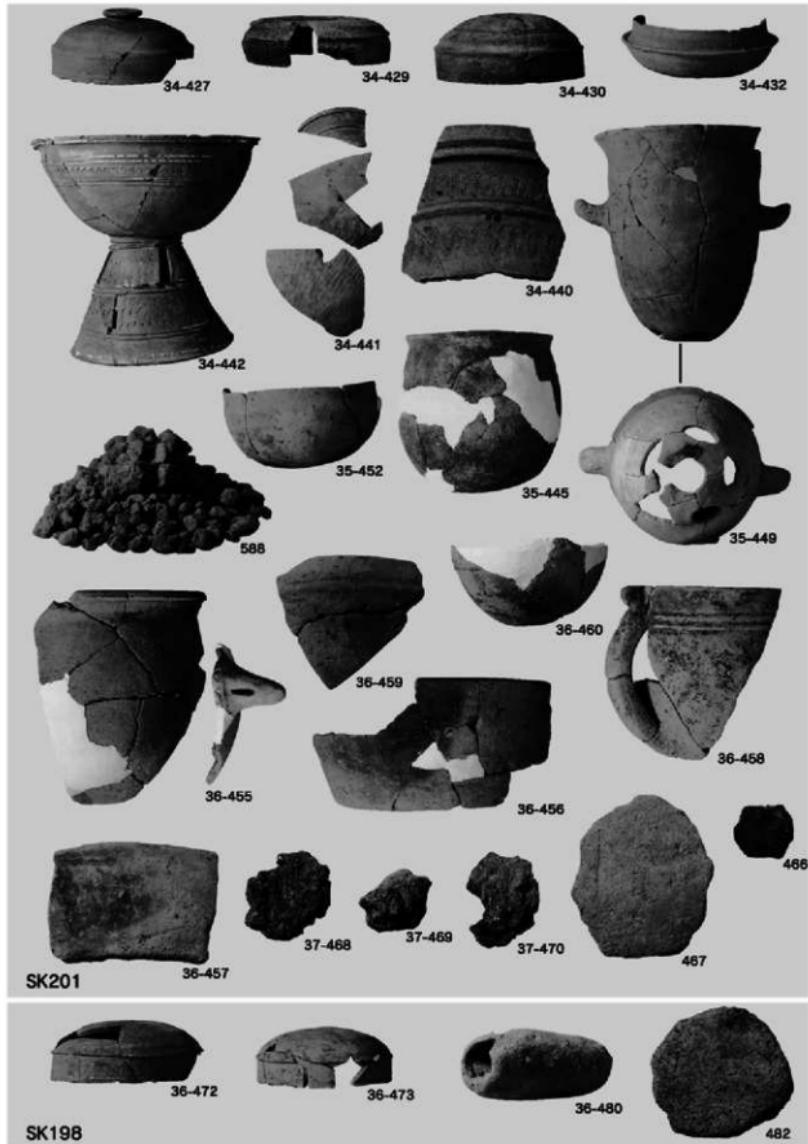
SK131・135出土遺物



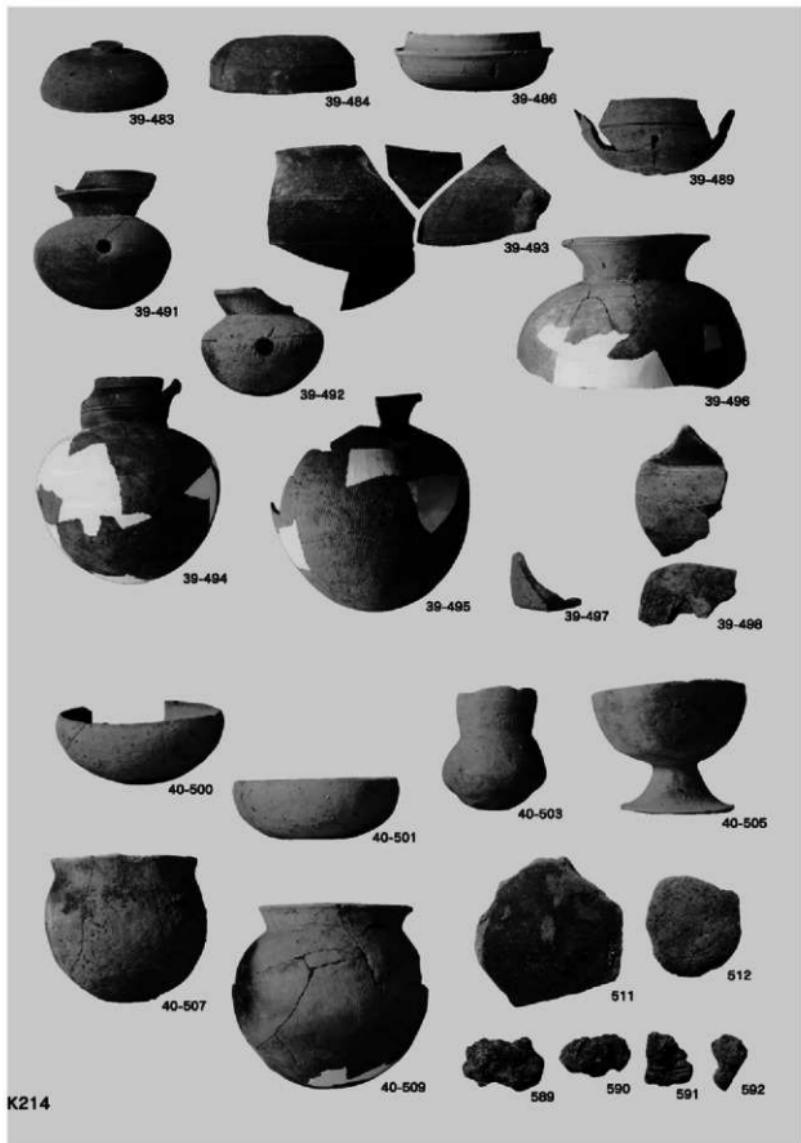
SK13・33・118・190・183・161・197出土遺物



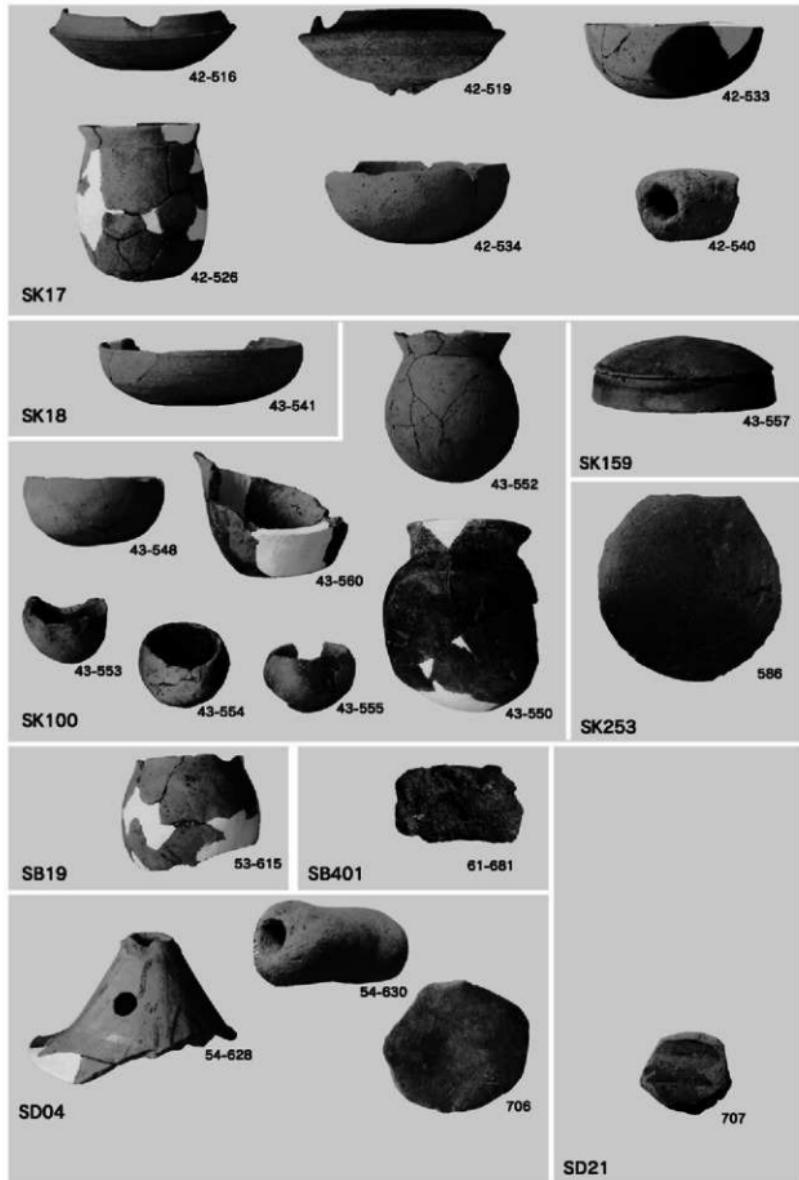
SK167・168出土遺物

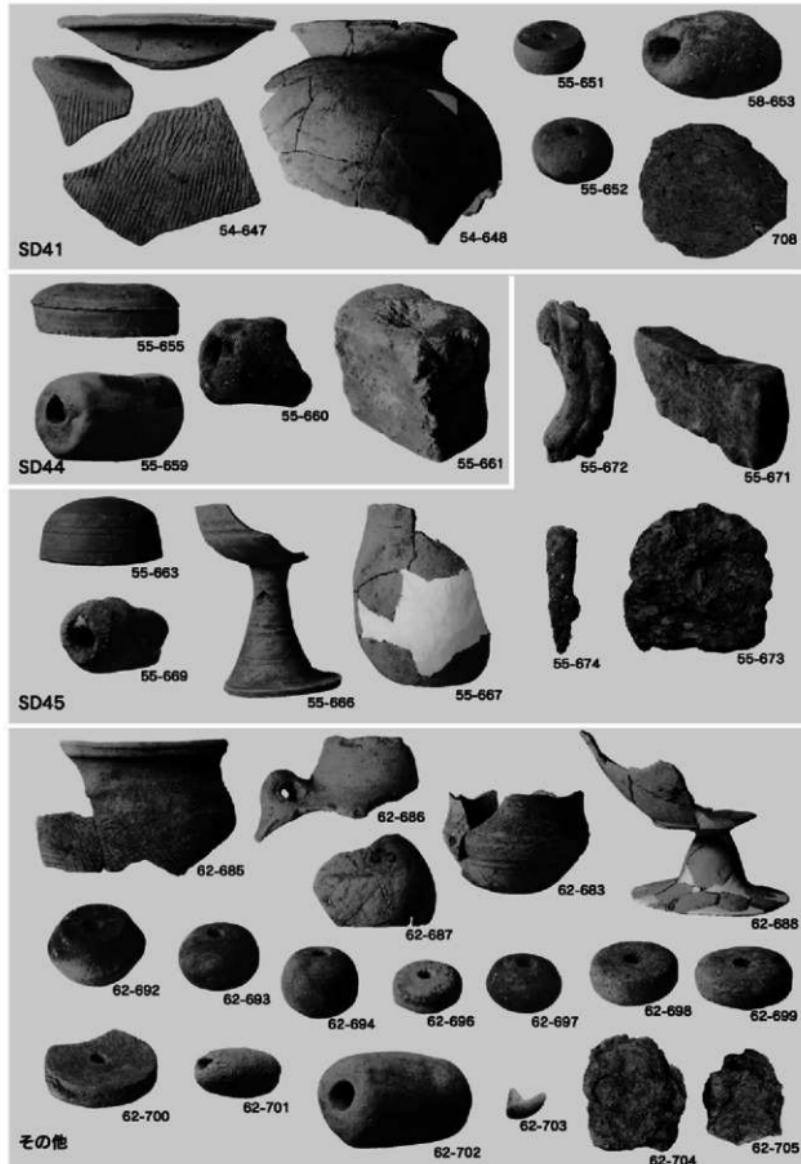


SK201・198出土遺物



SK214 出土遺物





SD41・44・45・その他の出土遺物

報告書抄録

ふりがな	よしたけいせきぐん						
書名	吉武遺跡群						
副書名	飯盛・吉武圓場整備関係調査報告書11						
卷次	17						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	864						
編著者名	加藤良彦						
発行機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL092-711-4667						
発行年月日	20050331						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
吉武遺跡群 第9次	福岡市西区大字 吉武字大石	40135	0405	33 130 32 19 27 13	19850401～ 19860331	28,000	圓場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺稿	主な遺物	特記事項		
吉武遺跡群	集落	古墳	土壙149基 ・建物31棟 溝9条	初輪須恵器 ・土師器 ・陶質土器 ・鐵律・土鍾	多数の半島系陶質・軟質 土器・紡錘車の出土と製 鐵関連遺物の出土 多くの大型管状土鍾の出土		

吉武遺跡群 X VII

飯盛・吉武圓場整備事業関係調査報告書11

福岡市埋蔵文化財調査報告書第864集

—古墳時代生活遺構編2—

2004年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 高良印刷
福岡市中央区港2丁目4番1号